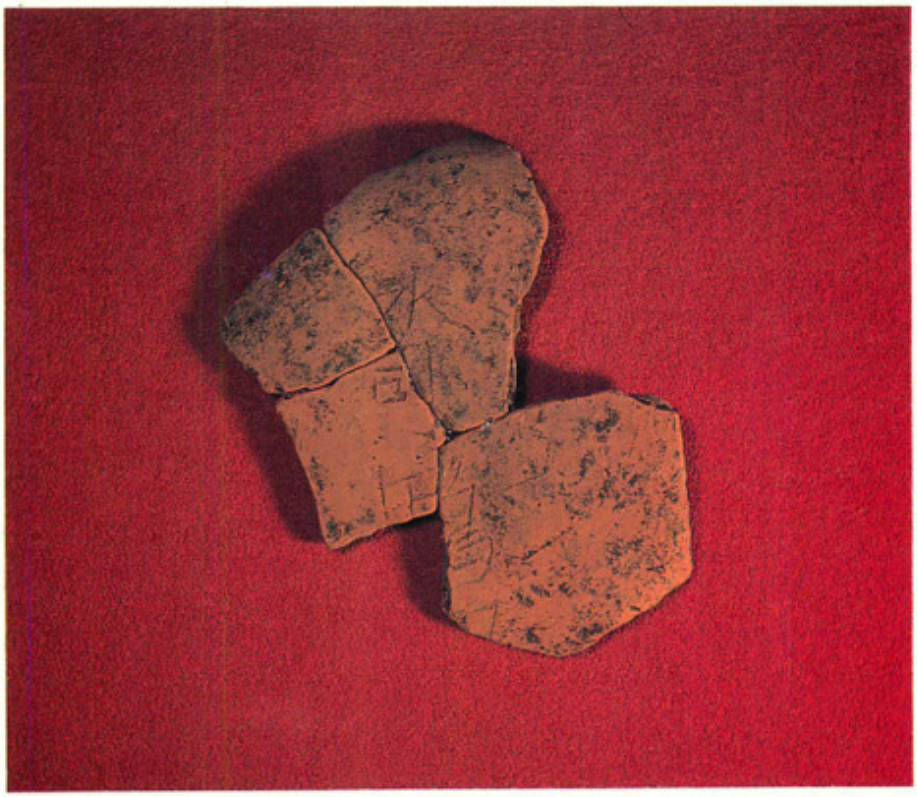
三重県斎宮跡調査事務所年報1981

史跡　斎宮跡

発掘調査概報

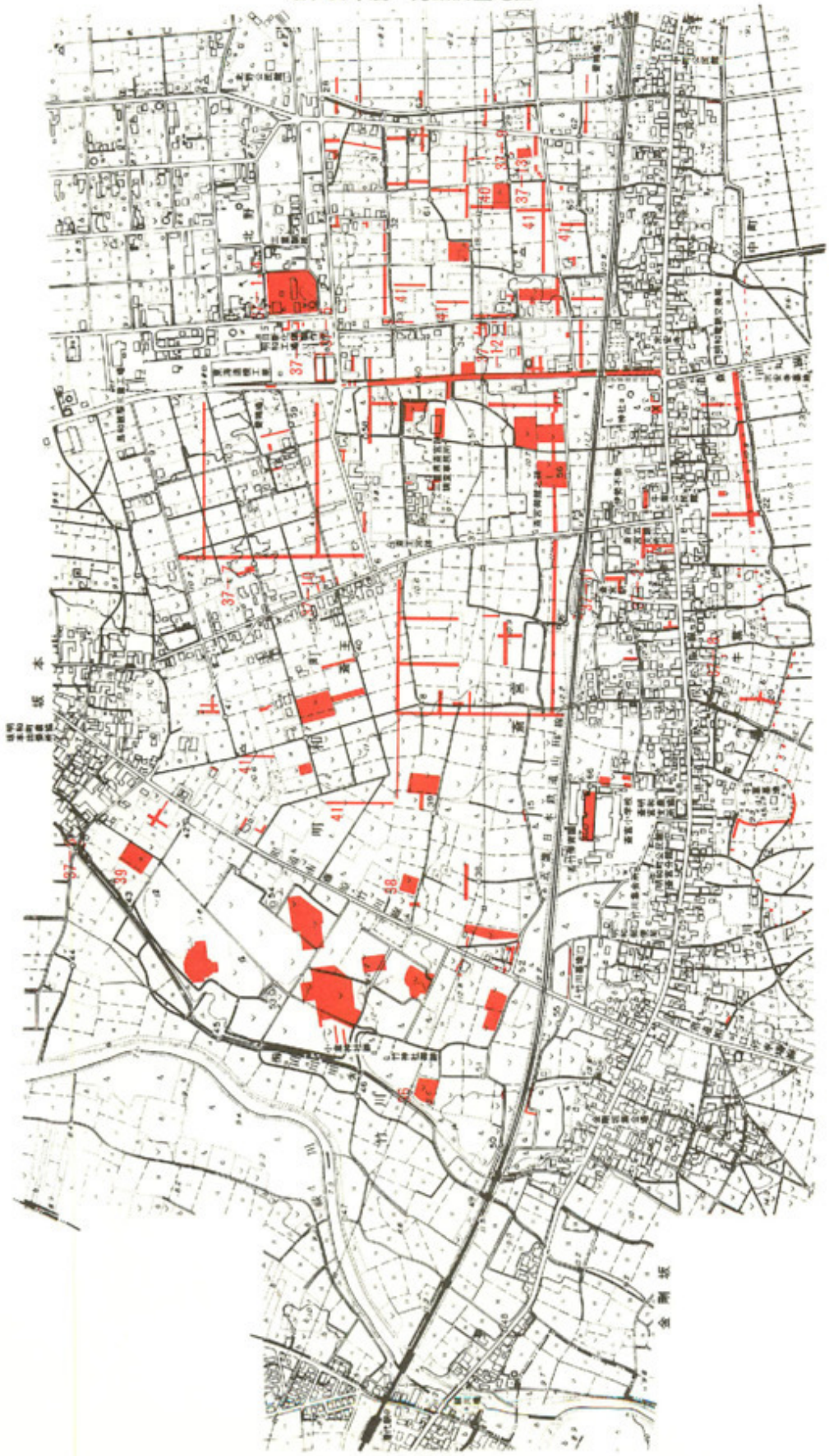
昭和57年 3 月

三重県教育委員会
三重県斎宮跡調査事務所



「水司鴨□」ヘラ描き土器　第37－4次出土

昭和56年度　発掘調査地区



はじめに

「毛比止里乃豆加佐（もひとりのつかさ）」何んと王朝文化の美しい余韻を保つ言葉ではないでしょうか。

昨年夏、斎宮跡第37－4次（西前沖地区）発掘調査で発見された奈良時代の土師器にヘラ描きされていた「水司鴨□」の最初の二字「水司」の読み方として、「和名類聚鈔」にのっております中央官制の「主水司」のこの万葉仮名による訓読みが当てられることになったのであります。

昭和45年住宅開発の事前調査が発端となり、「幻の宮」とまでいわれていた斎宮が、その後約10年の調査によって徐々にその姿を現わし、既に昭和54年3月には国史跡として指定されるに至りましたが、斎宮跡として、今一つ強い裏付けがほしいものと願っていたところであります。

ここに、昭和56年度の発掘調査の成果として、斎宮寮13司の一つ水司の存在を実証し得たことのみならず、中央官制の主水司と同様に、水司に鴨氏が深く関与していたことまでご報告申しあげることができますことは、調査者一同の等しく喜びとするところであります。

調査にあたり、種々の有益なご指導を賜った斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに快く調査地を提供いただいた地元関係各位に心から感謝の意を表するとともに、今後一層のご指導とご協力を念願して、発刊のご挨拶といたします。

昭和57年3月

三重県斎宮跡調査事務所長

佐々木　宣　明

目　　次

Ⅰ　調査の経過……1
Ⅱ　第36次調査……3
Ⅲ　第38次調査……10
Ⅳ　第39次調査……18
Ⅴ　第40次調査……25
Ⅵ　第41次調査……31
Ⅶ　第37次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）……42
Ⅷ　調査事務所要覧……52

例　　言

1．本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和56年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。

2．第Ⅶ章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行なった現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所が担当した。

3．遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第６座標系を基準としている。方位の標示は真北（N5°40′E）を用いた。

4．遺構標示記号は次の通りである。

ＳＢ；建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＡ；柵　ＳＦ；道路

5．斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、椙山女学園大学教授久徳高文氏、京都府立大学教授門脇禎二氏、名古屋大学教授楢崎彰一氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。

6．本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、佐々木宣明、山沢義貴、大西素行、吉水康夫、倉田直純があたり、岩中美絵子がこれに協力した。

I 調査の経過

史跡斎宮跡における昭和56年度の発掘調査は計画調査として第36次、第38次、第39次、第40次の面的調査と、第41次のトレンチ調査を実施した。またあわせて明和町斎宮跡保存対策室が調査主体となって三重県斎宮跡調査事務所が発掘調査を担当する現状変更緊急調査を行なった。調査期間は、昭和56年5月11日から昭和57年3月1日まで、調査した面積は約11,173㎡である。

計画調査は、昭和54年度に策定された保存管理計画による準公有化地区（C地区）の昭和57年度見直しに対応するため、昨年度にひきつづき今年度も、未調査地区の多いC地区に調査地点を選び、面的に調査を実施した。第36次調査は、古里地区南部の旧竹神社南で5月から7月まで実施し、弥生時代の竪穴住居、飛鳥・奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物、鎌倉時代の溝等を検出した。7月から8月にかけては古里地区に隣接する塚山地区で第38次調査を行ない古墳時代の方形周溝・円形周構、奈良時代の竪穴住居、奈良時代・平安時代の掘立柱建物等を検出した。第39次調査は、これまで遺構の状況があまり明確でない古里北部で実施し、古墳時代の方形周溝、古墳時代・奈良時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、鎌倉時代の井戸等を検出した。第40次調査は、12月から翌年2月にかけて実施した。調査地区は中町集落北部の東加座地区で、平安時代の掘立柱建物・溝等を検出し多くの緑釉陶器を発見した。

トレンチによる第41次調査は第40次調査と併行して、中町北部と斎王集落西部において延長395mにわたり実施した。調査の結果、中町北部においては平安時代各期の掘立柱建物・溝等が検出され、区画溝の実態が次第に明らかになってきた。また斎王集落西部では、古墳の周溝、若干の掘立柱建物を検出した。

現状変更に伴う緊急調査は12件の申請箇所について実施した。調査地点は宮域全体におよぶが、準公有化地区（C地区）で4箇所、準住宅地区（D地区）で7箇所、住宅地区（E地区）で1箇所である。このうち第37－1次調査、および第37－4次調査は北野集落西部で計画された分譲宅地開発に伴う約4,700㎡におよぶ調査であり、奈良時代土坑から『水司鴨□』とヘラ描きした土器片をはじめ、掘立柱建物・道路・溝等が検出され、注目される。なお、第37－1次調査、および第37－4次調査と第37－11次調査の調査費は原因者負担である。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
36	6ABI−F	1,087㎡	56. 5. 8〜56. 7.16	明和町竹川字中垣内411他	浦田 健他	計画的面調査C地区
37−1	6AFC−M	2,520	56. 5.13〜56. 6.25	明和町斎宮字西前沖2604	日本経木工業	住宅開発に伴う緊急調査（トレンチ）D地区
37−2	6ADQ−R	27	56. 6. 2〜56. 6.10	明和町斎宮字牛葉3021−2	野田 清	個人住宅に伴う緊急調査D地区
37−3	6AFC−F	46	56. 6.24〜56. 7. 6	明和町斎宮字西前沖2604−6	押田 文男	個人住宅に伴う緊急調査D地区
37−4	6AFC−M	4702	56. 7.17〜56.12.25	明和町斎宮字西前沖2604	日本経木工業	住宅開発に伴う緊急調査D地区
37−5	6AFC−G	33	56. 7.20〜56. 7.25	明和町斎宮字西前沖2604−7	中村 義海	個人住宅に伴う緊急調査D地区
37−6	6ABD−A	32	56. 8.19〜56. 8.29	明和町竹川字古里588−2	北薮 康秋	個人住宅に伴う緊急調査C地区
37−7	6AEC−M	188	56. 9.11〜56.10. 2	明和町斎宮字苅干2861−2	斎王公民館	公民館建設に伴う緊急調査D地区
37−8	6ADR−P	20	56.11.11〜56.11.16	明和町斎宮字木葉山128−8.13.14	富山 晋	個人住宅に伴う緊急調査D地区
37−9	6AGK−E	33	56.11.28〜56.12. 9	明和町斎宮字東加座2355−1	竹内 重雄	個人住宅に伴う緊急調査C地区
37−10	6AED−O	22	56.12.14〜56.12.15	明和町斎宮字楽殿3217−1	渡辺 武	個人住宅に伴う緊急調査D地区
37−11	6ADN−O	18	57. 1.21〜57. 1.26	明和町斎宮字内山3043−3	近畿日本鉄道	斎宮駅便所改築に伴う緊急調査E地区
37−12	6AFH−J	53	57. 1.26〜57. 2. 6	明和町斎宮字西加座2681−1.3.4	渋谷 幸夫	個人住宅に伴う緊急調査C地区
37−13	6AGK−F	242	57. 2. 3〜57. 3. 1	明和町斎宮字東加座2385−3. 2386−3	竹内 三郎	個人住宅に伴う緊急調査C地区
38	6ACD−S	792	56. 7. 6〜56. 8.24	明和町斎宮字塚山3311他	島村紀久子他	計画的面調査C地区
39	6ABD−R. S. T	1,533	56. 9. 7〜56.11.24	明和町竹川字古里580他	今西 四郎他	計画的面調査C地区
40	6AGH−L. M	941	56.12. 7〜57. 2.20	明和町斎宮字東加座2418他	竹内 玄之他	計画的面調査C地区
41	6AGJ−J他	1,404	56.12. 7〜57. 1.20	明和町斎宮地内6ヶ所	中西 金三他	計画的トレンチ調査C地区

第1表　昭和56年度発掘調査地区一覧表

II　第 36 次 調 査

6ABI－F（中垣内地区）

調査地は、旧竹神社跡の南側にあたり、祓川を眼下に見下ろす台地縁辺部に位置する。かつて三彩陶器が出土した第30次調査区より北西へ約 150m隔てた地点である。

調査地の基本的な層序は、上から耕土30cm～40cm、暗褐色土20cm～30cm、黒色土10cm～20cm、そして地山となっているが、東部では地山面がやや高いため、黒色土の認められないところや、西部では台地縁辺部に沿って生じた崖崩れと思われる地山の落ち込みが見られ、ここでは耕土と暗褐色土との間に暗灰褐色粘質土と白色粘質土をサンドイッチ状に挟む層があり、ある時期に置土をしたと解されるところがある。

遺構は黒色土上面から切り込むものと、地山面で検出されるものがあり、調査の結果、弥生時代中期の竪穴住居2棟、飛鳥時代の竪穴住居10棟、奈良時代の掘立柱建物9棟、鎌倉時代の土坑墓1基のほか、それぞれの時期の土坑や、平安時代末葉から鎌倉時代の溝を19条検出した。

（I）弥生時代中期の遺構

竪穴住居SB2128、SB2141と土坑SK2134がある。

竪穴住居は平面プランが不整円形を呈するもので、壁面の掘り込みはいずれも浅く、明瞭でなかった。SB2141は直径が 3.7mで、同期の竪穴住居の規模としては小さいものである。SB2128では、床中央部で炉址と考えられる焼土面が認められた。

土坑SK2134は、径 1.1m、深さ64cm。櫛描横線文を主体とする壺体部片や、条痕を施した甕胴部片などが少量出土した。

（II）飛鳥時代の遺構

検出された竪穴住居のうち、弥生時代中期のものを除くとすべてこの時期のものであり、10棟確認している。これらのうちには、平面プランが方形を呈し、カマド、周溝を有し、四隅に主柱穴の認められるもの（SB2106、SB2125）と、平面形が長方形で、規模が小さく、柱穴の明確でないもの（SB2115、SB2116など）とがある。

SB2106とSB2125は、竪穴住居の規模、構造、棟方向ともよく似ており、おそらく同時期に存在したものと考えられる。

SB2133は、土坑SK2142や鎌倉時代の溝SD2138により大半が切られており、残存する南側のコーナーより竪穴住居と考えたものである。

埋土の切り合いによる前後関係が判明したのは、SB2116→SB2115の一ヶ所のみで、他は

不明であった。

土坑は、ＳＫ2120、ＳＫ2121、ＳＫ2122、ＳＫ2142の４つを検出した。

特に、径3.5ｍ、深さ35cmで、隅丸方形を呈する土坑SK2120からは、多数の土師器甕類のほか、須恵器杯身・杯蓋・高杯・托・土師器杯・杯蓋・椀・把手付鍋などの土器や、土錘２・銅製銙帯鉈尾片らしきものが出土しており、整理箱に12箱分あった。

（Ⅲ）奈良時代の遺構

掘立柱建物９棟（ＳＢ2100、ＳＢ2108、ＳＢ2109、ＳＢ2110、ＳＢ2123、ＳＢ2127、ＳＢ2129、ＳＢ2136、ＳＢ2137）と土坑４（ＳＫ2091、ＳＫ2092、ＳＫ2126、ＳＫ2131）がある。

掘立柱建物は、棟方向によって、北に対し東へ30°偏る一群（ＳＢ2108、ＳＢ2109、ＳＢ2110、ＳＢ2136）と、同じく19°偏る一群（ＳＢ2100、ＳＢ2129、ＳＢ2137）と、これ以外のものがそれぞれ１棟ずつあり、少なくとも、時期的に３期以上の変遷が考えられ、しかも計画的に建物が配置されていたことを窺わせる。

ところで奈良時代と考えたこれらの建物のうち、ＳＢ2110やＳＢ2136の柱掘り方からは、須恵器杯身に返りのあるものや、土師器椀に深い形態のものが出土しており、奈良時代でも初頭、あるいは若干遡る可能性のあるものもある。

土坑から出土した遺物の量は全体に少なく、土坑の中には、あるいは飛鳥時代に入るものも含まれているかもしれない。出土した土器のおもな器種は、須恵器杯身・杯蓋・土師器甕・椀・カマド・甑などで、日常生活に使用するものが中心である。

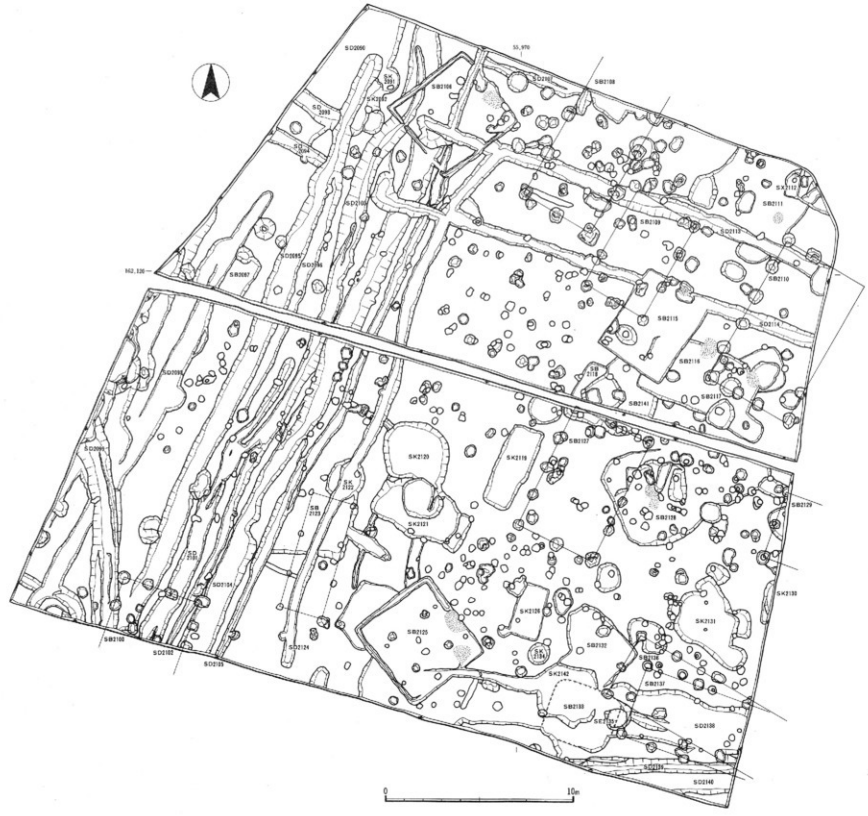
（Ⅳ）平安時代末葉から鎌倉時代の遺構

溝19条、土坑２（ＳＫ2119、ＳＫ2130）、土坑墓（ＳＸ2112）がある。

溝は、幅の狭いもので 0.5ｍ、広いもので 1.5ｍ、深さは10cm～40cmで、台地縁部に沿って多く掘られており、幅約12ｍの溝地帯を形成している。中には、東西溝ＳＤ2113が南に折れて南北溝ＳＤ2124に続いているように、一つの区画をなす溝もある。又溝ＳＤ2099は台地端部に向って徐々に深く掘られており、排水溝としての機能を果たしていたものと思われる。

溝の前後関係については、平面及びセクションによる埋土の切り合い関係によって、SD2139→ＳＤ2140、ＳＤ2105→ＳＤ2114→ＳＤ2124、ＳＤ2104→ＳＤ2103、ＳＤ2096→ＳＤ2095→ＳＤ2098といった順序を確認した。このことは出土遺物の方からも裏付けられている。即ち、比較的古いと考えられる溝ＳＤ2095、ＳＤ2096、ＳＤ2104、ＳＤ2114からは高台のしっかりとした山茶椀や糸切り土師器皿が出土しており、それ以外の溝からは、山茶椀の高台が低く、高台にもみがら痕の多くつくものや、通称ペラと呼んでいる土師器皿を出土している。

ＳＸ2112は平面プランが 1.3ｍ× 0.8ｍの長方形を呈するもので、人骨片・灯明皿（ペラ）２枚・刃部長19cmの鉄製刀が出土しており、中世土坑墓と考えられる。このような土坑墓は、



第１図　第36次遺構実測図（１：200）

古里C地区で3基、D地区で14基、篠林地区で1基、よく似た規模のものが確認されている。

その他、出土遺物がなかったため時期は不明だが、井戸1基（SE2135）を確認している。

（V）遺物

櫛描横線文を主体とした弥生時代中期の土器片をはじめ、竪穴住居や土坑に伴って出土した飛鳥時代の土師器・須恵器及び溝から出土した鎌倉時代の山茶椀・土師器鍋・薄手の皿が大半を占めている。緑釉陶器は平安時代の遺構が皆無に等しいため、2点しか出土していない。墨書土器は溝・土坑から出土したものが3点ある。いずれも山茶椀底部外面に書かれたもので、「大」と読めるものが1点、不明なものが2点ある。このほか遺物包含層より出土した青磁椀4片・玉縁口縁の白磁椀2片・白磁皿1片・北宋銭2（1つは元豊通宝）や、特殊なものとして滑石製の石鍋口縁部やSK2120出土の銅製鋳帯鉈尾部と思われるものがある。

（Ⅳ）まとめ

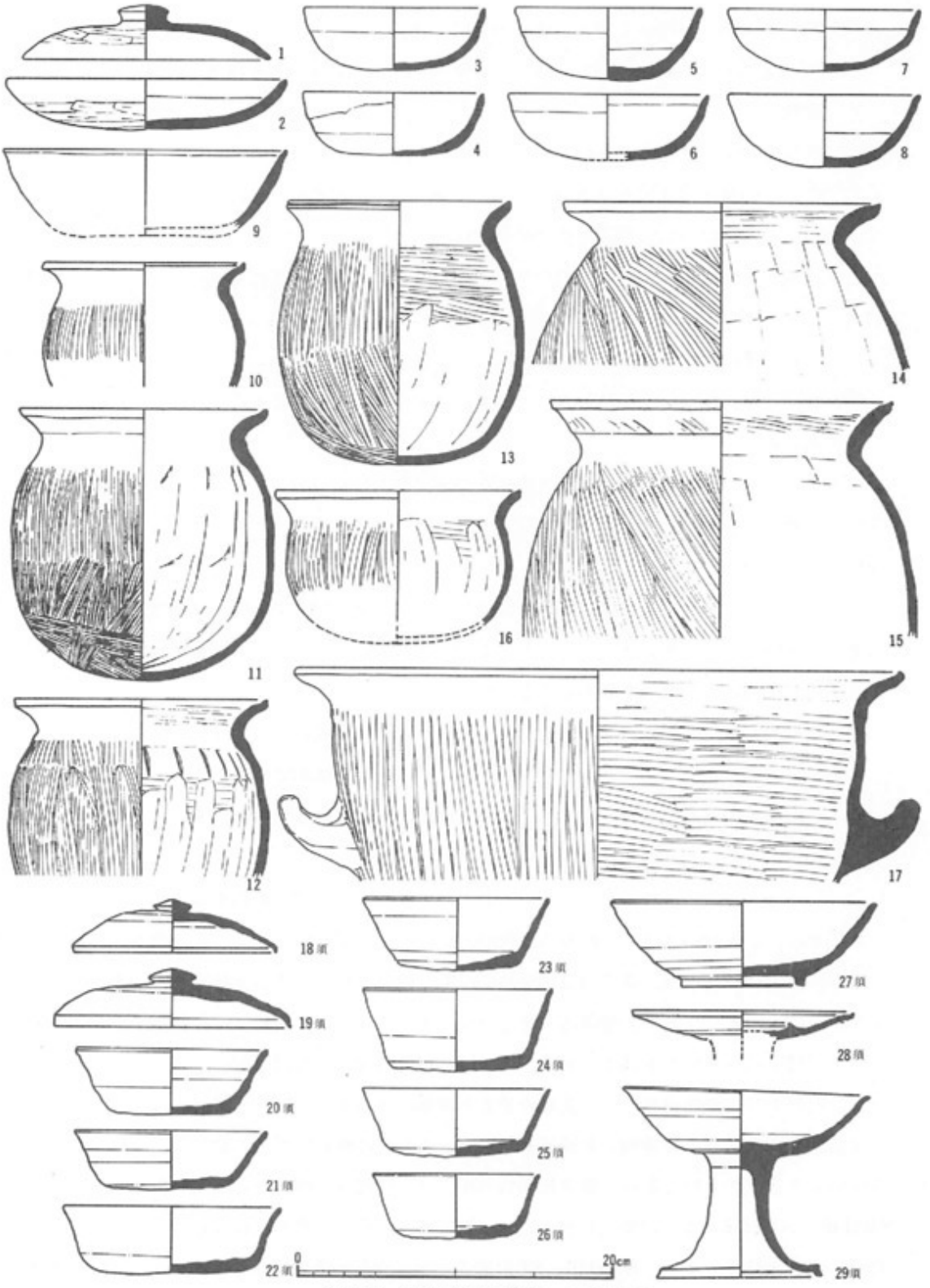
祓川をのぞむ台地西端部における遺構状況の確認を主たる目的とした今回の調査では、昨年度中垣内地区で実施した第30次調査と同様、弥生時代、飛鳥時代～奈良時代、及び鎌倉時代の遺構を確認した。

弥生時代では、中期の竪穴住居を2棟確認したが、古里C地区で1棟、昨年度調査した中垣内地区で1棟見つかっており、こうした小単位の住居が、祓川をのぞむ台地西辺部に点在していたことが、今回の調査でも明らかとなった。

飛鳥時代の遺構には竪穴住居と土坑がある。竪穴住居には前述したように、規模、平面プラン等において異なる二つのグループが存在するが、これが同時期に存在したのか否かは不確定である。ただ出土土器を見る限りにおいては、両者とも、須恵器杯身、杯蓋では径5㎝～6㎝の小型品で、杯蓋の天井部が丸くつまみの付かないものと、つまみをもち返りのあるものや、杯身に返りのあるものとないものがそれぞれ混在しており、大きな時期差は考えられない。

土坑では、SK2120よりこの時期の比較時良好な一括土器が得られた。主な特徴をあげると、須恵器杯では径12cm前後、深さ 4.5cm前後の小形で深い形態のものが主体をなし、蓋では返りを有するものが1点のみで、他は返りをもたないものである。土師器では長甕と小形甕が多く、粗製の径12cm前後の椀が主体的である。そのほか脚部の欠損した須恵器托と考えられるものがあり、時期的に、楢崎編年では、高蔵寺第2号窯期に相当する一群かと思われる。

奈良時代では、掘立柱建物が9棟確認された。これらは竪穴住居との切り合い関係より、竪穴住居より後出のものである。掘立柱建物の中には、柱掘り方埋土から出土した土器を見ると、SB2110、SB2136のように竪穴住居の廃絶直後に続くだろうと考えられるものもある。一方、建物の規模を見てみると、SB2110、SB2100のように梁行が3間のものがある。こうした建物は当地区や古里地区を含めた台地西辺部で多く見られ、宮城西部に共通した建物の特徴を見い



第２図　第36次出土遺物　ＳＫ2120

出すことができる。又建物の棟方向についても同様である。

鎌倉時代では、台地縁部に沿う何条もの溝が検出された。ＳＤ2113のように区画溝と考えられるものもあったが、区画内に建物等の同時代の遺構を確認できなかった。あるいは、土坑ＳＫ2131の北部の黒色土遺物包含層より多量の土師器皿（ベラ）が出ていることからすれば、黒色土中に遺構の存在した可能性も否定できない。出土遺物では、山茶椀のほか、青磁・白磁も比較的多くみられるところから、一般集落とは性格を異にしているように思われる。

以上のことから、当地区や古里地区を合わせた宮城西部一帯は、奈良時代の斎宮であったばかりでなく、鎌倉時代の斎宮を想定しうる可能性も大きく、斎宮寮の成立と終末とを解明するための重要な鍵を握っている地帯であると判断される。

Ⅲ　第 38 次 調 査

6 ACD−S（塚山地区）

塚山地区では昭和55年度に第32次調査が行なわれている。今回の調査区は第32次調査区より西へ約 150ｍで、古里地区との字界を通る県道南藤原・竹川線より東へ約40ｍの地点に当たる。調査は塚山と南に隣接する東裏・広頭地区との字界である農道に沿う東西27ｍ、南北30ｍの区画を設定して行なった。

宮城西部で行なわれた古里や東裏地区の調査結果より、奈良時代の遺構が多いことが予想されたが、東側の第32次調査区では、平安時代の掘立柱建物14棟が検出されている。このため、今次調査の主眼は、古里地区を中心とする奈良時代の遺構の広がりと、平安時代の遺構の有無を調べることであった。

狭い調査区であったが、調査の結果、古墳の周溝３基、竪穴住居13棟、掘立柱建物22棟、古道の側溝など多数の遺構を検出した。その大半は奈良時代と平安時代のものであったが、特に平安時代の掘立柱建物18棟が確認されるなど、予想外の成果を得た。

（Ⅰ）古墳時代の遺構

古墳の周溝と考えられる方形周溝２基（ＳＸ2160、ＳＸ2210）と円形周溝１基（ＳＸ2217）を検出した。

規模は、ＳＸ2217が直径約19ｍ、ＳＸ2160が一辺16.5ｍで、ＳＸ2210は一辺12ｍ以上あったものと推定される。溝幅はSX2210が1.2ｍ、他の２基は約2.5ｍで、深さはいずれも50cm内外であった。

遺物はほとんどなく、ＳＸ2210より、五世紀末～六世紀初頭のものと推定される須恵器の無蓋高杯１点が出土しただけであった。したがって他の２基については時期決定はできなかったものの、周溝の形状や、埋土状況等より古墳の周溝であるものと判断した。

なお、調査区北方の古里・塚山地区に位置する17基からなる塚山古墳群には、現状でも、方墳とわかるもの３基が含まれている。

（Ⅱ）奈良時代の遺構

この時期の遺構が最も多く、竪穴住居13棟（ＳＢ2145、ＳＢ2146、ＳＢ2154～ＳＢ2156、ＳＢ2164、ＳＢ2165、ＳＢ2167、ＳＢ2186、ＳＢ2196～ＳＢ2198、ＳＢ2205）と、掘立柱建物３棟（ＳＢ2185、ＳＢ2191、ＳＢ2218）、土坑30（ＳＫ2153、ＳＫ2158、ＳＫ2159、ＳＫ2161、ＳＫ2162、ＳＫ2168、ＳＫ2169、ＳＫ2176～ＳＫ2179、ＳＫ2181～ＳＫ2184、ＳＫ2188、ＳＫ2189、ＳＫ2192～ＳＫ2195、ＳＫ2199、ＳＫ2203、ＳＫ2204、ＳＫ2206、ＳＫ2207、ＳＫ2209、ＳＫ

2211、ＳＫ2212、ＳＫ2219）を検出した。

竪穴住居は小型のものばかりで、最大のＳＢ2155が 4.3ｍ× 3.0ｍ、約13㎡であった。最小のＳＢ2186は床面積が約５㎡で、カマドも伴わず居住棟とはいい難いものであった。平面プランは長方形で、形が整わないものが多い。また、地山から床面までの深さは、ＳＢ2205が10cmであったが、他はすべて20cm～30cmであった。

内部施設では、カマドはＳＢ2186以外のすべてに伴っていたと考えられる。東壁か北壁の中央部より右側に位置するものが多いが、ＳＢ2197やＳＢ2205のように、コーナーの部分にまで片寄るものもみられた。貯蔵穴はＳＢ2154、ＳＢ2156、ＳＢ2164、ＳＢ2198に認められたが、いずれもカマドの東側、竪穴の北東隅に位置していた。また、床面中央部に土坑状の浅い窪地を伴うもの（ＳＢ2154～ＳＢ2156、ＳＢ2197）もあるがその性格は不明であった。

主軸の方向はＳＢ2146、ＳＢ2205以外はすべて北で東へ偏るものであった。出土遺物では明確に時期差がつかめなかったものの、埋土の切り合い関係より、SB2146→SB2145、ＳＢ2154→ＳＢ2156→ＳＢ2164 、 ＳＢ2155→ＳＢ2156、ＳＢ2196→ＳＢ2197等の前後関係を確認した。

遺物は、ＳＢ2145、ＳＢ2146、ＳＢ2196は少なかったが、他は整理箱に１箱～３箱の土器が出土した。土師器の長甕を主体とする大小の甕類・把手付鍋・甑が、杯・皿・鉢より多い。須恵器は杯類・皿・甕・長頸壺等が少量伴出した。またSB2164より砥石、SB2198より小型の直刀が出土した。

掘立柱建物は、ＳＢ2185以外の２棟の規模は不明であったが、すべて梁行２間の建物であろう。棟方向はN10°E～N14°Eに統一される。柱間は、SB2218が約2.3ｍで、他の２棟に比べて大型の建物であることが予想される。

土坑は、大小様々のものがみられた。ＳＫ2158は竪穴住居の可能性もあるが、床面の状況より土坑とした。方形あるいは、不整長方形を呈するものが多く、SK2183、SK2199、SK2211等、溝状に細長いものもみられた。大規模で方形のプランを呈する土坑は調査区東部や西部に集中しており、位置的にも竪穴住居との強いかかわりが想像される。

土器の出土量が特に多い土坑には、ＳＫ2189、ＳＫ2199、ＳＫ2211があり、整理箱に４箱～７箱出土した。器種及び時期は、竪穴住居より出土したものと大差はなく、竪穴住居との具体的な結びつきは不明なものが多い。ただ、ＳＫ2199出土の土師器鉢、ＳＫ2211出土の須恵器盤は、ＳＢ2198出土の破片と接合し、しかも、ＳＫ2211より円面硯が伴出していることが注目される。また、ＳＫ2211より、外面底に「単」の墨書があり、内面底に同じ文字が小さくヘラ描きされた土師器杯が出土した。

なお、ＳＫ2188より刀子が出土。第４図20の土師器椀はＳＸ2210に伴う土器であった可能性もある。

（Ⅲ）平安時代前半の遺構

掘立柱建物6棟（ＳＢ2147、ＳＢ2171～ＳＢ2174、ＳＢ2208）と土坑2（ＳＫ2152、ＳＫ2187）を検出した。

掘立柱建物は、調査区東西の壁際で検出したものが多く、全容が不明のものが多いが、すべて梁行2間の南北棟であろう。このうち、東端部の4棟は、柱間が6尺～7尺で、棟方向もN18°E～N20°Eに復元される。前後関係では、ＳＢ2172→ＳＢ2171、ＳＢ2173→ＳＢ2174が確認され、連続的な建て替えが想定された。

西端部のＳＢ2147は、柱間が2.3m、柱掘り方は長径80cm、深さ60cmを測る。棟方向N10°Eを示し、前半でも中葉に近いものと推定される。

土坑は、小型で出土遺物も少ないものであった。ＳＫ2187より土師器の杯・皿・甕と、須恵器の杯・甕・鉄鉢片等が出土した。

（Ⅳ）平安時代中葉の遺構

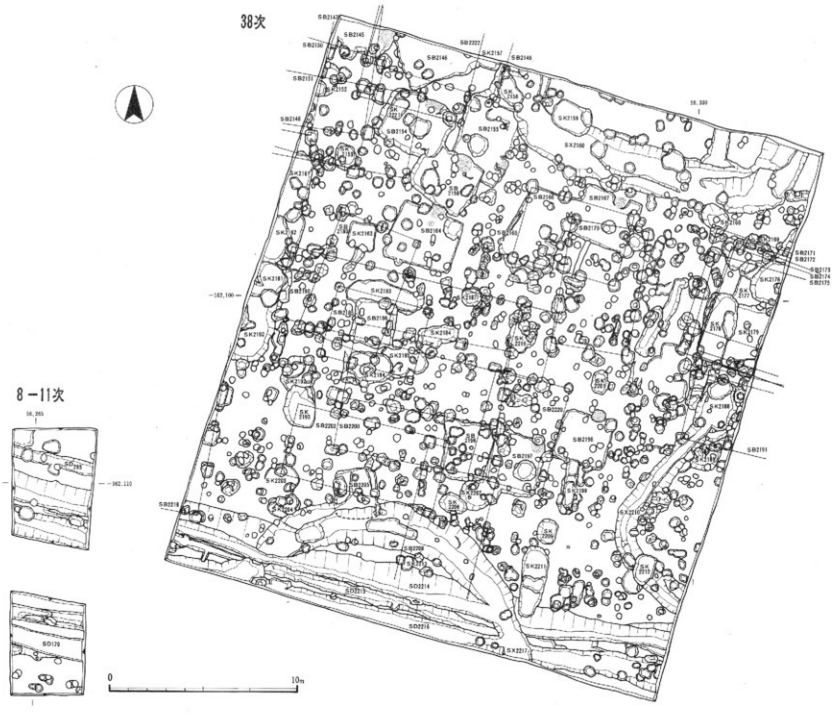
掘立柱建物11棟（ＳＢ2148、SB2150、SB2151、SB2166、ＳＢ2170、SB2175、SB2180、SB2190、SB2200、SB2202、SB2220）と土坑3(SK2157、SK2163、SK2221)を検出した。

11棟の掘立柱建物は、棟方向や規模からみて、雑然と配置されるように見えるが、棟方向及び、建物の前後関係から整理していくと、5～6時期に分類される。

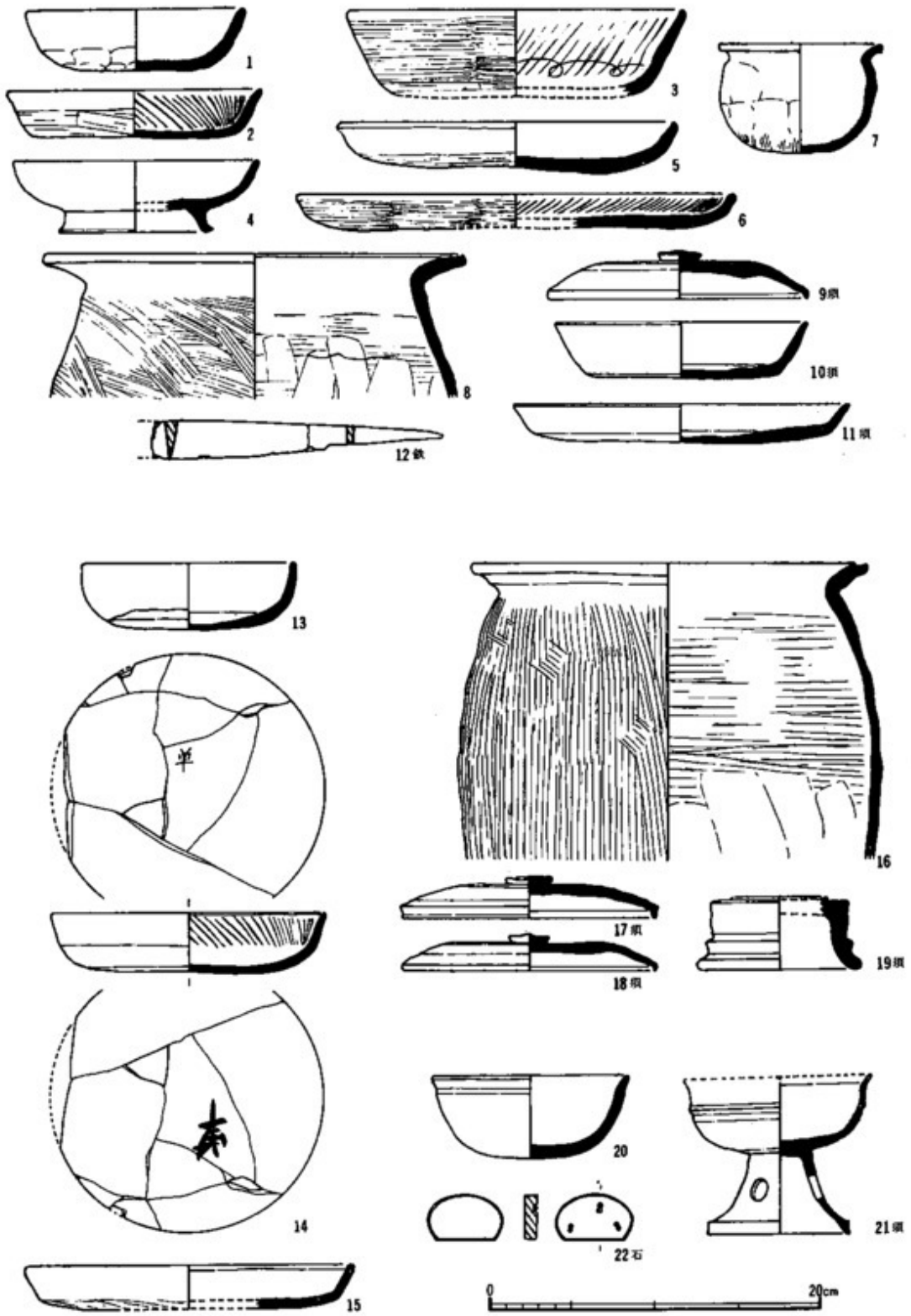
棟方向では、N20°Eを示すＳＢ2180、N14°E～N15°Eを示すSB2150、SB2166、SB2175、ＳＢ2220、N13°Eを示すＳＢ2190、ＳＢ2202、N8°E～N10°Eを示すＳＢ2148、ＳＢ2151、ＳＢ2170、ＳＢ2200の4グループに大別される。このうち、ＳＢ2200はＳＢ2170やＳＢ2190より新しいものであり、ＳＢ2180と同様、単独に存在するものと考えられる。これらを時期別に分けると、①ＳＢ2180と、②ＳＢ2148、SB2151、SB2170が先行し、③SB2190、SB2202→④ＳＢ2150、ＳＢ2166、ＳＢ2175、ＳＢ2220→⑤ＳＢ2200の順序が想定される。

これらを、規模や位置関係からみると、単独に存在するＳＢ2180やＳＢ2200は、特に桁行の柱間に特徴がみられる。前者は梁行に比べて極端に狭く後者は広い。②グループの3棟はほぼ同規模であるか、ＳＢ2170だけが深く大きい柱掘り方であり、がっしりした建物であったものと考えられる。③グループのＳＢ2190は斎宮跡で初見の7間×2間、東面廂を持つ大型の建物と思われる。南方のＳＢ2202はこれによく柱通りを揃えている。また、④グループの4棟はすべて桁行3間の建物で、ＳＢ2220以外の3棟は柱掘り方が約80cm大のものに統一される。また、ＳＢ2166とＳＢ2220の柱通りもよく揃うものであった。

これらの様子は、上園以東の建物が方位に近いものに統一され、同一場所での建て替えが顕著であることに比べ、ややその様相を違えるが、ＳＢ2190、ＳＢ2200のような大型の建物が発見されたことは、当地区の性格を考える重要な手掛かりであろう。



第３図　第38次遺構実測図（1：200）



第４図　第38次出土遺物　ＳＢ2198、1～12　ＳＫ2111、13～19　ＳＫ2188、20　ＳＸ2210、21包含層、22

土坑は、平安時代前半のものに共通する傾向がみられ、土器の出土量も少ないものであった。

（Ⅴ）平安時代末葉の遺構

掘立柱建物1棟（ＳＢ2149）と土坑1（ＳＫ2213）を検出しただけであった。

ＳＢ2149は伴出土器がほとんどなく、1つのピットより見つかった土器によりこの時期のものと判断した。3間×2間のものと推定され、桁行の柱間は8尺に復元された。

ＳＫ2213は、深さ14cmの浅いものであるが、土師器の小皿・山茶椀と共に、小型の直刀が出土した。

なお、同時期の土器を伴うピットは、調査区全体でも12ヶ所～13ヶ所をみただけで非常に少なかった。

（Ⅵ）鎌倉時代から室町時代の遺構

調査区南端部の農道沿いで検出した3条の構は、中央のＳＤ2215が鎌倉時代に、ＳＤ2214、ＳＤ2216が室町時代に比定される。これらの溝は、今次調査区の西4ｍの地点で行なった第8－11次調査（Ｐトレンチ）や、第32次調査区で検出したＳＤ1736～ＳＤ1738に続く古道の側溝に当たる溝である。

古道は旧竹神社跡北側の農道より、古里と中垣内地区の字界を経て上園に至る。幅約 4.5ｍで、延長約 530ｍに達するものである。

（Ⅶ）まとめ

過去の調査で検出した方形や円形の周溝は、15基に達している。今年の調査では、第39次調査で2基の方形周溝、第41次トレンチ調査でも方形周溝と推定される周溝4基を検出しており、総計24基を数える。方形周溝が20基、円形周溝4基で方形周溝が多い。このうち、古里Ｃ地区の6基と今次調査区の3基が古墳時代後期に比定される。これらの結果より、塚山と古里南半地区一帯には、塚山古墳群を包括する大規模な後期古墳群があったことが推定される。

奈良時代の遺構では、竪穴住居と掘立柱建物との前後関係が明確につかめたものがなく、近辺でのより多くの資料をまちたいところである。しかし、古里南部や東裏地区で検出されたものは、主柱穴を伴わない長径5ｍ以内のものが多く、竪穴住居が掘立柱建物に先行するという所見があり、当地区でも同様の関係があったことが予想される。

なお、前述の第8－11次調査区では、奈良時代後半から平安時代の初期に比定されたＳＤ170が検出されている。この溝は古里Ｂ地区より続くもので、古道の南側に沿って宮城中央に至る。今次調査区で検出した同時期の3棟の建物は、溝ＳＤ170 の方向とよく一致する。

平安時代の遺構では、平安時代前半から中葉の建物が多いことがめだった。なかでも、平安時代中葉の建物が多く、廂付きの大型建物が含まれること、棟方向がすべて北で東へ偏る建物であったことは、第32次調査区に類似する。土坑については、建物跡が多いわりに土坑が少な

く、多量の土器を出土する土坑がなかった点は、第32次調査区と同様、上圃以東の様子と異なる傾向であった。また、出土遺物では、石帯1点、緑釉陶器片25点、青白磁片4点等を出土した。

こうした、塚山地区に共通する特徴は、ただ、塚山地区以西での地割の変更を示すだけのものであろうか。

不明な点が多いものの、古里地区を中心とする宮域西部では皆無であった平安時代の建物が当地区に及んでいたことは、建物の性格を考えるうえで重要な発見であるといえる。

以上のような結果より、当地区一帯は特に、奈良時代から平安時代にかけての斎宮跡の全容を解明するうえで、一層、多くの課題を残している重要な地区といえよう。

Ⅳ　第39次調査

6 ABD−R·S·T（古里地区）

今年度3ヶ所目の計画発掘調査として実施した当地区は史跡指定範囲の中でも西側の蔵川を望む台地の北西隅に位置する。古里地区は斎宮跡発見の端緒ともなったところであり、宅地造成計画に伴う事前発掘調査をはじめ既調査地が比較的多く点在するところである。しかしながらその北部、坂本集落に近い畑地一帯はこれまでほとんど調査が行なわれておらず、今回この付近の遺構の状況を知るためおよそ44m×34mの約 1,500㎡にわたって調査を実施した。

これまでの付近の調査としては、一連の古里地区の調査区のうち最も北に位置するD地区が当調査区の南西約150mにあり、15棟の掘立柱建物をはじめ竪穴住居11棟、井戸などが知られている。また調査区の北及び東約60mの範囲では、農業用倉庫新築等の史跡現状変更申請に伴う事前の発掘調査として小規模なトレンチ調査が3ヶ所で行われており、掘立柱建物や竪穴住居などが検出されている。

今回の調査ではこれまでの古里地区を中心とした台地西半部の状況に類似して、斎宮成立以前である弥生時代及び古墳時代の遺構が検出されたほか、奈良時代と鎌倉時代の各種遺構を検出した。一方平安時代については当地区でも、遺構・遺物ともに皆無に等しく、台地西端部に共通した傾向である。

（Ⅰ）弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては方形周溝（SX2232）1基のみを検出した。幅 0.7m前後の溝が、外径およそ 7.0m× 6.4mの方形に周るもので、溝は北及び西の角と南西辺の3ヶ所でとぎれる。周溝の北東辺は他の部分に比べてやや深く、この地点から弥生時代後半と考えられる壺など数点の土器がまとまって出土している。

（Ⅱ）古墳時代の遺構

竪穴住居（SB2235）1棟のほか、削平された古墳の周溝（SX2230）及び方形周溝（SX2231）、土壙（SK2233、SK2234）2ヶ所を検出した。

SB2235は1辺 4.7mの方形を呈する竪穴住居で、北東壁の中央にカマドをもつ。カマドからは、土師器の長甕がすえられた状態で出土したほか、内部からは須恵器の杯・甕、土師器の長甕・甑など多量の土器が出土している。

SX2230は大半が調査区外に続くものであるが、幅約1.8mの溝がその外径で推定して一辺約12mの方形に周るものである。周溝の規模・形状等から削平された方形墳の周溝であろうと考えられる。SX2231も調査区外に続くものであるが、幅約 0.8mの溝が、その外径で一辺約 8.2

mでコ字状に周るものである。この周溝の規模・形状等はＳＸ2230とは異なり、ＳＸ2232に類似するものであることから、ＳＸ2231は古墳時代の方形周溝と考えられるものである。

そのほか古墳時代の遺構として土坑２ヶ所がある。ＳＫ2233は約 5.8m× 3.3mの長方形を呈する大型の土坑であり、遺物の出土も非常に多く、調査当初には竪穴住居かとも考えられたものである。ＳＫ2234は古墳時代の他の遺構とはやや離れて、調査区の南西端で検出した土坑である。直径約 1.5mのほぼ円形を呈し、遺物の出土は少ない。

（Ⅲ）奈良時代の遺構

竪穴住居４棟のほか掘立柱建物・土坑・溝など各種の遺構を検出した。ＳＢ2238は鎌倉時代の溝２条（ＳＤ2260、ＳＤ2261）と重複しているが、四隅を確認し、 5.5m× 4.3mの長方形を呈するものである。ＳＢ2249は東南壁でＳＤ2265と重複し、削られているため一辺約 3.3mを確認したのみである。また同じく重複する土坑ＳＫ2248はＳＢ2249より先行するものであることを確認した。ＳＢ2252とＳＢ2253は調査区の南隅で重複して検出したものである。一部調査区外に続くが、その重複関係からＳＢ2252がＳＢ2253より新しいものである。

掘立柱建物は７棟を検出したが、時期の明らかなものはＳＢ2239、ＳＢ2240、ＳＢ2243、ＳＢ2245の４棟でいずれも奈良時代である。他の３棟は時期の明確な遺物の出土はなく不明であるが、他の時期とする掘立柱建物もないことから、一括してここで扱うこととした。７棟の掘立柱建物は、その規模・棟方向等いずれも様々で、規格性をもつ建物は見られない。しかし、ＳＢ2239やＳＢ2242で見られる梁行３間の建物は古里地区を中心とした斎宮跡西部における建物群の傾向に共通するものである。またＳＢ2240は南東の桁行方向側柱列のみが、棟方向に長い長方形の柱掘り方を持つのが特徴的である。ＳＢ2245は妻の柱穴３ヶ所を検出したのみで、調査区外に続くものであるが、比較的大型で深い柱掘り方をもつ建物である。

一方溝では明らかに奈良時代のものと考えられるのはＳＤ2246とＳＤ2247の２条である。いずれも調査区の東隅で検出したもので、ＳＤ2246はN10°Eの方向で一直線に延びるていねいな掘り方の溝である。ＳＤ2247はＳＤ2246の東に隣接する溝であるが、これに比べてやや弯曲するものである。

土坑にはＳＫ2236、ＳＫ2237、ＳＫ2248、ＳＫ2250、ＳＫ2251がある。中でも調査区の南隅で検出したＳＫ2250は 6.8m× 5.5mの不整円形を呈する大型の土坑で、多量の土器を出土した。またこの上面では約 3.8m× 2.6mの不整楕円形を呈する鎌倉時代の土坑を確認している。そのほかＳＢ2244とも一部の柱掘り方で重複しているが、その前後関係については確認できなかった。ＳＫ2236とＳＫ2237も重複する土坑であるが、直径約２mの円形を呈するＳＫ2236が新しいものであることを確認した。

（Ⅳ）鎌倉時代の遺構

今回の調査でも、掘立柱建物等は確認されず、溝・土坑・井戸等を検出したのみである。溝は調査区の東及び西の隅で数条が重複しているほか、調査区各所から主なもので計9条を検出した。西の隅で検出した溝にＳＤ2260とＳＤ2261があるが、ＳＢ2238、ＳＢ2240等と重複し、特にＳＤ2260は再三掘りなおされたものか溝底にわずかずつの移動が認められる。また、東隅では奈良時代の溝と重複する部分も多いが、ＳＤ2264、ＳＤ2265などがある。ＳＤ2265は調査区の北隅で検出したＳＤ2254と類似して比較的整然とした掘り方をもつ溝で調査区北東から南隅へやや蛇行して縦断する。この2条は北東の調査区外で屈曲した同一の溝であることも考えられるものである。そのほかＳＤ2259、ＳＤ2262、ＳＤ2268、ＳＤ2271はいずれも小規模な溝ばかりであるが、ＳＤ2262は調査区中央で直角に曲がるものであり、ＳＤ2259とＳＤ2268は断続的ながら一体として調査区を横断する溝であることも考えられる。

土坑はＳＫ2256～ＳＫ2258、ＳＫ2263、ＳＫ2266、ＳＫ2267、ＳＫ2269の7ヶ所を検出したが、いずれもその規模・形状とも様々で特別の性格を窺わせる土坑は認められなかった。

井戸はＳＥ2255とＳＥ2270の2ヶ所を検出した。調査区が台地の北西端に位置することもあって地下水位の深いことは当初から予想されるところである。このため井戸であろうことを確認してさらに掘り下げることは中断した。いずれも素掘りの井戸で、調査区北端付近で検出したＳＥ2255は直径約 2.1ｍの円型を呈する掘り方をもつ比較的小型の井戸である。2間×2間の掘立柱建物ＳＢ2241の一部と重複し、ＳＢ2241はその時期が不明であるが、柱穴の切り合い関係からＳＥ2255が新しいものであることを確認している。一方調査区のほぼ中央付近で検出したＳＥ2270は直径 3.4ｍ～ 3.8ｍの不整形な掘り方をもつ比較的大型の井戸である。

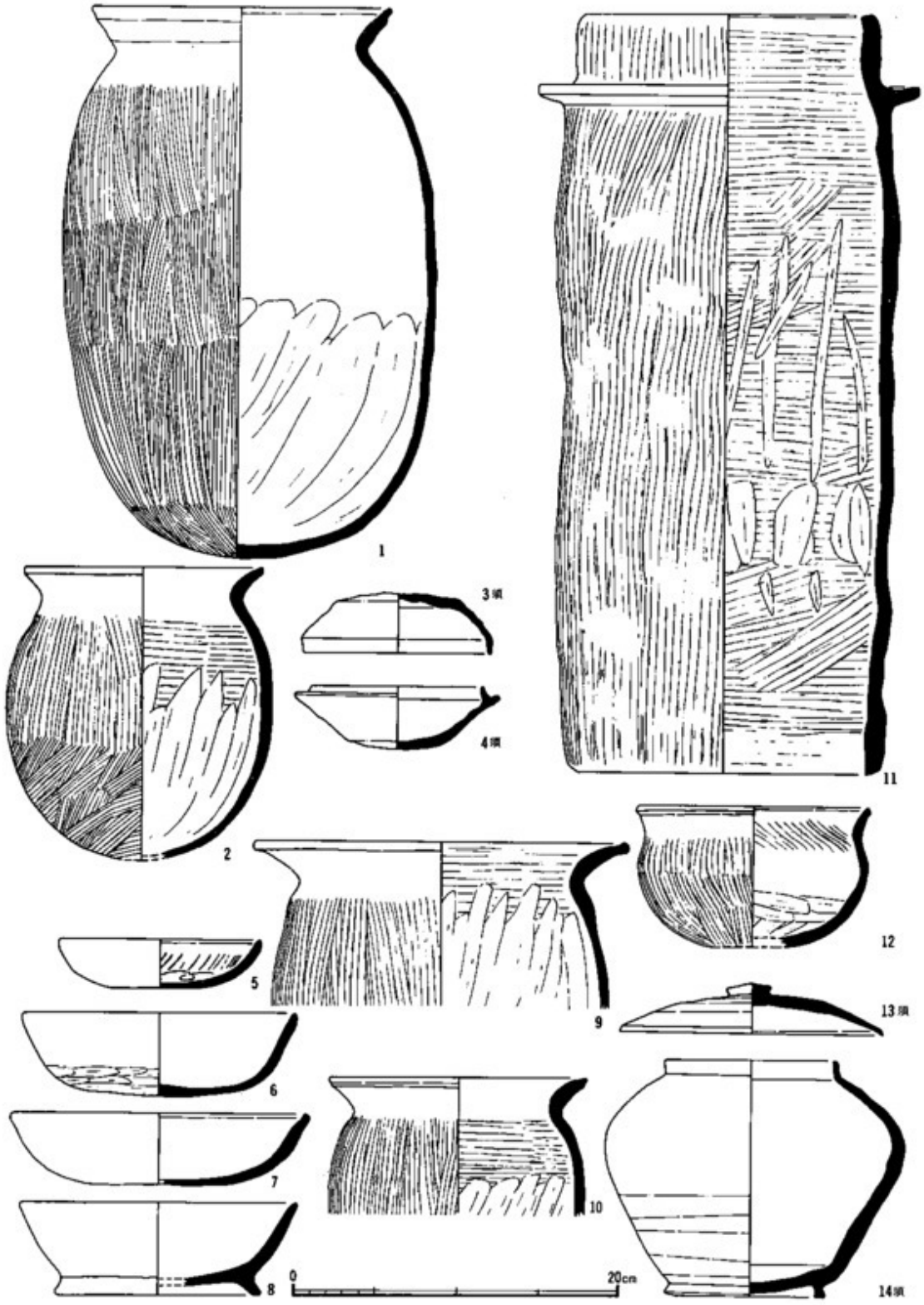
（Ⅴ）遺物

当地区の調査では平安時代の遺構は検出されなかったものの、弥生時代から鎌倉時代にわたる遺構が検出されたことに対応してこれらの時期の遺物が大量に出土した。時期別にあげると弥生時代後期にはSX2232から一括して出土した土器群があげられる。これまで同時期のものは古里Ｃ地区を中心として断片的に知られているが、斎宮成立以前の当地域を知るうえで貴重な資料といえよう。

古墳時代の遺物については、ＳＸ2230など古墳の周溝からは多くの出土を見なかったが、竪穴住居ＳＢ2235や2ヶ所の土坑ＳＫ2233、ＳＫ2234から比較的多くが出土した。とりわけＳＢ2235の出土遺物は十数点の土師器長甕をはじめ多数の土器が完形に近い状態で出土し、六世紀前半と考えられるＳＢ2235の廃棄の時期に置かれていた一群と考えられる。

奈良時代の遺物は今回の調査区では最も多く、4棟の竪穴住居で比較的まとまって出土したほか大型の土坑であるＳＫ2250から大量の土器が出土している。この時期の特殊な遺物として

SB2245
SK2260
SK2267
SK2259
SD2264
SD2247
SD2266
SD2265
SK2249
SD2246
SE2270
SK2263
SD2258
SD2221
SK2250
SB2244
SB2243
SB2235
SK2254
SK2252
SK2253
SB2241
SK2256
SK2251
SK2236
SK2237
SB2242
SB2240
SD2261
SB2238
SD2260
SK2255
SK2257
SK2258
SK2262
SK2264
SK2265
SK2266
SK2267
SK2268
SK2269
SK2270
SK2271
SK2272
SK2273
SK2274
SK2275
SK2276
SK2277
SK2278
SK2279
SK2280
SK2281
SK2282
SK2283
SK2284
SK2285
SK2286
SK2287
SK2288
SK2289
SK2290
SK2291
SK2292
SK2293
SK2294
SK2295
SK2296
SK2297
SK2298
SK2299
SK2300
SK2301
SK2302
SK2303



第6図　第39次出土遺物　ＳＢ2235、１～４　ＳＫ2250、５～14

は土馬1点が出土しているほか、SK2250では鍔をもつ円筒状の土器が3個体出土しており特殊な器形の土器としてあげられよう。

鎌倉時代の遺物では土師器・山茶椀等比較的多く出土しているが溝・井戸等以外の遺構に伴うものは無い。この時期の遺物としては青磁片等が散見されることがあげられる。

（Ⅵ）まとめ

これまで古里D地区で15棟の掘立柱建物が確認されているほか、当地区の東約60mで昨年実施した緊急調査のトレンチでも4棟の掘立柱建物を確認している。このため古里地区北部における斎宮跡建物群の広がりを知ることを主たる目的の一つとした今回の調査でも多くの掘立柱建物を検出されることが予想された。しかしながら調査の結果掘立柱建物は7棟を検出したのみで、全体的には斎宮成立以前の当地域の状況を知るうえで貴重な資料を多く得る結果となった。とはいえ規格的な建物配置を窺い知ることはできなかったがSB2240やSB2245のように比較的大型の建物が所在しており、奈良時代の斎宮における重要な一画に相当することが推察される。

また弥生時代末から古墳時代については方形周溝や古墳のほか古墳時代後期の竪穴住居が検出された。これらの時期の集落等が古里地区を中心とした台地縁辺部に形成されていたことはすでに周知のところであるが、古墳と竪穴住居とが近接して形成されていることを強調しておきたい。当地区の削平された古墳の周溝の時期が十分明確ではないため竪穴住居との時期的な相関関係が不明であるうえ、丘陵地をひかえず平坦な台地に形成された集落の立地する地形も考慮しなければならないが、台地西縁の集落に近接する塚山地区を中心として塚山古墳群の墓域を設定しているのは弥生時代における集落縁辺に方形周溝墓等の墓域を設定する伝統を踏襲するものであり、当地域の古墳時代集落の性格を示すものと考えられる。

一方鎌倉時代については、遺物の出土量が比較的多いにもかかわらず遺構は井戸・溝等を検出したのみで建物を確認することはできなかった。当地区では遺構を検出した地山面が深い地点で表土下70cm～80cmと深く、この時期の遺物は遺物包含層から比較的多く出土している。そのうえ調査実施中には遺物包含層中には人頭大の河原石も散見された。このようなことからこれらの河原石を土台石として使用した建物の存在した可能性も考えられ、今後当地域を調査するうえで留意点を示唆するものである。

V　第40次調査

6 AGH−L·M（東加座地区）

昨年度、中町東半部の東加座地区を中心に行なった第35次トレンチ調査では、東西及び南北に直交する平安時代の大区画溝と、これらの溝に囲まれるように位置する多数の掘立柱建物が検出された。中でも、6AGH−L区では、12棟もの掘立柱建物を中心に、井戸や多数の小溝が検出されたが、具体的な建物配置状況など、当地区の性格を考える上で、多くの課題が残されてきた。

今次調査はこれらの実態を明らかにするため、6AGH−L区の南半部を東へ拡張する東西36m、南北28mの調査区を設けて実施した。

調査の結果、新たに12棟の掘立柱建物とこれらの建物を囲む区画溝など、多数の遺構を検出した。

（I）平安時代前半の遺構

新たに、掘立柱建物7棟（SB2278～SB2282、SB2300、SB2301）と、溝6条（SD1935、SD2284、SD2287、SD2289、SD2293、SD2316）、土坑17（SK1981、SK2283、SK2288、SK2291、SK2292、SK2294～SK2299、SK2302、SK2305、SK2311、SK2314、SK2315、SK2317）を検出した。

掘立柱建物は、昨年度に検出した3棟（SB1985、SB1990、SB1994）を含めて、10棟を見た。棟方向はほとんどE2°N～E3°Nに統制されるものであった。

これらの建物は出土遺物より2時期に大別される。SB1990と、これによく柱通りが揃うSB2280～SB2282、SB2300、SB2301が古く、SB1985、SB1994が新しい。

前者では、SB1990が5間×2間で、梁行の柱間が2.6mを測る大型の建物であり、古い時期の中心的なものであったと考えられる。これに付随していたと思われる他の5棟は、すべて3間×2間で、柱間もよく揃い、短期間での建て替えが窺われる。

後者では、SB1994が5間×2間のものと推定され、柱間も8尺に復元される。SB1985と共に、一時期の建物配置の一端を示すものと推定される。

なお、SB2280の北西隅の柱掘り方より土師器甕の完形品が、SB2281の4ヶ所の柱掘り方よりかなり多くの炭化物が出土した。

溝は、第35次調査の6AGH−D区で検出したSD1935が当地区まで続いていることが判明した。幅約4mで、中央に一段深い溝が伴っている。また、北端部では、何回かにわたる埋土の切り合いもみられたことから、平安初期より2回～3回の改修が考えられる。この溝は調査

区北端部から北へ46ｍと、164ｍの地点で同規模の直交する大区画溝であるものと考えられる。N 3°Wを示し、同期の建物群の棟方向とよく一致する。

ＳＤ2293は、溝幅・深さなどが一定しないが方向はＳＤ1935と同じであることから、内周する区画施設であったことも予想される。

土坑は、建物群の近辺及び、ＳＤ1935の肩部に重複するようにつくられたものと、中央部に点在する小土坑（ＳＫ2295、ＳＫ2311、ＳＫ2314、ＳＫ2317）がある。前者はすべてＳＤ1935と同時期で、平安初期のものであった。

出土土器は、ＳＤ1935より整理箱に５箱が出土したが、土坑では、最も多いＳＫ2297が１箱程度で、比較的少ないものが多い。土師器では、長甕・甕・甑・把手付鍋等の煮炊用品より、杯・皿類が多い。また、少量ではあるが須恵器の杯・甕・瓶などが伴出した。

（Ⅱ）平安時代中葉の遺構

掘立柱建物９棟（ＳＢ1974、ＳＢ1975、ＳＢ1977、ＳＢ1978、SB1980、SB1991～SB1993、ＳＢ1998）はすべて第35次調査で確認したもので、新たに検出したものはなかった。

しかし、今次調査の結果より、ＳＢ1974、ＳＢ1975、ＳＢ1977以外の６棟は、その規模がより正確になった。

調査区南西隅に重複する４棟は、ＳＢ1993が５間×２間の東西棟であることがわかったことより、他の３棟も同規模の建物であることが予想される。柱掘り方が大きく、柱間も８尺に復元されるＳＢ1991、ＳＢ1992が古く、規模がやや縮少されたＳＢ1993、ＳＢ1998は棟方向を微妙に違えながら建て替えられたものであろう。

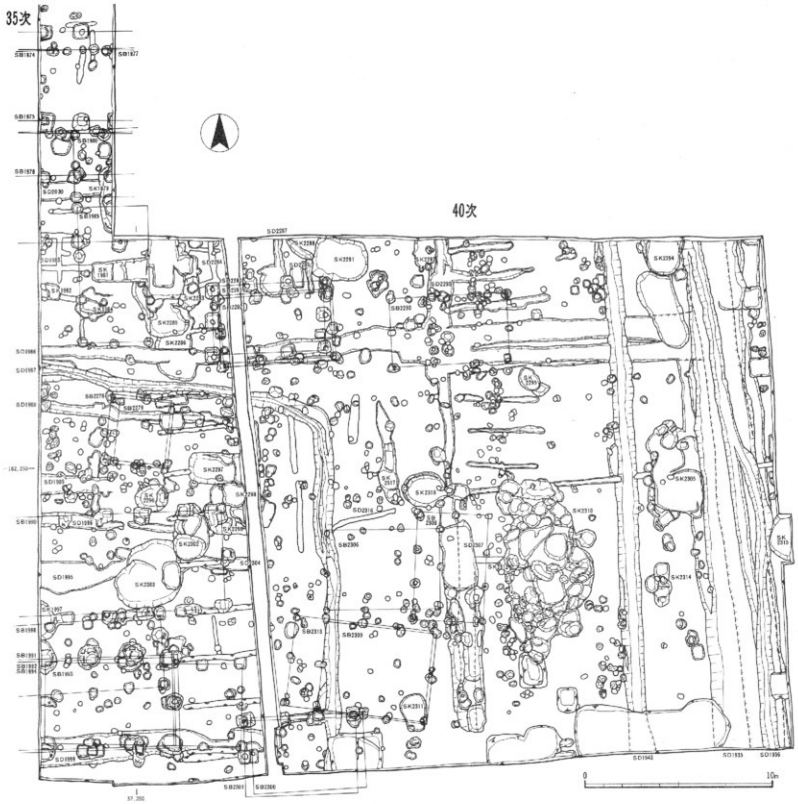
調査区北端部の５棟は、棟方向や規模などが南端部の一群とよく似た傾向がみられ、互いに対応する建物であったことが予想される。

溝は６条（ＳＤ1988、ＳＤ1989、ＳＤ1995、ＳＤ1996、ＳＤ1999、ＳＤ2030）が確認された。全て浅い東西溝で、長く続かず、とぎれるものが多い。建物との具体的な関係は不明であるが、その方向はおおむね建物の方向に沿うものであった。ＳＤ1999は重複する３棟の建物より新しいもので、ＳＢ1998に関係したものではなかろうか。

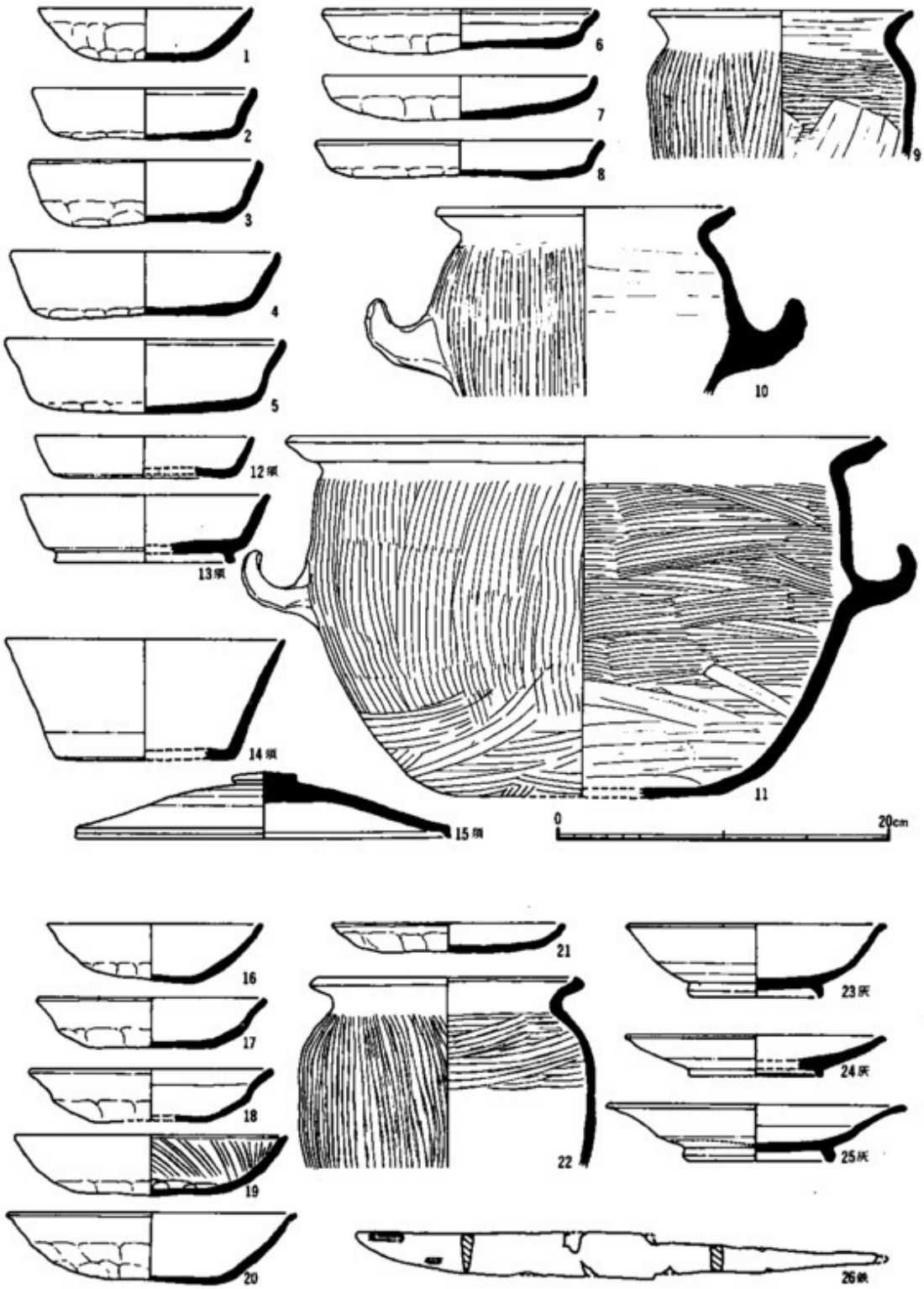
土坑は、ＳＫ1982、ＳＫ1997と新たにＳＫ2285、ＳＫ2286、ＳＫ2303、ＳＫ2310を検出した。ＳＫ2310は 9.5ｍ×５ｍで、切り合いは不明であるが、大小様々の小土坑群からなっており、これらの数ヶ所より、土師器の皿・杯や、灰釉椀や皿類の完形品が出土した。性格はわからないが、他の３土坑が浅く、建物群の近くに位置するのに比べ、特異なものであった。これによく似たものに、第32次調査区で発見したＳＫ1732があるが、平安時代末期のものであった。

（Ⅲ）平安時代後半から末葉の遺構

平安時代後半の遺構には、掘立柱建物２棟（ＳＢ2290、ＳＢ2308）と土坑１（ＳＫ2312）が



第７図　第40次遺構実測図（１：200）



第８図　第40次出土遺物　ＳＤ1935、１～15　ＳＫ2310、16～25　ＳＫ2213、26

あり、末葉の遺構では、掘立柱建物3棟（ＳＢ2306、ＳＢ2309、ＳＢ2313）と、溝6条（ＳＤ1936、ＳＤ1943、ＳＤ1986、ＳＤ1987、ＳＤ2304、ＳＤ2307）、土坑1（ＳＫ2318）を検出した。

平安時代後半の2棟は、ほぼ同規模であったが、棟方向はSB2290が西へ3度、ＳＢ2308が東へ3度偏り一定しない。このような傾向は平安時代末期の建物にも共通しており、ＳＢ2309とSB2313は棟方向がE 7°Sを示し、柱間は梁行が8尺、桁行が6尺強を測るなど、他の3棟（SB2290、ＳＢ2306、ＳＢ2308）に比べて、アンバランスな特色がみられた。溝6条はすべて平安時代末葉に比定したが、建物との位置関係などより、わずかな時期差が予想される。

出土土器は、土師器の小皿・鍋と底部に糸切り痕が明瞭な小型の灰釉椀や皿と、陶質鉢・山茶椀が出土した。しかし、ＳＤ1943だけは山茶椀が伴わず、やや古いものと判断される。

小規模なＳＤ2304、ＳＤ2307以外の溝は、すべて区画溝と考えられ、方向もN 3°Wを示すものに統制されている。中でも、ＳＤ1936やＳＤ1943は、前半のＳＤ1935と同様に、北方約 164 mの東前沖との字界で、同時期の東西溝と直交することが予想される。ＳＤ1936は幅約 2.5m、深さ80cm。ＳＤ1943はそれぞれ 1.3m、50cmを測るしっかりした溝であった。

また、ＳＤ1986は深さ12cmの浅い溝であった。東端部が2条に分れながらＳＤ1936に直交するが、切り合い関係が不明瞭であった。ＳＤ1987は深さ30cmで、調査区中央部でほぼ直角に曲がる。同期のＳＢ2306、ＳＢ2309、ＳＢ2313より新しい溝であった。いずれも、大区画の内側を小区分するものであったものと予想される。

（Ⅳ）まとめ

過去の調査より、斎宮跡の地割は、東西及び南北溝により区画されていることが予想されてきたが、今次調査の結果はその一端を如実に示すものであった。

特に、平安時代前半から中葉にかけては、大型建物を中心とする整然とした建物配置を示す建物群が、ごく近くに重複するようにみられた。しかも、これらはすべてＳＤ1935の方向と一致するものであった。これは、建物及び溝を一体とする長期にわたる地割の継承を予想させるが、平安時代中葉の大規模な区画溝の検出例が少ないことが疑問として残される。

平安時代後半になると、特に建物の棟方向で計画性がくずれるためか、建物配置も不明瞭になる傾向がみられた。しかし、SD1936等の区画溝は、平安時代初期のものと同方向を示し、ほぼ同じ場所で大きな改変もなく継承されてきたことを示している。

なお、調査区東方で行なった第31－7次、第37－9次、第37－13次調査では、特に、平安時代前半から中葉にかけての大型建物が多数発見された。これらの状況は、ＳＤ1935により東西に区分された広範な建物群の存在を明示するものであろう。

以上の結果より、当地区を含めた宮城東辺一帯は、建物が整然と配された官衙地区であり、かつ斎宮跡の造営方法を知る手掛りを残したきわめて重要な地区であることを示している。

Ⅵ　第41次調査

（C地区トレンチ調査）

史跡指定に伴って昭和54年度に策定された「史跡斎宮跡保存管理計画」にはこの策定の時点で遺構の性格が十分に把握されていないC地区を中心とした土地利用区分の見直しを昭和57年度に実施することがうたわれている。そのため、ここ3ヶ年の発掘調査はC地区を重点的に実施し、昭和56年度のトレンチ調査も西側のC地区で延べ 165m、東側のC地区で延べ 230mにわたって幅4m（一部3m）のトレンチを設定した。トレンチはいずれも基本座標に沿って南北に設定したが、現在の畑の地割が大きく角度をもつ西側のC地区ではトレンチが数枚の畑にわたり、2ヶ所の字にまたがることとなってしまった。

今回の調査では17棟の掘立柱建物をはじめ宮域北部を迂回する大溝や中町地区を中心として明らかになりつつある区画溝の一部など多くの遺構・遺物を検出した。以下調査の結果について各トレンチごとに記していきたい。

（Ⅰ）6ACA-M·P　6ACC-H

斎宮字古里及び塚山の2ヶ所の小字にまたがって設定した南北55m、幅4mのトレンチである。この両者の字界には、古里地区から宮域北部を経て東に続く大溝の所在が予想され、これを確認することと周囲の状況を知ることが主たる目的であった。

〔遺　構〕調査の結果当初から予想した大溝ＳＤ５のほか、奈良時代の溝ＳＤ2320、ＳＤ2323～ＳＤ2327の6条、同じく奈良時代と考えられる土坑ＳＫ2322、時期不明の溝ＳＤ2321等を検出したが、柱穴はいずれも浅く小規模なもので、掘立柱建物等は確認できなかった。

トレンチ北半の６ＡＣＡ－Ｍ付近では、地山が礫層になっているが、ここで検出したSD2320は幅約 1.4m、深さ約50cmの比較的整然とした掘り方をもつ溝で、N12°W前後の角度で南北に続く。また６ＡＣＡ－Ｐでも類似した規模を示すＳＤ2325が検出され、約 3.5mの間隔を隔ててほぼ並行することから並存する溝であることも考えられる。

東西方向の溝ではＳＤ2323、ＳＤ2324、ＳＤ2326、ＳＤ2327の4条があり、いずれも奈良時代と考えられる。方位はわずかずつ異なるが、古里と塚山の字界の近くに集中することから奈良時代においてもここが一定の地境に相当する地点であった可能性も考えられる。なお4条の溝のうちＳＤ2323及びＳＤ2324は南北溝であるＳＤ2325と重複しているが、いずれもＳＤ2325より新しいものであることを確認している。

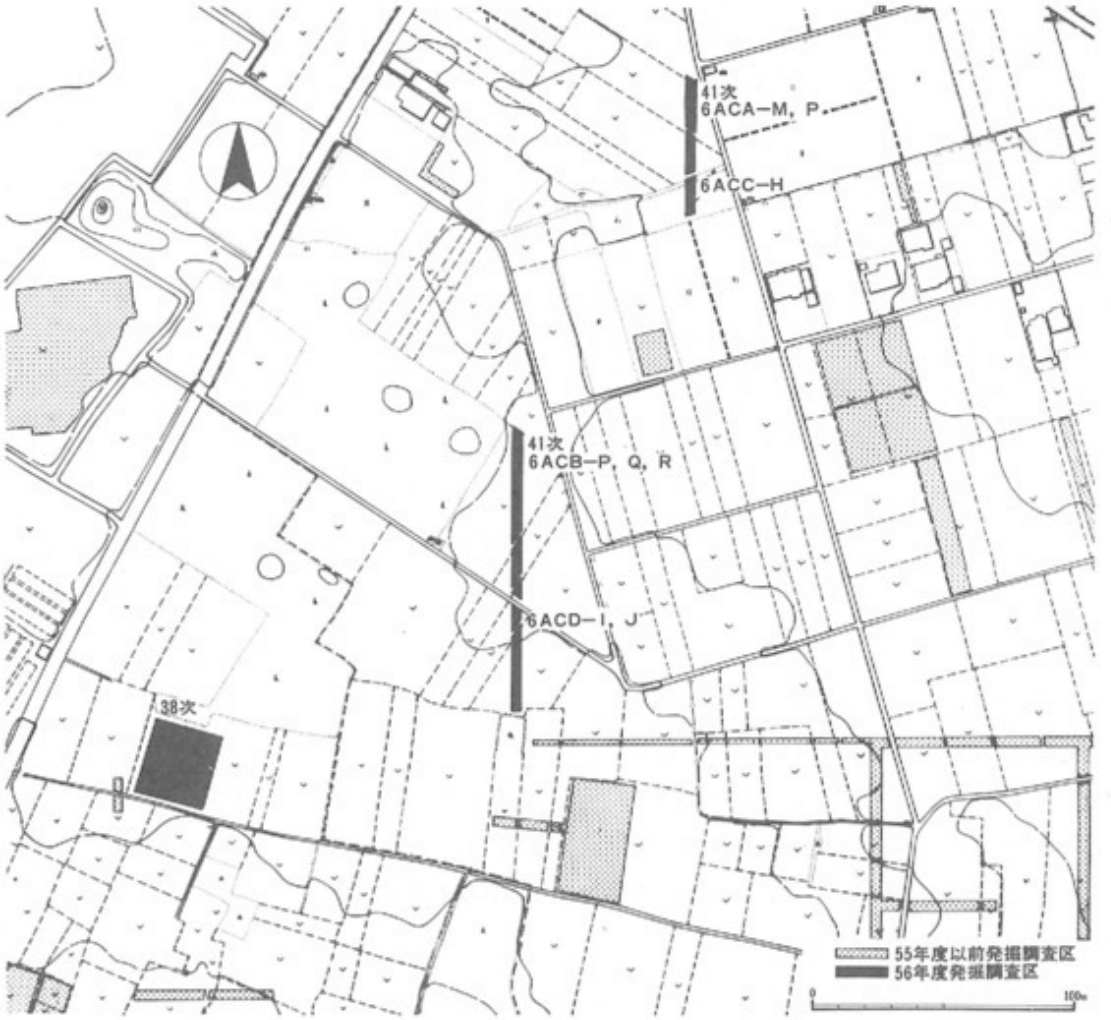
一方鎌倉時代の大溝とされるＳＤ５はほぼ当初の予想通り６ＡＣＣ－Ｈの北端で検出した。部分的に現在の農道下に続くほか、溝上部では近世以降の攪乱を受けているため明確ではない

が推定幅は 3.5m前後と思われ、深さは遺構面から約 2.6mを測る。今年度はこのトレンチ調査のほか現状変更に伴う調査として2ヶ所で大溝の東の延長部分を検出している。しかし当調査区での溝の幅・形状等はこれらと若干異なり、西側の古里B地区及び同C地区に類似するものである。

〔遺　物〕当トレンチでの遺物は奈良時代の土器と、SD5から出土した鎌倉時代の遺物が大半を占めるが、全体にその出土量は非常に少ない。わずかにSD2327から土師器長甕が出土したほか各溝等で小片が出土するのみである。SD5では鎌倉時代の遺物とともに埋没過程で混入したと思われる蛇ノ目高台の緑釉陶器片1点が出土した。そのほかSD2326付近の包含層からは土馬の頭部片1点が出土している。

（II）6ACB-P·Q·R　6ACD-I·J

塚山古墳群のうち15基が現存する林の東側に設定したトレンチで、南北 110mに及ぶため農



第9図　第41次発掘調査区位置図　古里地区（1：3000）

道を挟んで6ＡＣＢ地区と6ＡＣＤ地区とにまたがる。塚山地区ではこれまで今年度も含めて2ヶ所の面調査や3ヶ所のトレンチ調査が行なわれ奈良時代の古道等各種の遺構が確認されているが、調査区はいずれも南部に集中し、塚山地区北部の遺構については不明であった。そこでこの地域の遺構状況を知るため設定したものである。

〔遺　構〕トレンチ北半の6ＡＣＢ地区では遺構の密度が薄く、検出した遺構は削平された古墳の周溝と思われるＳＸ2330、ＳＸ2331、ＳＸ2333、ＳＸ2334の4基とＳＤ2332、ＳＤ2336の溝2条のみでその他のピット等は大半が立木の根跡かと思われる小規模で不整形なものであった。遺物の出土が非常に少なく、土器小片が散見されるのみであるため遺構の時期はいずれも不明であるが、ＳＸ2330が古墳時代かと思われるほかＳＤ2332が奈良時代の溝である可能性を指摘できるのみである。類似した周溝は古里Ｃ地区をはじめ塚山地区南部や斎宮小学校敷地内でも検出されているがこれらには奈良時代～平安時代の掘立柱建物など斎宮にかかわる遺構と重複し、これらの遺構が形成された時期には削平されたものと思われる。しかし当6ＡＣＢ地区では斎宮存続期間内に比定し得る遺構の重複は認められず、奈良時代においても、平安時代においても広大な面積に及ぶ斎宮の建物群が配置される範囲に組み入れられず、取り残されていた地域であると考えられる。

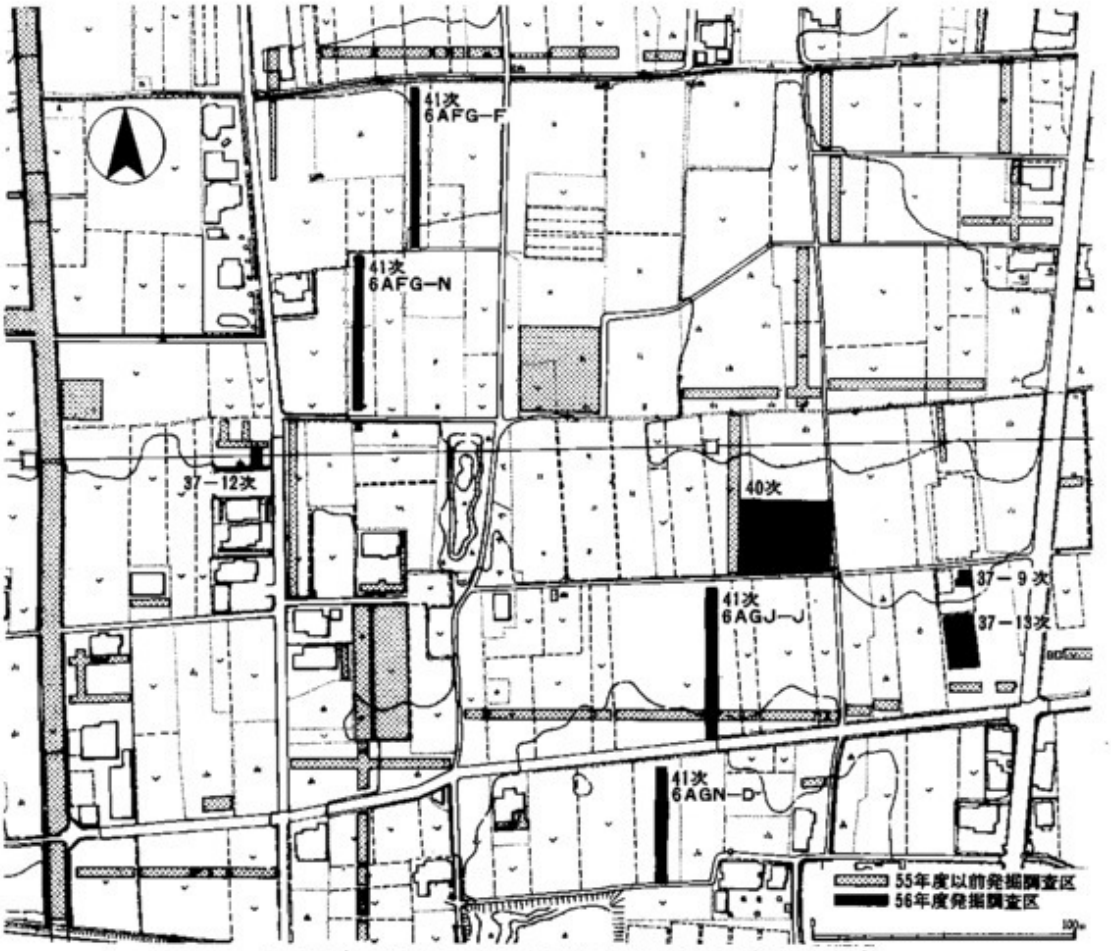
一方幅約2ｍの農道を挟んで南側に隣接する6ＡＣＤ地区では、様相が若干異なる。明確な遺構は掘立柱建物ＳＢ2335と土坑ＳＫ2337のみで遺物の出土量も少なくその時期は不明であるが、古墳の周溝と思われるような溝は検出されず、1棟とはいえ掘立柱建物が確認されている。また小規模で、掘立柱建物としては確認できないものの比較的深く整然としたピットも散見される。このため現在の農道以南である6ＡＣＤ地区は塚山地区南部から広がる建物群の続く一画を占める地域であると考えられる。

〔遺　物〕今回のトレンチ調査の中でも 110ｍと最も長いトレンチにもかかわらず前出のように遺構の密度は非常に薄く、このためか遺物の出土量も非常に少なく土師器等の細片がわずかに見られるのみで、遺構の時期も十分に明確にできないものであった。

（Ⅲ）6ＡＦＧ－Ｆ

斎宮跡東部のＣ地区である中町地区に設定した4ヶ所のトレンチ中で最も北西に設定し字西加座の北東部に位置する。中町地区では一定の距離で縦横に延びる区画溝の存在が明らかになりつつあり、当トレンチでも南北方向の区画溝に一致する可能性も考えられる地点であった。トレンチは調査の対象とした畑の形状から幅3ｍ、長さ63ｍにわたって調査した。

〔遺　構〕調査の結果トレンチの位置は南北方向の区画溝よりやや西にあたるものと思われ、平安時代前半から後半にわたる各種の遺構を検出したが、他の区画溝周辺の状況と類似してその数は比較的少なかった。



第10図　第41次発掘調査位置図　中町地区（1：3000）

平安時代前半の遺構はいずれも土坑で、ＳＫ2342、ＳＫ2347～ＳＫ2349の４ヶ所を検出した。いずれも不整形で比較的浅く、遺物の出土量も少なかった。

平安時代中葉の遺構には掘立柱建物ＳＢ2346を確認したほか溝ＳＤ2345、土坑ＳＫ2344等を検出した。ＳＢ2346は柱掘り方２ヶ所を検出したのみであるが、その両者の規模・深さ等が類似することから掘立柱建物として確認したものである。また両者の間隔が 4.4ｍを測ることから梁行２間の東西棟であろうと考えられる。次にＳＤ2345は幅約60㎝、深さ10㎝前後の小規模な溝で継続的にトレンチをほぼ南北に縦断する。これまでの調査によってトレンチの東側に隣接して南北方向に続く区画溝の存することが予想され、ＳＤ2345は小規模な溝ではあるが、これに付随する一連の溝であることも考えられよう。ＳＫ2344はＳＤ2345の西側に接し、調査区外に広がる状態で検出した土坑である。このため形状は不明確であるが、長径２ｍ前後の楕円形を呈するものと思われ、深さは約25㎝を測る。

平安時代後半の遺構では、ＳＤ2340とした溝１条とＳＫ2341及びＳＫ2343の土坑２ヶ所を検出した。ＳＤ2340は東西方向に延びる区画溝に相当するもので、昭和55年度のトレンチ調査で

も調査区の東方で一連の溝を確認している。トレンチ北端に接して現在も農業用水路として機能している水路があるためかＳＤ2340の北半は近世以降の攪乱を受けており、溝底のわずか10cmたらずを残すのみである。このため溝幅等は不明で、深さは遺構面から約70cmを測る。２ヶ所の土坑のうちＳＫ2341は不明確であるが、長径３ｍ前後の楕円形を呈すると思われる。

〔遺　物〕前出のように区画溝に近接すると考えられ、遺構が比較的少なかったためか遺物の出土量はさして多くない。しかし緑釉陶器片の出土点数は10点に及んでいる。特に区画溝に相当するＳＤ2340は上部がほとんど攪乱を受けているにもかかわらず椀底部片など６点が集中して出土している。

（Ⅳ）６ＡＦＧ—Ｎ

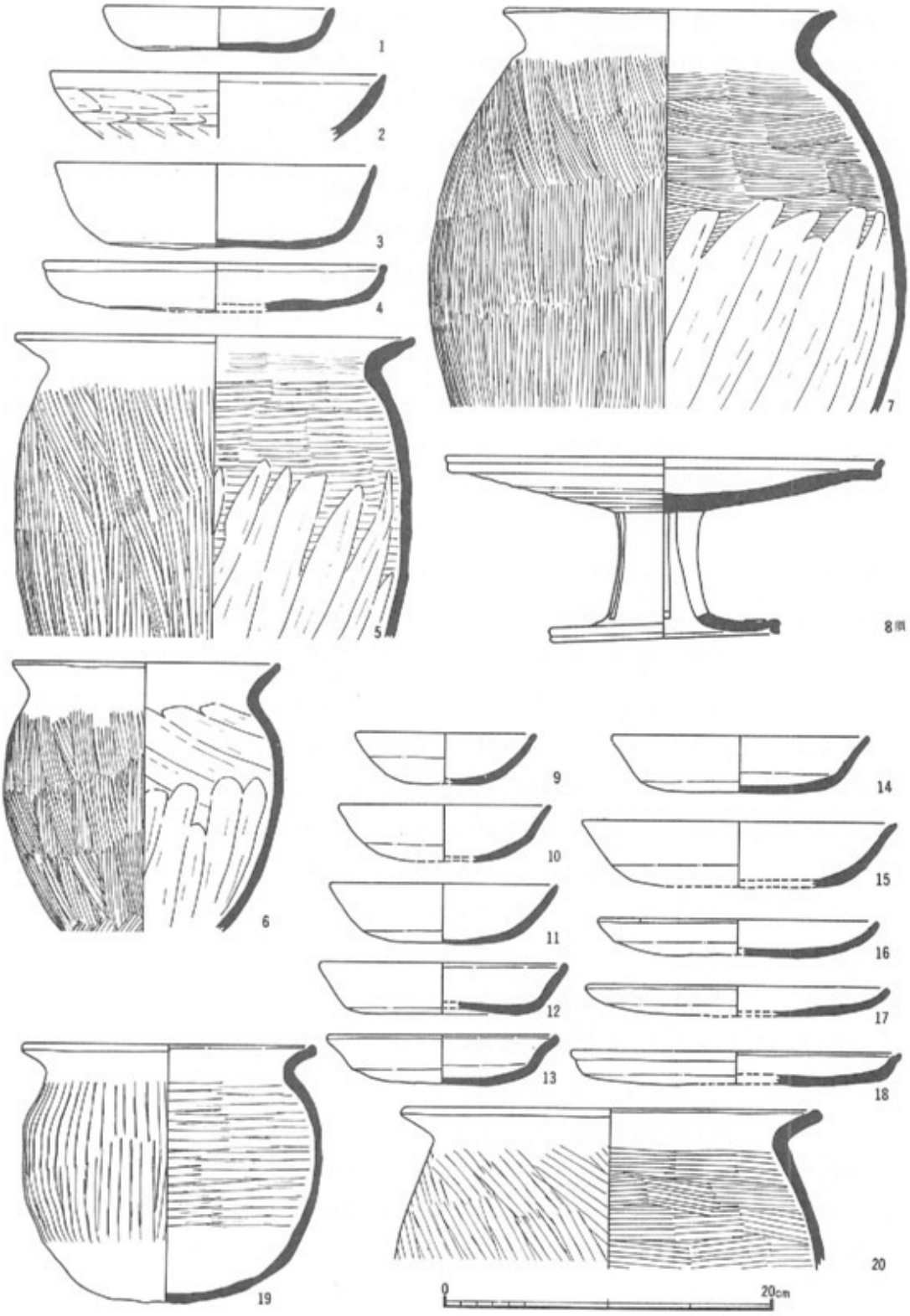
前出の６ＡＦＧ－Ｆ地区のトレンチ南端から西へ約20ｍの地点でさらに南へ延長したトレンチである。当トレンチ南端でも東西方向に延びる区画溝が存することの予想できるところである。ここでも調査の対象とした畑の形状からトレンチ幅は３㎡として60ｍにわたって調査を行なった。

〔遺　構〕この地区の遺構で最も古い奈良時代の土坑がＳＫ2358である。一部西側の調査区外に続くが径約 2.4ｍ、深さ30cm前後の土坑で比較的まとまった遺物の出土を見た。

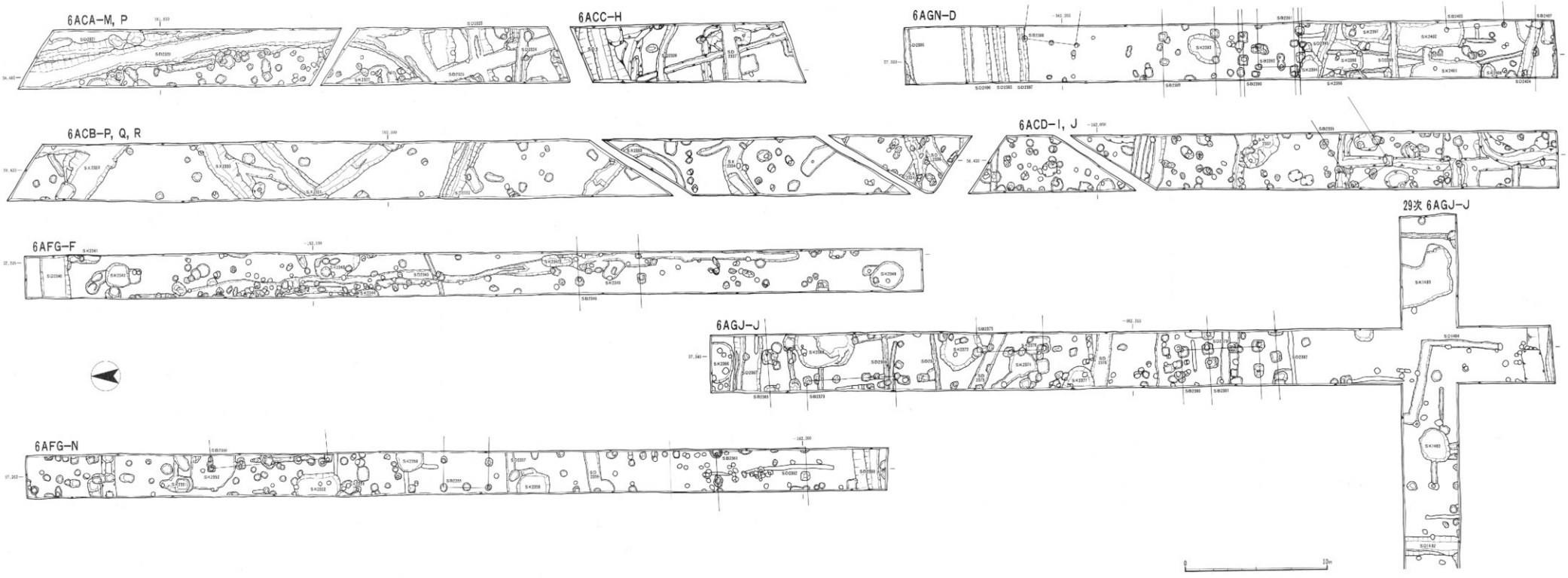
平安時代前半の遺構は多く掘立柱建物にはＳＢ2350、ＳＢ2355、ＳＢ2361の３棟があるほかＳＫ2352～ＳＫ2354の土坑３ヶ所、ＳＤ2357、ＳＤ2360の溝２条などがある。掘立柱建物のうち桁行４間のＳＢ2350と桁行３間のＳＢ2361はいずれも南北棟で棟方向はＮ３°Ｗを示している。ＳＢ2355は梁行２間（ 3.2ｍ）の小規模な掘立柱建物であるが、座標の方位に一致する東西棟である。３ヶ所を検出した土坑のうちＳＫ2352とＳＫ2353の２ヶ所は比較的大型で、深さは10cm～20cmと浅い。ＳＫ2354は径約１ｍで深さ45cm前後の小型の土坑である。また溝にはＳＤ2357とＳＤ2360の２条を検出したが、いずれも東西溝で特にＳＤ2360は区画溝に相当するものである。

平安時代中葉の遺構として時期の明らかなものはトレンチ南部で約６ｍにわたって検出した南北方向の小規模な溝１条のみである。幅約30cm、深さ５cm前後を測る。

〔遺　物〕これまでの調査によって奈良時代の遺構・遺物は斎宮跡西部に集中する傾向のあることが知られ、宮域東部の中町地区では平安時代初頭から中葉にかけての遺構・遺物の多いことが明らかになりつつある。当地区で検出した遺構もその大半が平安時代前半のものであるが、量的に多くはないものの奈良時代の土器を出土するＳＫ2358の検出は斎宮々域の中町地区への広がる時期を示すものといえよう。そのほか当トレンチの包含層からは緑釉陶器片がわずか２点ではあるが出土している。



第12図　第41次出土遺物　ＳＫ2358、１～８　ＳＫ2366、９～20



第11図　第41次遺構実測図（1：200）

（Ⅴ）6AGJ—J

昭和55年度のトレンチ調査によって多数の掘立柱建物や井戸など検出し、今回のトレンチ調査と並行して第40次調査として面的発掘調査を実施した6AGH－L・M地区の南西部から南へ60mにわたって設定したトレンチである。トレンチ南端部では昭和54年度に調査を実施した東西方向のトレンチが交叉している。

〔遺　構〕掘立柱建物5棟をはじめ多くの土坑・溝等を検出したが、その大半が平安時代前半の遺構である。5棟の掘立柱建物のうち時期不明のSB2375を除く4棟はいずれも平安時代前半で、トレンチ調査のため全容は不明であるが、SB2365とSB2381が東西棟、SB2370とSB2380が南北棟と思われる。また棟方向はすべてがN3°Wまたはこれに直交する方位を示している。土坑はSK2366、SK2368、SK2372、SK2374、SK2376、SK2377と平安時代前半のものばかり6ヶ所を検出した。長径4mをこえるSK2368から1.6mほどのSK2376まで大小様々であるが比較的多くの遺物を出土し、とりわけSK2360ではまとまった遺物の出土が見られた。同じく平安時代前半の溝はSD2367、SD2369、SD2371、SD2373、SD2378、SD2382の6条を検出したが、大きく角度をもつSD2373を除いていずれも東西方向に続く溝で、中でもSD2369、SD2371、SD2382の3条は幅約40cm、深さ10cm～15cmの小規模な溝であるが掘立柱建物群の棟方向と類似してE3°N前後の方位を示す。

平安時代中葉の遺構は少なく、溝2条のみである。SD1484はすでに昭和54年度のトレンチ調査で検出している溝である。またSD2379は幅約60cm、深さ10cmあまりの溝であるが、ほぼ東西の方位に沿って延びる溝である。

〔遺　物〕SK2366などの土坑をはじめ当トレンチでは比較的多くの遺物が出土したが平安時代前半の遺構が多いこともあって遺物のうえでもこの時期の遺物が大半を占めている。また緑釉陶器は細片ながら3点が出土している。特殊な遺物としては布目の圧痕を残す瓦の小片1点がSK2368から出土している。これまで斎宮跡での瓦の出土は宮域西部の古里地区を中心として数点が出土しているのみであり、宮域東部にあたる当地区での出土は特異である。

（Ⅵ）6AGN—D

前出の6AGJ－J地区より現在の道路を隔てた南側の畑で南北46mにわたって設定したトレンチである。東西に延びる現在の道路は東加座と鍛治山の字界に当たり、これまでの調査によってこの部分に区画溝のあることが知られている。今回のトレンチでもその北端付近に区画溝の所在することが予想されるところであった。

〔遺　構〕掘立柱建物7棟をはじめ溝・土坑など多数の遺構を検出した。ここでも前出の6AGJ－J地区と同様平安時代前半の遺構が大半を占めている。またトレンチ北端部は区画溝に相当する地域であり、掘立柱建物はSB2388を1棟検出したほか東西方向の溝4条を検出した

のみで、その他の遺構はトレンチ中央から南半に集中している。

平安時代前半の遺構は掘立柱建物では7棟のうちＳＢ2390～ＳＢ2392、ＳＢ2407の4棟がこの時期のものであることを確認したが、ＳＢ2388、ＳＢ2389、ＳＢ2405の3棟はいずれも時期不明である。棟方向のうえではＥ8°Ｓを示すＳＢ2388とＥ4°Ｎを示すＳＢ2405の2棟を除いていずれもＥ2°Ｎの棟方向を示している。またＳＢ2390～ＳＢ2392の3棟はトレンチのほぼ中央で重複して確認したものである。特別大型の柱掘り方をもつ建物は見られないが比較的多くの掘立柱建物が所在することから建物配置のうえで重要な一画に相当しているものと思われる。また同じ平安時代前半の土坑では7ヶ所を検出したが、ＳＫ2393、ＳＫ2394、ＳＫ2406のように径1ｍ～2ｍの小型の土坑とＳＫ2396、ＳＫ2397、ＳＫ2401、ＳＫ2402のように長径4ｍ前後の大型の土坑とがあり、いずれも比較的多く遺物の出土を見た。溝ではＳＤ2399、ＳＤ2400、ＳＤ2403の3条をこの時期のものと確認した。当トレンチの北端部に調査当初から区画溝の所在が予想されたがこの付近で検出した4条の溝のうちＳＤ2400は平安時代前半と考えられる。

平安時代中葉の遺構は少なく溝1条、土坑1ヶ所を確認したのみである。ＳＤ2395は平安時代前半のＳＤ2400等の区画溝に比べ大きく東で南にふれる方位を示す溝である。またＳＫ2398はトレンチ西壁に接してその一部をわずかに検出したのみでその全容は不明である。

鎌倉時代の遺構も少なくＳＤ2385の溝1条を検出したのみである。これまでの調査で区画溝を確認した場合ほとんど平安時代前半から鎌倉時代にわたる各時期の溝が重複またはわずかのズレをもって並行するなど一定の範囲に集中している。今回の場合も平安時代前半のＳＤ2400や鎌倉時代のＳＤ2385のほか時期不明のＳＤ2386、ＳＤ2387が並行して検出された。

そのほかトレンチ南端でも時期不明の溝ＳＤ2404を検出したがこの溝も平安時代中葉の溝であるＳＤ2395と同様に東で南にふれる方位を示すものである。

〔遺　物〕トレンチ南端部に平安時代前半の大型の土坑が検出されたためこの時期の遺物は比較的多くの出土を見た。しかしその他の時期は遺構が少ないこともあって非常に少ない。このためか特殊遺物としてあげられるものはこれといって無く、緑釉陶器の出土も当トレンチでは全く見られなかった。

（Ⅶ）まとめ

昭和54・55年度の2ヶ年は東側のＣ地区にあたる中町地区に集中して実施してきたトレンチ調査も今年度はその一部を西側のＣ地区にも設定して実施した。検出した遺構・遺物は上記のとおりであるが、これによって考えられる各トレンチ周辺の状況についてふれてみたい。

６ＡＣＡ・６ＡＣＣ地区では東西及び南北方向に延びる奈良時代の溝と鎌倉時代の大溝を検出したほかにはこれといった遺構は少なかった。これまでの調査によって宮城中央部以東では平安時代の斎宮を一定単位に区画する溝の広がりが明らかになっている。しかし宮城西部に広

がる奈良時代の遺構には全体として規格性に乏しく、建物群の棟方向も様々である。このような周囲の状況の中で今回のトレンチ1ヶ所の調査結果から即断することはできないが、当トレンチの地点が奈良時代の建物群の境界地域に相当している可能性が考えられるものである。

つづいてその南東にあたる6ACB・6ACD地区でも6ACB地区で削平された古墳の周溝4基、6ACD地区で掘立柱建物1棟を検出したほかには遺構は非常に少なかった。塚山地区南部では古墳を削平した上に何棟も掘立柱建物が重複していることが知られているが、当トレンチの範囲内では削平された古墳の範囲内に奈良時代から鎌倉時代の遺構の重複はまったく認められず、全体に遺構の密度は非常に希薄である。またトレンチの西側に隣接する林の中には現在も墳丘を遺存する塚山古墳群15基が所在しており、今回検出した古墳は近年の開墾によって削平されたものと想定される。このような状況から当地域は、奈良時代の遺構が集中する宮域西部と平安時代の斎宮の中心部と考えられる宮域中央部以東との間に位置しながらも斎宮の建物群の敷地としては取り入れられることのなかった地域と考えられる。

一方東側のC地区にあたる中町地区では長さ60m前後のトレンチ4ヶ所を設定して調査を実施した。いずれも昨年までの調査によって確認された区画の内側で、このうち3ヶ所のトレンチで区画溝を再確認した。特に6AFG－F地区ではトレンチ北端で東西方向の区画溝のうち最も北側に相当する区画溝を検出したほか、浅く断続的ながら南北に縦断する平安時代中葉の溝を検出し、全体に遺構の密度が薄いことも含め、図上の想定に一致して南北方向の区画溝に近い地点であることが推定される。また、6AGJ－J地区北端で検出したSD2367をはじめとする東西方向の溝は、約140mごとに20m前後の幅に数条の溝が集中する区画溝に相当しないものである。しかしこれらの中のいくつかは区画溝に囲まれた範囲をさらに小さい区画に細分する溝である可能性も考えられる。

掘立柱建物については今回の中町地区のトレンチ4ヶ所で計16棟を確認した。その棟方向は大半がE2°N～E3°N前後とこれに直交する方位を示し、区画溝に類似するものである。時期的にも大半が平安時代前半で、溝・土坑など他の遺構と同様の傾向である。このような傾向はこれまでの中町地区の各調査区に共通するものであり、中町地区は平安時代前半から中葉にかけての遺構が多い地区であることがいえよう。一方松阪広域市町村圏道路を隔てて西側の宮域中央部では御館・柳原・下園など面的な発掘調査が行なわれた所では平安時代前半から末葉まで各時期の遺構が平均的に分布している。しかし範囲確認調査によるトレンチの調査結果等もあわせて概観してみると平安時代後半から末葉にわたる時期の遺構が中町地区に比べて多い傾向が窺える。このようなことから平安時代前半から中葉には中町地区の大半を占めていた斎宮寮の中心的地域が平安時代後半から末葉には宮域中央部の上園・下園や鈴池などの地域に移行したものとも考えられ、今後の検討を要する点といえよう。

Ⅶ　第 37 次 調 査

（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）

（A）　第37－4 次調査

第37－4 次調査　6ＡＦＣ－Ｍ（日本経木工業）

この調査は、日本経木工業が国史跡内に計画した宅地開発に伴う事前調査である。

調査地は宮域の北東部に位置し、字西前沖にある。調査地の北側は、斎宮跡の史跡指定区域の境界と接しており、調査前から当地区の中央部を古里地区から続く鎌倉時代の大溝が東西に走ることが予想されていた地区である。

そもそも発掘調査に至った問題の起こりは、以前に国有地払い下げによって得られた土地を民間が宅地造成の計画をしたことに始まる。国史跡内における開発だけに、国（文化庁）・県・町とも慎重な協議のうえ、第１次調査（試掘）を実施したうえで、今後の対処を再度協議することとなった。

第１次調査は、昭和56年５月13日から６月中旬にかけて行ない、幅４ｍのトレンチを南北に３条設定。総延長 210ｍにわたり、重機で表土を排出した後実施した。

調査の結果、当初の予想通り、鎌倉時代の大溝をはじめ、平安時代の掘立柱建物や、これに伴うと思われる土坑等を多数検出。遺構が現状変更申請地全面（約 4,700㎡）に及ぶことが確認された。そこで再度、その取り扱いについて、文化庁の指導を得ながら、県・町・原因者（日本経木工業）の三者で協議がもたれ、調査後の措置については、文化庁の意見に従うという条件で、第２次調査（本調査）が実施されるに至った。

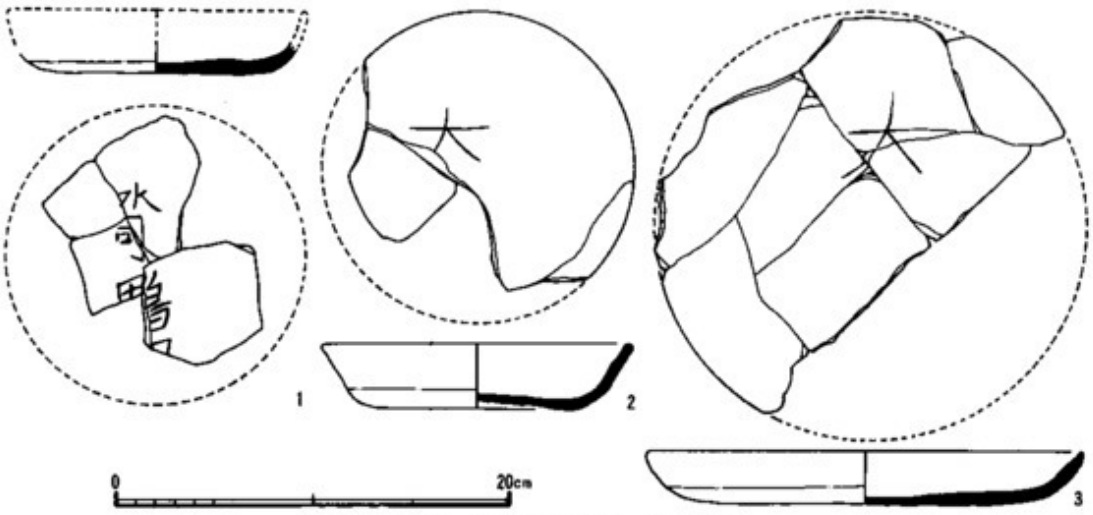
本調査は、掘立柱建物が多く検出された南半分と、溝が多く検出された北半分との２地区に分け、昭和56年７月17日から12月25日にかけて実施した。

調査の結果、奈良時代後半～平安時代初めの竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟をはじめ、平安時代の掘立柱建物18棟のほか、これらの建物に伴うと考えられる土坑・井戸、及び建物群を区画するものと思われる溝や古道等を多数検出した。

（Ⅰ）奈良時代後半～平安時代初頭の遺構

竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、土坑11、溝３条がある。

竪穴住居ＳＢ2441は、一辺 3.6ｍの方形を呈する小規模なもので、東壁にカマドをもっている。近辺では、楽殿地区のＣトレンチで１棟同時代と考えられる竪穴住居が見つかっているが、



第13図　第37－4次出土遺物　SK2450

竪穴住居の密度からすれば、西方の古里地区や中垣内地区とは、比ぶべくもなく、むしろ、調査面積の割に今回1棟しか見つかっていないということが重要な意味をもっている。

同様に掘立柱建物も1棟しか見つかっていない。SB2447は、4間×2間の東西棟で、桁行柱間が梁行柱間に比べて短く、ほぼ同時代の建物と共通した特徴をもっている。柱掘り方は、一辺50cm～80cmの不整方形を呈しており、比較的大型である。時期的には、奈良時代末葉から平安時代初頭頃のものと思われる。

土坑には、奈良時代後半と思われるSK2439、SK2440、SK2450、SK2459と、やや時期が下って奈良時代末葉から平安時代初頭頃のSK2413、SK2461～SK2466がある。いずれも竪穴住居や掘立柱建物に関係するものであろう。ところで土坑の中には、SK2463、SK2464、SK2465のように、前後関係は不明だが連続して切り合う土坑群があり、あるいは廃棄物の捨て場が一定の場所に限定され、意識されていたことを示しているものかもしれない。

溝には、SD2410、SD2412、SD2438がある。このうちSD2438は西へ32m、南へ49m延びることが確認されており、おそらく掘立柱建物SB2447を区画した溝であろう。

（II）平安時代中葉の遺構

掘立柱建物9棟、土坑1、井戸1、溝5条がある。

掘立柱建物には、大別すると、柱通りが北に対し西に偏るもの、SB2431、SB2454、SB2471と、東へ偏るもの、SB2445、SB2449、SB2479、SB2486～SB2488とがあり、前者に比べ、後者に建物の棟方向、及びその配置に計画性がみられる。

SB2445は4間×2間の東西棟とも考えられるが、ここではさらに一間分東へ延ばして5間×2間の建物と考えた。

SB2487は、SB2486の柱掘り方を切っており、SB2486より後出のものである。このすぐ東側には、若干規模は小さくなるものの北側妻柱通りを揃えて建つSB2488があり、同時期に

存在したとすれば並舎とも考えられる。いずれも大型の柱掘り方をもち、一部の柱掘り方内には、こぶし大の根固め石が数個認められた。

土坑は調査区北端のＳＫ2422のみが検出された。一辺 1.5ｍ前後、深さ10cm前後の小土坑である。

井戸ＳＥ2460は径２ｍの円形素掘り井戸で、地山より１ｍ程で、壁面が外側へかなり崩落していた。そこで今回初めての試みとして、長さ７ｍの鋼矢板を方形に打ち込んで、ＳＥ2452と共に底まで完掘することにした。その結果地山より深さ 4.3ｍで底に達し、底の絶対高は 4.4ｍであった。底径はおよそ 0.8ｍで徐々に細く掘られていることがわかった。出土遺物としては土師器杯・皿・甕・灰釉陶器椀・皿のほか、底近くで斎串の先端部や曲物の破片が出土した。

溝には、ＳＤ2421、ＳＤ2423、ＳＤ2429と、並走する溝ＳＤ2477、ＳＤ2478がある。いずれも建物との関係ははっきりしない。

（Ⅲ）平安時代後半の遺構

土坑SK2456、SK2458と溝SD2474を検出した。溝ＳＤ2474は、奈良時代末葉～平安時代初頭頃の溝ＳＤ2438や、平安時代末葉の溝ＳＤ2475と共に、ほぼ同じような場所を南北に走っており、これらの溝が長期にわたって土地を区画する溝として意識されていたものと思われる。

（Ⅳ）平安時代末葉～鎌倉時代の遺構

掘立柱建物８棟、土坑11、井戸３基、溝20条、古道２がある。

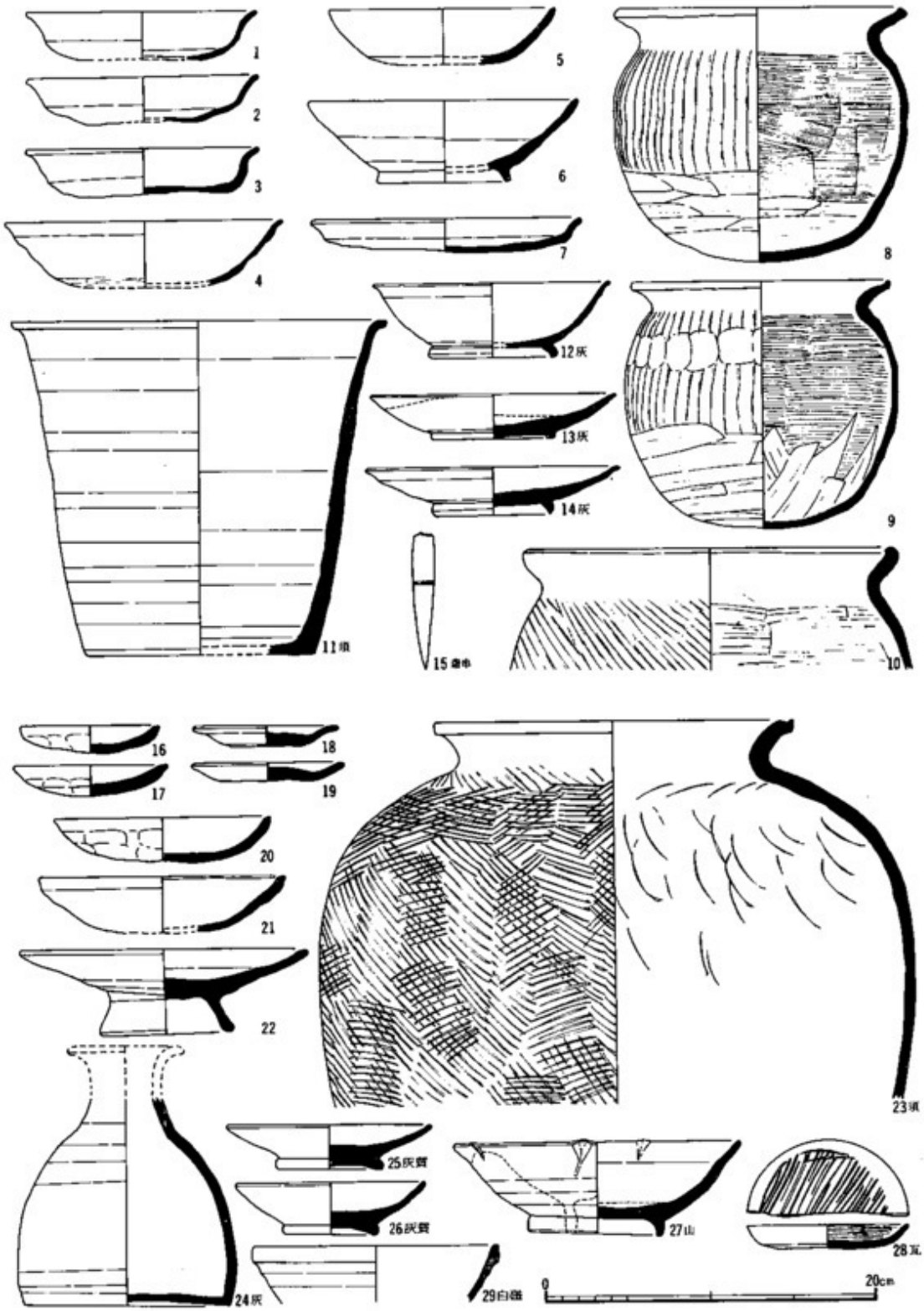
掘立柱建物の中には、斎宮では初例の２間×２間の身舎に北・東・西に廂の付く三面廂付き建物（ＳＢ2443、ＳＢ2468、ＳＢ2483）があり、それぞれ南東隅に広さ２間×１間分で、深さ20cm前後の浅い土坑を設けており、共通した建物の構造を見い出すことができる。土坑は柱を避けるように掘られており、建物が建てられたあと掘られたもので、明らかに建物に付随した施設であることがわかる。土坑からは、山茶椀・土師器小皿・甕等、日常雑器が多く出土した。

これらの建物の一つ、ＳＢ2468はさらに北にもう一間分孫廂を延ばした４間×４間の規模の大きな建物である。

この３棟の建物は、棟方向を違え、一定の間隔を置いて配置されており、もし同時期に存在したとすれば、官衙の建物というより、それぞれが独立した機能をもった言わば個々の居住用の建物とも考えられる。

２間×２間のＳＢ2448、４間×１間のＳＢ2457は、それぞれ上記のＳＢ2443、ＳＢ2468と棟方向や、柱通りを揃えており、副屋的な建物と理解される。

一方、これらの建物群と多少時期が異なるかと思われる掘立柱建物に、南面廂付建物SB2453、これと柱通りを揃えるＳＢ2446や、よく似た方向を示すＳＢ2469があり、平安時代末葉におけるある時期のセット建物群と思われる。



第15図　第37－4次出土遺物　ＳＥ2460、１～15　ＳＫ2480、16～29

土坑は調査区北端のＳＫ2411を除くと、他は掘立柱建物の近辺で見つかっており、ＳＫ2451、ＳＫ2467、ＳＫ2473、ＳＫ2480～ＳＫ2482、ＳＫ2485などがある。又前述したように建物の付随施設と考えられるものにＳＫ2444、ＳＫ2470、ＳＫ2484がある。

土坑ＳＫ2467は径60cmの小土坑であるにもかかわらず、多量の土師器皿・小皿のほか、土師器甕・山茶椀が少量出土した。

井戸は３基（ＳＥ2414、ＳＥ2442、ＳＥ2452）確認された。このうちＳＥ2452のみ矢板を打って完掘した。径 2.2ｍの円形素掘り井戸で、地山より５ｍ、絶対高 3.9ｍで底に達した。井戸埋土内より山茶椀66個体をはじめ、若干の土師器皿・青磁椀・曲物・竹片等が出土した。

溝は掘立柱建物群を区画するような形で何条も掘られており、幾度か掘りなおされていることが確認された。時期的には平安時代末葉から鎌倉時代に及ぶものである。

南北に走る溝ＳＤ2475は巾 2.6ｍ、深さ 0.8ｍ～ 1.2ｍで、南に行くにつれ深くなっている。同時代と思われる溝の中では比較的古い方で、溝幅も広い。Ｌ字形に曲がるＳＤ2435に切られており、ＳＤ2435とＳＤ2418が交わる手前で北の端が終わっている。

これと並行して走るＳＤ2476も同様に北で西に折れて終わっている。

東西溝ＳＤ2415とＳＤ2418は、幅２ｍ、深さ40cm前後のよく似た溝で、心々距離約４ｍの間隔をおいてほぼ並走しており、さらにこれらの溝は、調査区の東で、北上する溝ＳＤ2425や南下しすぐ東に走る溝ＳＤ2435につながり、Ｌ字形に曲る溝ＳＤ2428や、これの掘りなおしと考えられるＳＤ2426との間に周囲の遺構面より一段低い遺構の空白地帯を形成している。この溝によって挟まれた部分は随所にこぶし大の石敷箇所がみられ、道路跡と推定される。ここでは東西道路をＳＦ2419、そしてこれに取り付くＬ字形に北走及び東走する道路をＳＦ2427とした。道路ＳＦ2427の石敷き下には、暗渠的な排水施設であろうか、道路と直交するように深さ10cm前後の小溝が何条も掘られていた。

溝ＳＤ５は溝の中では最も新しく、古道を分断する形で掘られている。溝セクションより２回掘られていることが確認されており、１回目の方が深くて幅も狭い。時期的には鎌倉時代に掘られた溝と考えられるが、出土土器の中には量的に少ないが室町時代の天目茶椀や土師器鍋、さらにそれ以降の陶磁器類もあり、かなり長期にわたって完全に埋まりきらずに存続していたものと思われる。おそらくこのＳＤ５は、古里地区から宮域北部を東西に走る大溝に続くものであろう。

このほかこの時期の溝に、ＳＤ2416、ＳＤ2417、ＳＤ2420、ＳＤ2424、ＳＤ2430、ＳＤ2433、ＳＤ2434、ＳＤ2436、ＳＤ2437、ＳＤ2455、ＳＤ2472等がある。

溝の前後関係については、溝セクションによってＳＤ2415→ＳＤ2416→ＳＤ2417→ＳＤ５、ＳＤ2418→ＳＤ５、ＳＤ2428→ＳＤ2426、ＳＤ2475→ＳＤ2435といった順序が確認された。

（Ⅴ）遺　物

遺構に伴う出土遺物のうち、約半分が山茶椀を主体とする溝出土の土器である。これ以外では、奈良時代後半の竪穴住居や土坑、及び平安時代中葉の井戸や土坑に伴う土師器杯・皿・甕などが主なものである。

これらの中で特に注目される物に、土坑ＳＫ2450出土のヘラ描き土器「水司鴨□」がある。これは推定口径15.4cm、器高 3.4cmの土師器杯底部外面に焼成前に描かれたもので、同一土坑からはヘラ描き土器「大」も３点出土している。土坑は径 5.2ｍ× 2.8ｍ、深さ15cmを測るが、土坑の広さの割に出土遺物に乏しく、土師器杯・皿・甕・甑等、日常雑器が平箱に１箱分出土したにとどまる。

土器以外では、ＳＥ2452、ＳＥ2460出土の曲物や木の実、ＳＥ2460出土の斎串の先端部がある。

（Ⅵ）まとめ

現状変更に伴う事前調査としては、おそらく後にも先にもその規模では例を見ないだろうと思われるほどの今回の調査では、幾多の成果があった。

まずその第一は、ヘラ描き土器「水司鴨□」の発見である。水司とは、おそらく斎宮寮十三司の一つである水部司のことであろうし、その存在がモノによって証明されたばかりでなく、中央官制の主水司に鴨氏が関与していたのと同様、斎宮寮の水部司においても、鴨氏が関与していたことが推測される。又水司の職掌の一つである氷室の管理ということから、斎宮寮の氷室の推定地まで問題は発展した。

現段階で奈良時代の水司の場所を今回の発掘地点に想定するには、直接これと結びつく遺構に乏しいため、なお検討を要するが、当地区を含めた一帯に水司が所在した可能性の強い地区としてとらえられよう。

第二に、区画溝や古道の発見である。最近宮域東部において、トレンチ調査や面調査によって、平安時代前半及び平安時代末葉～鎌倉時代の区画溝が次第に明らかとなってきているが、宮域の北東部でもその一端を窺い知ることができた。そしてこの区画は、奈良時代末葉から平安時代初頭頃の溝ＳＤ2438に沿うような形で、古道ＳＦ2419や、南北溝ＳＤ2475が検出されており、平安時代を通じて大きな改変がなかったものと思われる。ただし平安時代中葉においては、明確な区画溝と考えられるものが見つかっておらず、疑問が残る。

一方、斎宮北辺を古道が走ることが確認されたことによって、今後そのつながりが注目されるところである。さらに古道は北へも延びており、宮域の広がりという点で新たな検討課題が一つ付け加えられた。

次に掘立柱建物についてであるが、三面廂付建物の検出例は、今回が初めてであり、また南

東隅に土坑を設けるという点でも、今までに検出された掘立柱建物には見られなかったものである。こうした施設をもつ建物は、県内では鈴鹿市郡山遺跡や上野市北掘池遺跡でわずか2～3例見られるのみである。

一方、掘立柱建物の棟方向を見てみると、平安時代中葉・末葉とも北に対して東へ10°前後偏るものが多く、こうした傾向は、北に対し西へ0°～5°偏る建物が多い宮城中・東部の様相とは異なり、宮城西部の塚山地区と類似している。そういった意味で本地区は、宮城周辺部と共通した性格をもっている地区といえよう。

（B） その他の現状変更緊急調査

第37－2次調査　6ADQ－R（野田宅地）

近鉄斎宮駅南方の旧参宮街道沿いの宅地で幅3m、長さ9mの東西トレンチを設定して調査した。検出した遺構は柱掘り方と思われる小穴で、時期的には平安時代前半から室町時代までのものであるが建物としてはまとまらない。土坑はすべて新しい穴である。なお遺物包含層から緑釉陶器小片が1点出土した。

第37－3次調査　6AFC－F（押田宅地）

宮域北部の北野集落西部において幅2mのL字トレンチを延長23mにわたって46㎡調査した。新しい溝・土坑で一部破壊されてはいるが、平安時代各期の遺構を検出した。平安時代前半では掘立柱建物SB2495、土拡SK2494、SK2497、平安時代中葉では幅80cm、深さ20cmの溝SD2493、平安時代後半では掘立柱建物SB2490、SK2496などである。

第37－5次調査　6AFC－G（中村宅地）

宮域北部の北野集落西部において、第37－3次調査区に南接して実施した。調査面積は33㎡。検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝1条で建物は平安時代後半に属する。溝は時期不明である。

第37－6次調査　6ABD－A（北藪倉庫）

宮域北西部の坂本集落南部において32㎡調査した。表土下20cmで遺構面を検出する。検出した遺構は溝3条、土拡1のほか若干の小穴で、包含層中には奈良時代の土器が含まれるが、時期の明らかなものは室町時代の溝SD2503のみであった。

第37－7次調査　6AEC－M（斎王公民館）

宮域北辺部で斎王集落の中央部において188㎡調査した。調査区は遺物包含層から地山の一部が削平されており、遺構はすべて表土下40cmの赤褐色土面で検出した。主な遺構は4条の溝で、このうち時期の明らかなものは鎌倉時代前半と思われる溝SD2505とSD2507のみで他は時期不明である。SD2505は幅3m以上深さ90cmのV字状の整然とした溝。SD2507は深さ15cm前後の不整形溝、なお、SD2510は時期不明ながら、幅2mから2.5m深さ約2mのV字溝

で、字篠林と字苅干の境にのっている。

第37－8次調査　6ADR－P（富山倉庫）

宮城中央南端に近い牛葉集落南部において20㎡調査した。遺構検出面は表土下30cmの赤褐色地山面である。調査面積が小さいため検出した遺構も溝1条のほかは若干の小穴のみである。このうち時期の明らかなものはSK2511とSD2513が平安時代前半に属する。

第37－9次調査　6AGK－E（竹内倉庫）

宮城東部、中町北部の近鉄線北側で実施。第37－13次調査区のすぐ北側に当たる。検出した遺構は、平安時代中葉の掘立柱建物1棟、土坑1、時期不明の南北溝等である。なお遺物包含層から緑釉陶器小片1点が出土した。

第37－10次調査　6AED－O（渡辺宅地）

斎王の森北方約100mの斎王集落内で約22㎡調査した。調査地区全体にわたって現代の土取り穴あるいは樹木抜き取り穴等によってかなり撹乱されており、明確な遺構は検出されず、また遺物もほとんど出土しない。

第37－11次調査　6ADN－O（近鉄斎宮駅）

近鉄斎宮駅校内の便所改築に伴う調査で18㎡調査した。北半部は旧便槽によって破壊されていたが、南半部では平安時代後半と考えられる東西溝1条と、土坑1を検出した。出土遺物は、土師器杯・甕のほか緑釉陶器壺・椀・皿の小片17点がある。

第37－12次調査　6AFH－J（渋谷宅地）

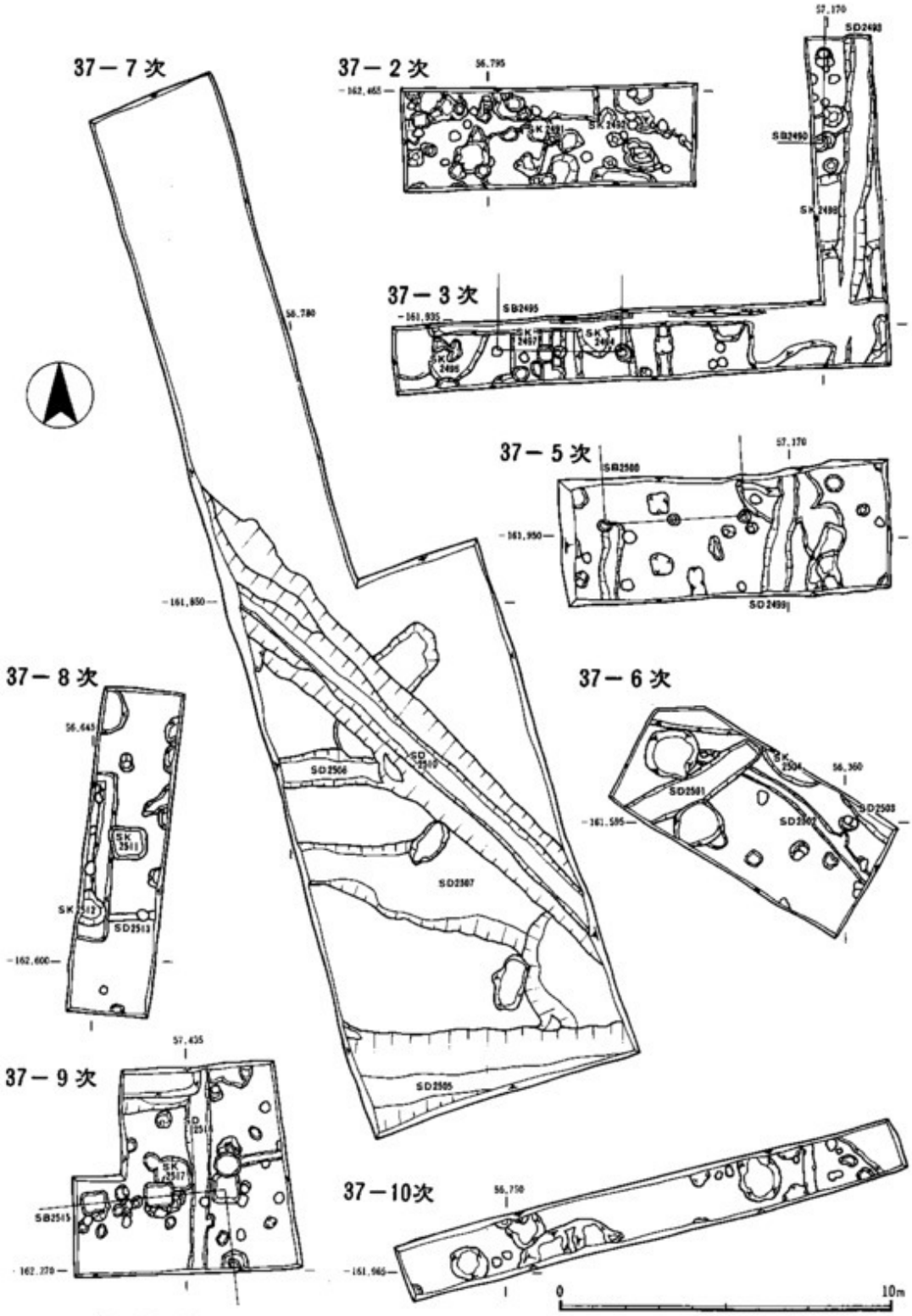
中町北部の字西加座地内で約53㎡調査した。調査区西部では約20cmで地山面に達し若干の小ピットを検出したが、道路に近い東部は土取りによって相当撹乱されており、平安時代後半と思われる溝と土坑が検出されたにとどまる。

第37－13次調査　6AGK－F（竹内宅地）

宮城東部の字東加座地区で、第37－9次調査区に南接する地点で242㎡調査した。検出した主な遺構は、奈良時代から平安時代後半までの竪穴住居1棟、掘立柱建物8棟、土坑19、溝6条等である。

奈良時代の遺構としては、竪穴住居SB2570と土坑SK2545、SK2551、SK2557、SK2558、SK2562、SK2563、SK2566がある。SB2570は平面が長方形の小形の竪穴住居で、約30cm掘り下げられた平坦な床面をもち、東壁にカマドをつくる。柱穴は検出されていない。

平安時代前半の遺構は、掘立柱建物4棟（SB2530～SB2532、SB2540）、土坑8（SK2533、SK2534、SK2537、SK2549、SK2552～SK2554、SK2556）、溝4条（SD2539、SD2542～SD2544）等で調査区北半部に集中する。掘立柱建物は東西棟3棟、南北棟1棟で、柱掘り方が70cm～1mを測る比較的大型の建物で、柱通りも北で西へ4°～6°とよくそろっている。

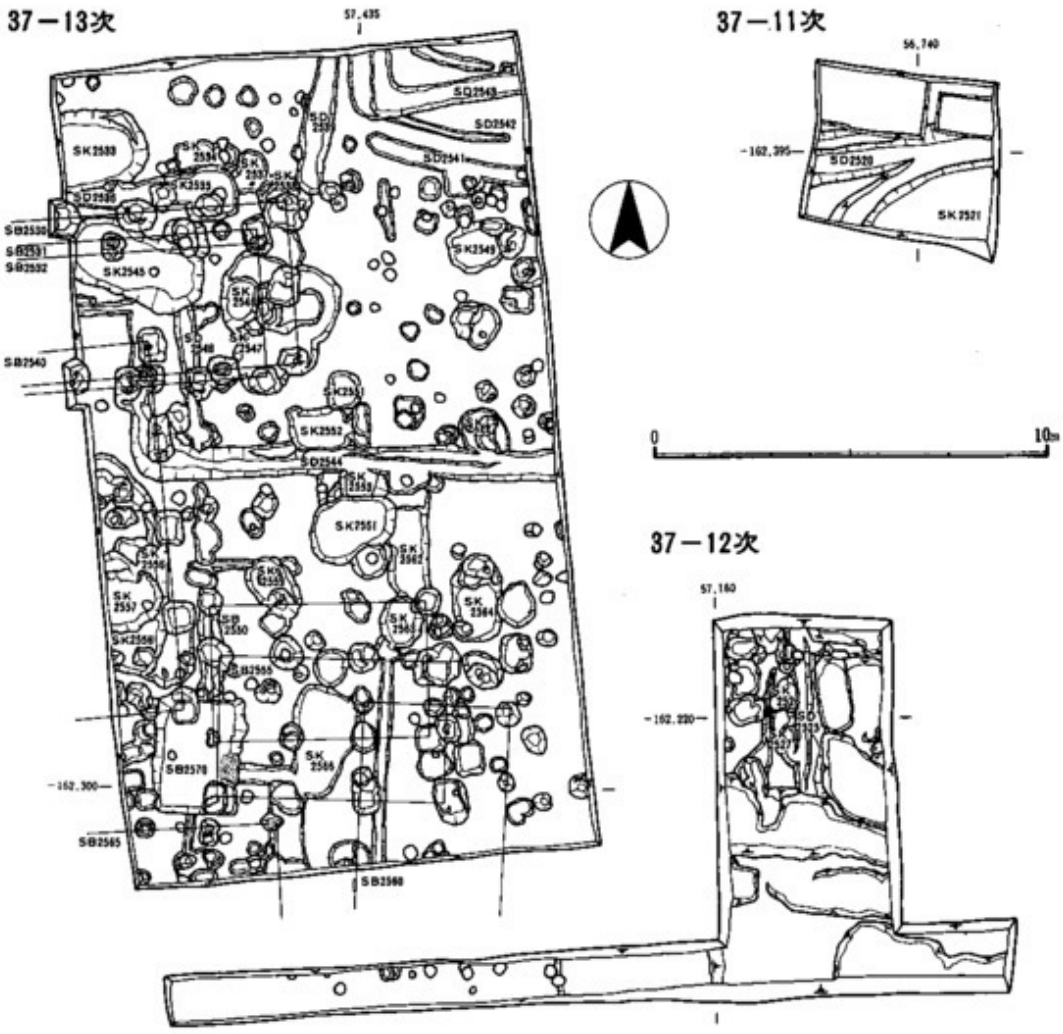


第16図　第37－2次　第37－3次　第37－5次　第37－6次　第37－7次
第37－8次　第37－9次　第37－10次　遺構実測図（1：200）

平安時代中葉の遺構は、掘立柱建物4棟（ＳＢ2550、ＳＢ2555、ＳＢ2560、ＳＢ2565）、土坑4（ＳＫ2546、ＳＫ2547、ＳＫ2561、ＳＫ2564）等で、掘立柱建物は南部に集中する。柱通りの方向は平安時代前半の建物とは異なり北で東へ1°～4°ふれている。また柱掘り方も60㎝前後とやや小さくなる。

平安時代後半の遺構は、土坑ＳＫ2559のみで建物はない。

出土遺物は、奈良時代・平安時代前半から中葉の各種土師器・須恵器・灰釉陶器であるが、緑釉陶器椀・皿の小片が、ＳＤ2544から1点、南端部の小穴から1点、遺物包含層から3点出土している。



第17図　第37－11次　第37－12次　第37－13次　遺構実測図（1：200）

Ⅷ　調査事務所要覧

Ⅰ　調査概要

(1)　調査事業　17地区　11,173㎡

ア　計画発掘調査事業　5地区

第36次調査　中垣内地区　1,087㎡
第38次調査　塚山地区　792㎡
第39次調査　古里地区　1,533㎡
第40次調査　東加座地区　941㎡
第41次調査　C地区トレンチ調査1,404㎡

イ　緊急発掘調査（個人住宅等新築）

第37－1次～13次調査　5,416㎡

(2)　普及事業

ア　現地説明会の開催

(ア)　第36次発掘調査現地説明会

日時　昭和56年6月14日　10時30分
場所　明和町竹川字中垣内地内
調査面積　1,087㎡
調査期間　5月8日～7月16日
報　告　倉田直純
参加人員　約100名

(イ)　第38次発掘調査現地説明会

日時　昭和56年8月1日　14時
場所　明和町斎宮字塚山地内
調査面積　792㎡
調査期間　7月6日～8月24日
報　告　大西素行
参加人員　約230名

(ウ)　第37－4次発掘調査南半部現地説明会

主催　明和町斎宮跡保存対策室
日時　昭和56年9月6日　10時30分
場所　明和町斎宮字西前沖地内
調査面積　2,713㎡
調査期間　7月17日～9月23日
報　告　倉田直純
参加人員　約250名

(エ)　第39次発掘調査現地説明会

日時　昭和56年11月3日　13時30分
場所　明和町竹川字古里地内
調査面積　1,533㎡
調査期間　9月7日～11月24日
報　告　吉水康夫
参加人員　約250名

(オ)　第37－4次発掘調査北半部現地説明会

主催　明和町斎宮跡保存対策室
日時　昭和56年12月6日　10時30分
場所　明和町斎宮字西前沖地内
調査面積　1,989㎡
調査期間　9月24日～12月25日
報　告　大西素行
参加人員　約130名

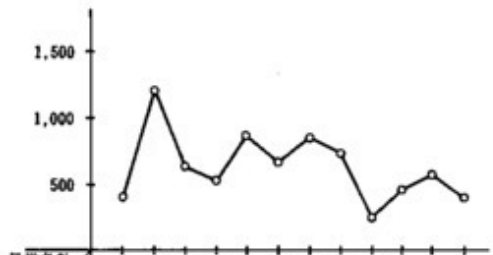
(カ)　第40次発掘調査現地説明会

日時　昭和56年1月17日　10時30分
場所　明和町斎宮字東加座地内
調査面積　941㎡
調査期間　12月7日～2月20日
報　告　大西素行
参加人員　約150名

イ　調査報告会

(ア)　5月8日　明和町公民館講座総会
(イ)　11月15日　四日市郷土史研究会
(ウ)　11月27日　大規模遺跡調査五県会議

ウ　資料展示室見学者数



エ　その他

斎宮跡講演会

日時　昭和56年11月3日　午後3時
場所　明和町中央公民館
演題　「斎宮出土、水司鴨□をめぐって」
講師　皇学館大学助教授　渡辺　寛

II 予　算

斎宮跡保存対策費　72,646千円

（単位千円）

区分 / 事業名	歳出	財源内訳		備考
		県費	国費	
発掘調査費	32,333	16,333	16,000	発掘面積約 6,000㎡
史跡公有化補助金	36,000	36,000	—	公有化面積約 1.7ha
管理施設設置補助	100	100	—	案内板等の設置
保存啓発事業	500	500	—	講演ならびに見学会
維持管理	4,313	4,313	—	資料展示室整備文献調査等
計	73,246	57,246	16,000	

III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

（昭和43年4月1日
教育委員会規則　第6号）

最終改正　昭和54年3月31日
教育委員会規則第6号

第三章　出先機関の組織

（教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等）

第12条　事務局の事務（県立学校関係事務を除く。）を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3．斎宮跡調査事務所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名称	位置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

（分掌事務）

第14条　3．斎宮跡調査事務所においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。

二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則　（昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄）

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

IV 職　員

職	氏名	備考
所長	佐々木宣明	文化課主幹兼務
主査	山沢義貴	
事務職員	大西素行	
〃	倉田直純	
技術職員	吉水康夫	
事務補助員	岩中美絵子	
〃	田丸恵美子	
〃	森本敦子	

V その他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

1　設　置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員（以下「委員」という。）を置く。

2　所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

(1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。

(2) 当史跡の遺物の調査、検討に関すること。

(3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。

(4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。

(5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

3　定数等

(1) 委員の定数は、10人以内とする。

(2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに関し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱

する。

4　任　期

任務が完了するまでの間とする。

5　会　議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

6　庶　務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

7　その他

この要綱に定めるもののほか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附則

この要項は、昭和54年10月19日から施行する。

○調査指導委員

氏　名	専　攻	現　職
福山　敏男	建築史	(国)文化財保護審議会専門委員
坪井　清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇　禎二	古代史	京都府立大学教授
楢崎　彰一	考古学・陶磁史	名古屋大学教授
服部　貞蔵	考古学	(財)文化財保護審議会委員
久徳　高文	国文学	椙山女学園大学教授
渡辺　寛	古代史	皇学館大学助教授

○委員会の開催

1　第1回調査指導委員会

日時　昭和56年8月4日

場所　三重県斎宮跡調査事務所

指導内容

昭和56年度事務事業の概要について

昭和55年度調査の結果について

昭和56年度の発掘調査について

史跡斎宮跡の将来構想について

出席者　福山、坪井、門脇、楢崎、服部、久徳、渡辺の各委員

2　第2回調査指導委員会

日時　昭和57年2月16日

場所　洞津会館（津市）

指導内容

昭和56年度事務事業の概要

昭和57年度の事業計画（案）について

保存管理計画の昭和57年度見直しについて

出席者　福山、坪井、門脇、楢崎、服部、久徳、渡辺の各委員

昭和56年度所内日誌

自　昭和56年4月1日
至　昭和57年3月31日

月　日	内　容
4月22日	奈文研埋文センター遺跡保存整備課程研修参加（吉水技師）4月22日～5月2日
27日	中勢南部県民局地方連絡会議で調査報告（所長）
5月7日	明和町役場庁舎玄関展示コーナー展示替えのため遺物貸出し
8日	第36次発掘調査開始（中垣内地区）
8日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館講座開講式で講演……山沢主査）
8日	古里地区（準公有化地区）の保存問題に関する竹川地区住民の集会……竹川公民館
10日	斎宮跡保存啓発事業（明和町婦人会総会で講演……山沢主査）
13日	第37－1次発掘調査開始（宅地造成）
13日	斎宮跡保存啓発事業（明和町教職員研修会で講演……吉水技師）
13日	斎宮跡保存啓発事業（明和町ＰＴＡ役員会で講演……大西主事）
16日	地権者を守る会……中央公民館
21日	斎宮跡保存啓発事業（明和町青年団役員集会で講演……倉田主事）
6月2日	第37－2次発掘調査開始（個人住宅）
5日	文化庁記念物課長の斎宮跡現地視察
9日	斎宮跡保存啓発事業（掛川市加茂荘葛蒲園・登呂遺跡見学……明和町各界代表）
10日	第37－2次発掘調査完了
14日	第36次発掘調査　現地説明会（倉田主事説明）
15日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連明役員会……調査事務所・中央公民館
16日	資料展示室見学者総数20,000人となる
22日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……県議会
24日	第37－3次発掘調査開始（個人住宅）
25日	第37－1次発掘調査完了
30日	知事へ「斎宮跡保存について」陳情……斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟会長ほか役員
7月3日	県議会文教常任委員の斎宮跡現地視察
6日	野花しょうぶ移植……明和町斎宮跡保存対策室
6日	第37－3次発掘調査完了
6日	第38次発掘調査開始（塚山地区）
16日	第36次発掘調査完了
17日	第37－4次発掘調査開始（宅地造成）
18日	斎宮跡保存啓発事業（地域住民の集い……北野公民館）
20日	第37－5次発掘調査開始（個人住宅）
20日	斎宮跡保存啓発事業（地域住民の集い……坂本公民館）
25日	第37－5次発掘調査完了
29日	斎宮跡保存啓発事業（地域住民の集い……竹川公民館）

月　日	内　　容
7月30日	斎宮跡保存啓発事業（地域住民の集い……中町公民館）
31日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟視察……美濃国分寺ほか
8月1日	第38次発掘調査　現地説明会（大西主事説明）
4日	斎宮跡調査指導委員会……調査事務所
6日	「県政バス教室」（上野地方振興事務所管内から見学）
16日	斎王の森草刈り（奉仕）……県職員明和会
19日	第37－6次発掘調査開始（農業用倉庫）
23日	斎宮跡保存啓発事業（地域住民の集い　斎王地区……中央公民館）
24日	第38次発掘調査完了
26日	当県各県民局長の斎宮跡現地視察
28日	県教育委員・教育長の斎宮跡現地視察
28日	土器水洗中「水司鴨□」土器発見
29日	第37－6次発掘調査完了
29日	斎宮跡保存問題協議（文化庁・県・町）……文化庁記念物課
9月5日	百五銀行斎宮支店新築開店記念店内遺物展示のため貸出し
6日	第37－4次発掘調査南半部　現地説明会（倉田主事説明）
7日	第39次発掘調査開始（古里地区）
11日	第37－7次発掘調査開始（斎王公民館）
16日	斎宮跡基本問題連絡会議（文化課・調査事務所）……県水産会館
17日	明和町議会第37－4次発掘現場視察
25日	愛知県陶磁資料館特別展へ灰釉陶器出品
10月2日	第37－7次発掘調査完了
8日	元興寺特別展へ緑釉陶器出品
31日	町民文化展へ斎宮跡出土遺物を展示
11月3日	第39次発掘調査　現地説明会（吉水技師説明）
3日	斎宮跡講演会「斎宮出土　水司鴨□をめぐって」皇学館大学助教授　渡辺寛氏……中央公民館
11日	第37－8次発掘調査開始（農業用倉庫）
15日	「斎宮跡発掘調査の成果と課題」吉水技師報告　四日市郷土史研究会
16日	第37－8次発掘調査完了
24日	第39次発掘調査完了
27日	大規模遺跡調査五県会議……朝倉氏遺跡調査研究所
28日	第37－9次発掘調査開始（農業用倉庫）
12月1日	大規模遺跡環境整備担当者会議……三次市
6日	第37－4次発掘調査北半部　現地説明会（大西主事説明）

月　日	内　　容
12月7日	第40次発掘調査開始（東加座地区）
7日	第41次発掘調査開始（トレンチ調査）
9日	第37－9次発掘調査完了
14日	第37－10次発掘調査開始（個人住宅）
15日	第37－10次発掘調査完了
19日	斎宮跡地権者を守る会役員会……中央公民館
22日	国史跡「斎宮跡」の保存、保護に関する請願(明和町長・明和町議会議長)を採択……県議会
22日	斎宮跡保存の請願(三重の文化財と自然を守る会会長)を採択……県議会
25日	第37－4次発掘調査完了
25日	文化庁等へ「斎宮跡の保護・保存に関する意見書」を提出……県議会
1月11日	地権者を守る会・牛葉地区対策委員会・明和町・合同役員会議……明和町役場
17日	第40次発掘調査　現地説明会（大西主事説明）
19日	文化庁文化財保護部長の斎宮跡現地視察
19日	斎宮小学校校舎玄関展示コーナー展示替えのため遺物貸し出し
20日	第41次発掘調査完了
21日	第37－11次発掘調査開始（近鉄駅便所改築）
21日	文化庁へ「斎宮跡保存について」陳情……明和町長・明和町議会
26日	第37－11次発掘調査完了
26日	第37－12次発掘調査開始（個人住宅）
2月3日	第37－13次発掘調査開始（個人住宅）
6日	第37－12次発掘調査完了
15日	ＮＨＫテレビ〝今日のリポート〟放映
16日	斎宮跡調査指導委員会……津市渕津会館
17日	文化庁主任調査官の斎宮跡現地視察
20日	第40次発掘調査完了
22日	県教育次長へ「斎宮跡保存について」陳情……明和町・明和町議会
23日	名古屋市立博物館特別展へ土馬出品
23日	資料展示室見学者総数25,000人となる
3月1日	第37－13次発掘調査完了
5日	斎宮跡保存啓発事業(明和町商工会共催斎宮跡講演会と協議……明和町商工会館)
8日	発掘調査作業員親睦旅行……長島温泉
13日	斎宮跡保存啓発事業（青壮年団共催斎宮跡講演会と協議……北野公民館）
18日	修正小学校新設用地内発シＢ遺跡試掘調査指導

掘立柱建物一覧表

SB	規　模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁　行	柱間寸法(m) 梁　行	時　期	備　　考
第36次調査（6ABI－F）								
2100	(3)×3	N19°E	—	4.2	1.3	1.4	奈　良	
2108	(4)×2	N30°E	—	4.1	2.4	2.05	〃	
2109	3×2	N30°E	5.6	3.6	1.87	1.8	〃	
2110	5×3	N30°E	8.3	4.8	1.66	1.8 1.2	〃	
2123	3×1	N16°E	6.2	2.35	2.07	2.35	〃	
2127	4×2	N26°E	6.9	4.4	1.73	2.2	〃	
2129	−×2	E19°S	—	3.6	—	1.8	〃	
2136	(4)×2	E30°S	—	3.6	2.27	1.8	〃	
2137	(4)×2	E19°S	—	3.8	1.85	1.9	〃	
第38次調査（6ACD－S）								
2185	3×2	E14°S	5.1	3.8	1.7	1.9	奈　良	
2191	(2)×2	E13°S	—	4.0	1.9	2.0	〃	
2218	(4)×−	N10°E	—	—	2.3	—	〃	
2147	(3)×−	N10°E	—	—	2.3	—	平安前	SK2152より新しい
2171	4×2	N18°E	6.8	4.2	1.7	2.1	〃	SB2172より新しい
2172	3×2	N18°E	5.1	4.2	1.7	2.1	〃	
2173	3×(2)	N20°E	6.3	—	2.1	2.1	〃	
2174	3×(2)	N18°E	5.8	—	1.9	2.0	〃	SB2173より新しい
2208	(4)×4	N13°E	—	3.8	2.0	1.9	〃	
2148	(3)×(2)	N8°E	—	—	2.3	2.0	平安中	SB2151より新しい
2150	3×(2)	N15°E	6.0	—	2.0	2.4	〃	SB2151より新しい
2151	(3)×2	E10°S	—	4.4	2.4	2.2	〃	
2166	3×2	E15°S	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	
2170	3×2	N9°E	6.6	4.2	2.2	2.1	〃	
2175	3×(2)	N15°E	6.3	—	2.1	2.1	〃	
2180	4×2	N20°E	6.6	4.4	1.65	2.2	〃	
2190	7×2	E13°S	14.7	3.8	2.1	1.9	〃	SB2170、SB2180より新しい東面廂、廂柱間2.0m
2200	3×3	E10°S	8.4	6.7	2.8	2.0	〃	SB2190、SB2202より新しい南面廂、廂柱間2.7m
2202	4×2	E13°S	8.3	3.8	2.09	1.9	〃	
2220	3×2	N14°E	5.8	4.1	1.93	2.05	〃	SB2190より新しい
2149	3×(2)	E16°S	7.2	—	2.4	1.9	平安末	
2222	3×(2)	N14°E	5.7	—	1.9	1.9	時期不明	
第39次調査（6ABD－R・S・T）								
2239	4×3	E35°N	7.4	5.1	1.85	1.7	奈　良	
2240	(6)×2	E43°N	—	4.6	2.1	3.0 1.6	〃	
2243	(4)×2	N43°E	—	3.9	1.4	2.1 1.8	〃	

SB	規　模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁　行	柱間寸法(m) 梁　行	時　期	備　　考
2245	－×2	E31°S	－	3.2	－	1.6	奈　良	
2241	2×2	N34°E	4.2	3.8	2.1	1.9	時期不明	
2242	5×3	E12°S	9.5	6.0	1.9	2.0	〃	
2244	3×2	N17°E	6.6	4.6	2.2	2.3	〃	
第40次調査（6AGH－L・M）								
1985	3×2	N2°W	7.2	3.8	2.4	1.9	平安前	
1990	(5)×2	E2°N	－	5.2	2.1	2.6	〃	規模改正
1994	(3)×2	E2°N	－	4.8	2.5	2.4	〃	規模、柱間改正
2278	2×2	N7°E	3.6	3.2	1.8	1.6	〃	
2279	2×2	N7°E	3.4	2.9	1.7	1.45	〃	
2280	3×2	E2°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	
2281	3×2	E3°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	SB2280より新しい 柱掘り方に炭化物多い
2282	3×2	E3°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	SB2281より新しい
2300	3×2	E3°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	
2301	3×2	E2°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	SB2300より新しい
1978	(4)×2	E1°N	－	3.5	2.2	1.75	平安中	規模、柱間改正 SB1980より新しい
1980	(2)×2	E1°N	－	3.4	1.7	1.7	〃	柱間改正
1991	(4)×2	E2°N	－	4.9	2.4	2.45	〃	規模改正
1992	(4)×2	E1°N	－	4.9	2.4	2.45	〃	規模改正 SB1991より新しい
1993	5×2	E1°S	10.5	4.4	2.1	2.2	〃	規模、柱間、棟方向改正 SB1992より新しい
1998	(4)×2	E3°N	－	3.8	2.0	1.9	〃	規模、柱間改正
2290	3×2	E3°N	6.3	3.6	2.1	1.8	平安後	
2308	3×2	N3°E	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	
2306	3×2	E0°	6.0	4.2	2.0	2.1	平安末	
2309	3×2	E7°S	5.9	4.8	1.97	2.4	〃	
2313	4×2	E7°S	7.4	4.8	1.85	2.4	〃	SB2309より新しい
第41次調査（6ACD－J）								
2335	(3)×2	E33°N	－	3.2	1.8	1.6	時期不明	
第41次調査（6AFG－F）								
2346	(2)×－	E2°N	－	4.4	－	－	平安中	
第41次調査（6AFG－N）								
2350	4×－	N3°W	8.2	－	2.05	－	平安前	SK2352より古い
2355	(2)×2	E0°	－	3.2	1.8	1.6	〃	
2361	3×(2)	N3°W	6.3	－	2.1	2.0	〃	
第41次調査（6AGJ－J）								
2365	(3)×－	E3°N	－	－	2.4	－	平安前	
2370	3×－	N3°W	6.3	－	2.1	－	〃	
2380	3×(2)	N3°W	5.4	－	1.8	1.8	〃	
2381	(4)×2	E3°N	－	4.8	2.0	2.4	〃	

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
2375	−×2	E3°N	−	4.6	−	2.3	時期不明	柱穴に焼土SK2372、SK2376より古い
第41次調査（6AGN−D）								
2390	(3)×2	E2°N	−	4.0	1.8	2.0	平安前	SB2391より新しい
2391	(3)×2	E2°N	−	3.8	1.9	1.9	〃	
2392	(3)×2	E2°N	−	3.2	1.5	1.6	〃	
2407	(3)×−	E2°N	−	−	2.0	−	〃	
2388	−×2	E8°S	−	3.8	−	1.9	時期不明	
2389	(3)×2	E2°N	−	3.8	1.8	1.9	〃	SB2393より古い
2405	−×2	E4°N	−	4.0	−	2.0	〃	SK2402より古い
第37−4次調査（6AFC−M）								
2447	4×2	E4°S	6.3	4.1	1.58	2.05	奈良末~平安初	
2431	(2)×2	E9°N	−	4.5	2.25	2.25	平安中	
2445	5×2	E9°S	11.7	4.4	2.45	2.2	〃	東の桁行1間分のみ1.8m
2449	3×2	E8°S	6.7	4.2	2.23	2.1	〃	
2454	3×2	N2°W	6.4	4.3	2.13	2.15	〃	
2471	−×2	N6°W	−	4.0	−	2.0	〃	
2479	4×2	E12°S	9.3	3.7	2.25	1.85	〃	東面廂、廂柱間2.6m
2486	3×2	N11°E	7.5	3.7	2.5	1.85	〃	
2487	4×2	N8°E	9.0	4.1	2.25	2.05	〃	SB2486より新しい
2488	(4)×2	N8°E	−	3.6	2.2	1.8	〃	
2443	4×3	E10°S	9.9	6.2	2.6	2.3	平安末	三面廂、廂柱間北面1.6m東面2.2m西面2.5m、南東隅に土坑
2446	3×2	E12°S	6.3	4.0	2.1	2.0	〃	
2448	2×2	E10°S	3.9	3.7	1.95	1.85	〃	
2453	3×3	E12°S	6.5	5.5	2.17	1.83	〃	南面廂、廂柱間1.7m
2457	4×1	E5°S	9.2	2.2	2.3	2.2	〃	
2468	4×4	E5°S	9.4	8.9	2.4	2.2	〃	三面廂、廂柱間北面2.2m東面2.4m、西面2.3m、南東隅に土坑
2469	(3)×2	E11°S	−	4.3	2.2	2.15	〃	
2483	4×3	E17°S	8.7	6.3	2.3	2.1	〃	三面廂、廂柱間2.1m、南東隅に土坑
2432	3×2	N1°W	6.8	4.5	2.27	2.25	時期不明	
第37−3次調査（6AFC−F）								
2495	−×2	N1°E	−	3.8	−	1.9	平安前	
2490	(2)×−	N1°E	−	−	2.4	−	平安後	
第37−5次調査（6AFC−G）								
2500	−×2	N4°W	−	4.2	−	2.1	平安後	
第37−9次調査（6AGK−E）								
2515	(3)×(2)	E6°N	−	−	2.0	2.4	平安中	
第37−13次調査（6AGK−F）								
2530	(4)×2	E5°N	−	4.2	1.9	2.1	平安前	
2531	(4)×2	E4°N	−	3.8	1.9	1.9	〃	SB2530より新しい

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		
2532	(4)×2	E4°N	−	3.4	1.9	1.7	平安前	
2540	4×−	N6°W	9.4	−	2.35	−	〃	
2550	3×2	E2°N	5.4	3.4	1.8	1.7	平安中	
2555	3×2	E1°S	5.7	3.6	1.9	1.8	〃	
2560	(3)×2	N2°E	−	3.7	2.0	1.85	〃	SB2550より新しい
2565	(3)×−	E4°N	−	−	1.7	−	〃	

竪穴住居一覧表

SB	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	カマド	時期	備考
第36次調査（6ABI−F）							
2128	5.2×−	−	16			弥生中	中央に炉址平面プラン楕円形
2141	3.7×−	−	14			〃	平面プラン楕円形
2097	−×2.9	N35°E	14			飛鳥	
2106	5.0×4.9	E38°N	20	○	北壁	〃	周溝あり
2111	5.0×−	N41°E	12	○		〃	
2115	5.0×3.9	N35°E	25		北壁	〃	SB2116より新しい
2116	5.4×3.5	E21°S	20		〃	〃	
2117	−×2.7	N25°E	19		北東隅	〃	
2118	−×3.2	E27°S	15			〃	
2125	5.3×4.9	N38°W	24	○	北壁	〃	周溝あり
2132	−×2.7	E42°N	20			〃	
2133	3.7×−	E22°S	13			〃	
第38次調査（6ACD−S）							
2145	−×−	N 8°E	20		東壁	奈良	SB2146より新しい
2146	(4)×−	N20°W	22			〃	
2154	3.5×3.1	N24°E	23		北壁	〃	貯蔵穴北東隅
2155	4.3×3.0	N16°E	21		東壁	〃	
2156	3.5×3.1	N30°E	21		北壁	〃	SB2154、SB2155より新しい 貯蔵穴北東隅
2164	3.6×3.0	N20°E	26		〃	〃	SB2156より新しい 貯蔵穴北東隅
2165	4.2×2.8	N26°E	19		東壁	〃	
2167	3.7×2.8	N23°E	20		北壁	〃	
2186	2.3×2.2	N11°E	31		−	〃	SK2183より古い
2196	3.1×−	N 7°E	17		東壁？	〃	
2197	3.1×2.8	N17°E	20		北東隅	〃	SB2196より新しい
2198	2.8×2.7	N18°E	30		北壁	〃	貯蔵穴北東隅
2205	2.7×2.3	N 5°W	10		東南隅	〃	

SB	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	カマド	時期	備考
第39次調査（6ABD－R・S・T）							
2235	4.7×4.7	N31°E	21	○	北東壁	古墳後	
2238	5.5×4.3	E32°S	30			奈良	
2249	－×3.3	N45°E	7			〃	
2252	3.1×－	N43°E	15			〃	SB2253より新しい
2253	－×－	N34°E	8			〃	
第37－4次調査（6AFC－M）							
2441	3.6×3.6	N0°	20		東壁	奈良	
第37－13次調査（6AGK－F）							
2570	3.0×2.1	N3°E	35		東壁	奈良	

三重県遺跡標示一覧表

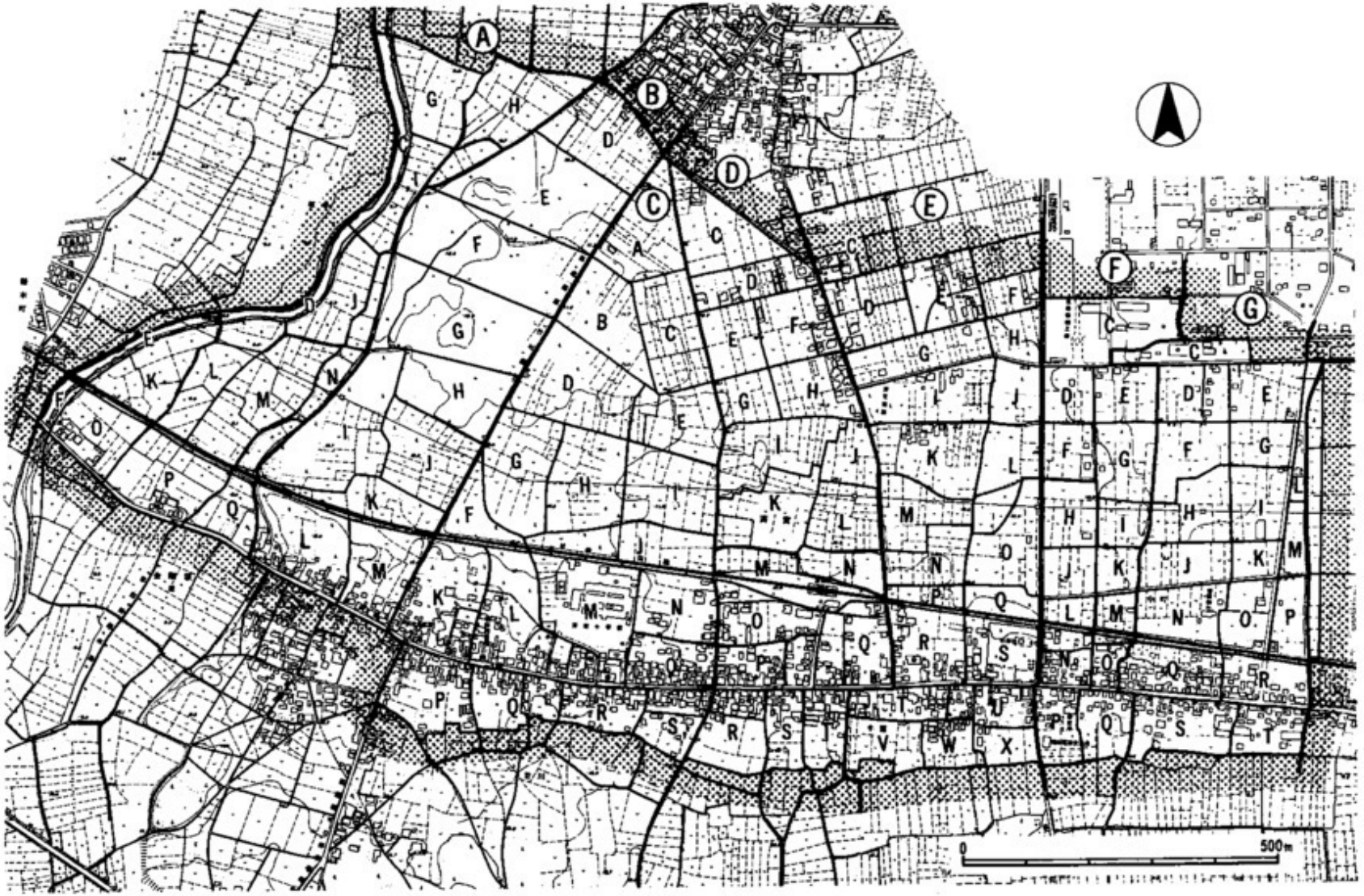
時代		種別と地区							
0		A 国郡衙		K 北勢		T 伊勢	城
1	先縄文	B 伊勢	寺	L 中勢	墳	U 志摩熊野	砦
2	縄文	C 志摩熊野		M 南勢		V 伊賀	館
3	弥生	D 伊賀	院	N 志摩		W 記念物	
4	古墳	E 北勢	集	O 熊野	墓	X 交通	
5	飛鳥	F 中勢		P 伊賀		Y	
6	奈良	G 南勢	落	Q 伊勢	製	Z その他	
7	平安	H 志摩		R 志摩熊野	造		
8	鎌倉	I 熊野	址	S 伊賀	所		
9	室町以降	J 伊賀					

斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区
1	45	試掘
2	46	古里A地区
3	〃	〃 B地区
4	47	〃 C地区
5	48	〃 D地区
6－1	〃	Aトレンチ
6－2	〃	Bトレンチ
6－3	〃	Cトレンチ
6－4	〃	Dトレンチ
6－5	〃	Eトレンチ
7	49	古里E地区
8－1	〃	Fトレンチ
8－2	〃	Gトレンチ
8－3	〃	Hトレンチ
8－4	〃	Iトレンチ
8－5	〃	Jトレンチ
8－6	〃	Kトレンチ
8－7	〃	Lトレンチ
8－8	〃	Mトレンチ
8－9	〃	Nトレンチ
8－10	〃	Oトレンチ
8－11	〃	Pトレンチ
9－1	50	Qトレンチ
9－2	〃	Rトレンチ
9－3	〃	Sトレンチ
9－4	〃	Tトレンチ
9－5	〃	Uトレンチ
9－6	〃	Vトレンチ
9－7	〃	Wトレンチ
9－8	〃	Xトレンチ
9－9	〃	Yトレンチ
9－10	〃	Zトレンチ
10	〃	広域圏道路
11－1	〃	西加座2661－1（山中宅）
11－2	〃	〃 2681－1（山名宅）
11－3	〃	東前沖2483－2（前田宅）
11－4	〃	下 園2926－9（吉木宅）
12－1	51	2Aトレンチ
12－2	〃	2Bトレンチ
12－3	〃	2Cトレンチ
12－4	〃	2Dトレンチ
13－1	〃	東加座2436－7（浜口宅）
13－2	〃	〃 2436－4（中村宅）
13－3	〃	古 里3283 （村上宅）
13－4	51	楽 殿2916～2917（松井宅）
13－5	〃	御 館2974－1（川本宅）
13－6	〃	中垣内 375－1（南宅）
13－7	〃	東裏 328（小川宅）
13－8	〃	西加座2771－1（細井繁久宅）
13－9	〃	〃 2773（細井国太郎宅）
13－10	〃	東裏363－1、362－1（児島宅）
13－11	〃	西加座2681－1（浮田宅）
13－12	〃	〃2721－3、2724－2（森川宅）
13－13	〃	東前沖2506－2（宮下宅）
14－1	52	2Eトレンチ
14－2	〃	2Fトレンチ
14－3	〃	2Gトレンチ
14－4	〃	2Hトレンチ
14－5	〃	2Iトレンチ
15	〃	斎宮小学校
16－1	〃	竹川町道A
16－2	〃	〃 B
16－3	〃	〃 C
16－4	〃	〃 D
16－5	〃	〃 E
16－6	〃	〃 F
17－1	〃	竹神社社務所
17－2	〃	竹神社防火用水
17－3	〃	西加座2721－6（西沢宅）
17－4	〃	楽 殿2894－1（中川宅）
17－5	〃	〃 2895－1（西口宅）
17－6	〃	出在家3237－3（吉川宅）
17－7	〃	〃 3237－1（里中宅）
17－8	〃	楽 殿2894－1（西村宅）
17－9	〃	東海造機
18	53	6AEL－E・I（下園）
19	〃	6AEN－M・N・O（御館）
20	〃	6AEO－I・J（柳原）
21－1	〃	6AGN－B（鍛治山、中山宅）
21－2	〃	6AFI－D（西加座2711－2 2717－4 他山路宅）
21－3	〃	6AFD－D（西前沖2649－1大西宅）
21－4	〃	6AFH－F（西加座2678、2679－3森下宅）
21－5	〃	6AGD－K（東前沖、渡部宅）
21－6	〃	6ACA－T（古里3269－2、中西宅）
21－7	〃	6AFE－F（東前沖2631－1鈴木宅）
21－8	〃	6AEG－A（楽殿2909－3大西宅）
21－9	〃	6AED－R（篠林3218－3字田宅）
22－1	〃	6AGU

次	年度	調　査　地　区
22－2	53	6AGU
22－3	〃	6AGW
23	54	6AEL－B（下園）
24	〃	6AGF－D（西加座）
25－1	〃	6ADP－K(牛葉3029－1、土地三重ホーム)
25－2	〃	6ACA－Y(古里3270、脇田宅)
25－3	〃	6ADD－F(篠林3139－3、池田宅)
25－4	〃	6AER－H(牛葉3014、牛葉公民館)
25－5	〃	6AGN－H(鍛冶山2392　、丸山宅)
25－6	〃	6AFH－A(西加座2675－5、谷口宅)
25－7	〃	6AEK－V(下園2926－10、奥田宅)
25－8	〃	6AFC－D(西前沖2064－5、山本宅)
25－9	〃	6ACN－C(広頭3387－1、北出宅)
25－10	〃	6AEV－A(鈴池339－1、永島宅)
25－11	〃	6ACF－B(東裏364－1、沢宅)
25－12	〃	6AEE－Y(楽園2892－3、山本宅)
25－13	〃	6AFJ－E(西加座2766－1、山内宅)
26－1	〃	6AFR（中西）
26－2	〃	6AEX～6ACQ(鈴池、木葉山、南裏)
26－3	〃	6AEV・W・X（鈴池）
26－4	〃	6ACR（木葉山・南裏）
27	〃	6ACG－S・T（東裏）
28	〃	6AEO－D（柳原）
29	〃	6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ－M・X・W(中垣内)
31－1	〃	6ADO－M(内山3038－13、岩見宅)
31－2	〃	6ACP－I(南裏227－2、鈴木宅)
31－3	〃	6ABD－A(古里588－4、北藪宅)
31－4	〃	6ADQ－T(牛葉3018－2、百五銀行)
31－5	〃	6ACC－G(塚山3338－3、水谷宅)
31－6	55	6ABO－X(古里576－1、池田宅)
31－7	〃	6AGI－L(東加座2427－1、竹内牧舎)
31－8	〃	6ACN－G(広頭3388－1、5、8、9森宅)
31－9	〃	6AGD－L(北野2487－1、中川宅)
31－10	〃	6ADM－O(内山3043－3、斎宮駅)
31－11	〃	6ADT－I(木葉山304－2、澄野宅)
31－12	〃	6ADT－J(木葉山304－7、宇田宅)
32	〃	6ACE－D・E・F（塚山）
33	〃	6ADE－C・D他（篠林）
34	〃	6AFK－F・G・H（西加座）
35	〃	6APE他（西前沖）
36	56	6ABI－F（中垣内）
37－1	〃	6AFC－M(西前沖2604、日本経木)
37－2	〃	6ADQ－R(牛葉3021－2、野田宅)
37－3	〃	6AFC－F(西前沖2604－6、押田宅)
37－4	〃	6AFC－M(西前沖2604、日本経木)
37－5	〃	6AFC－G(西前沖2604－7、中村宅)
37－6	〃	6ABD－A(古里588－2、北藪宅)
37－7	〃	6AEC－M(荷干2861－2、斎王公民館)
37－8	〃	6ADR－P(木葉山128－8、13、14、富山宅)
37－9	〃	6AGK－E(東加座2355－1、竹内宅)
37－10	〃	6AED－O(楽園3217－1、渡辺宅)
37－11	〃	6ADN－O(内山3043－3、近畿日本鉄道)
37－12	〃	6AFH－J(西加座2681－1、3、4、渋谷宅)
37－13	〃	6AGK－F(東加座2385－3、2386－3、竹内宅)
38	〃	6ACD－S(塚山)
39	〃	6ABD－R・S・T（古里）
40	〃	6AGH－L・M（東加座）
41	〃	6AGJ－J他（斎宮地内）

第14図　第37－4次遺構実測図（1：200）



斎宮跡地区表示

図　　版

第40次調査　　全景（北から）

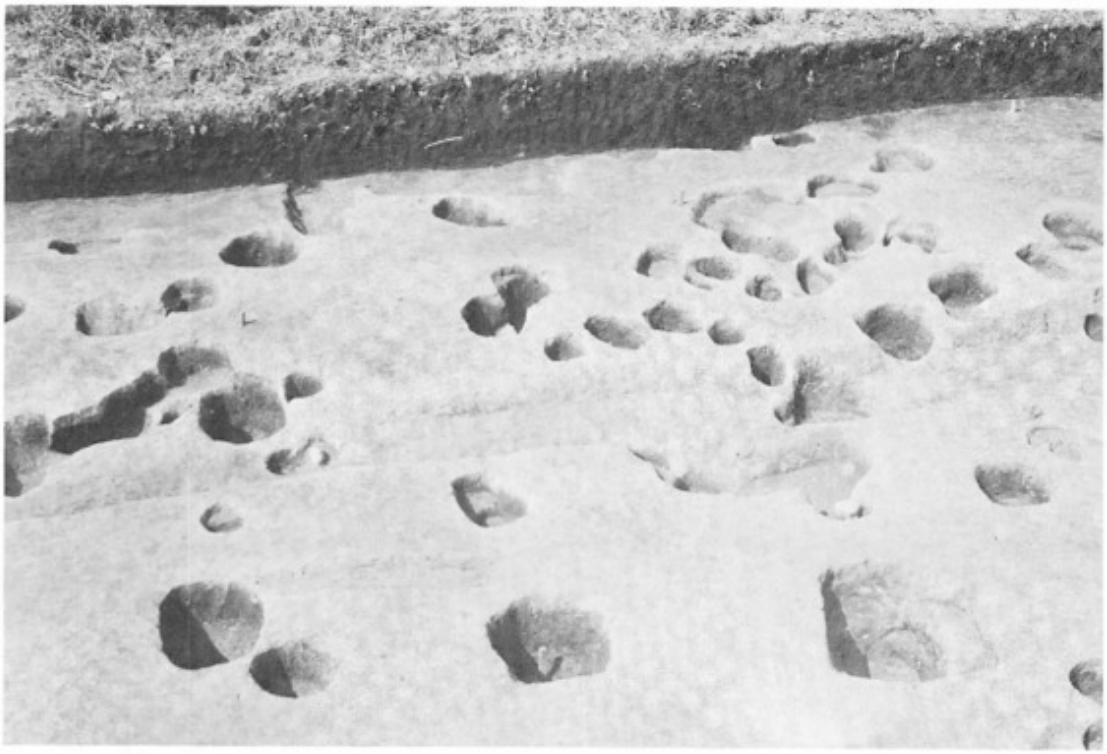
第37－4次調査　　北部全景（東から）

全　景　（南から）

SB2127　SB2128　（東から）

SB2125　（南から）

SB2115～SB2118　SB2141（東から）



SB2108　（南から）

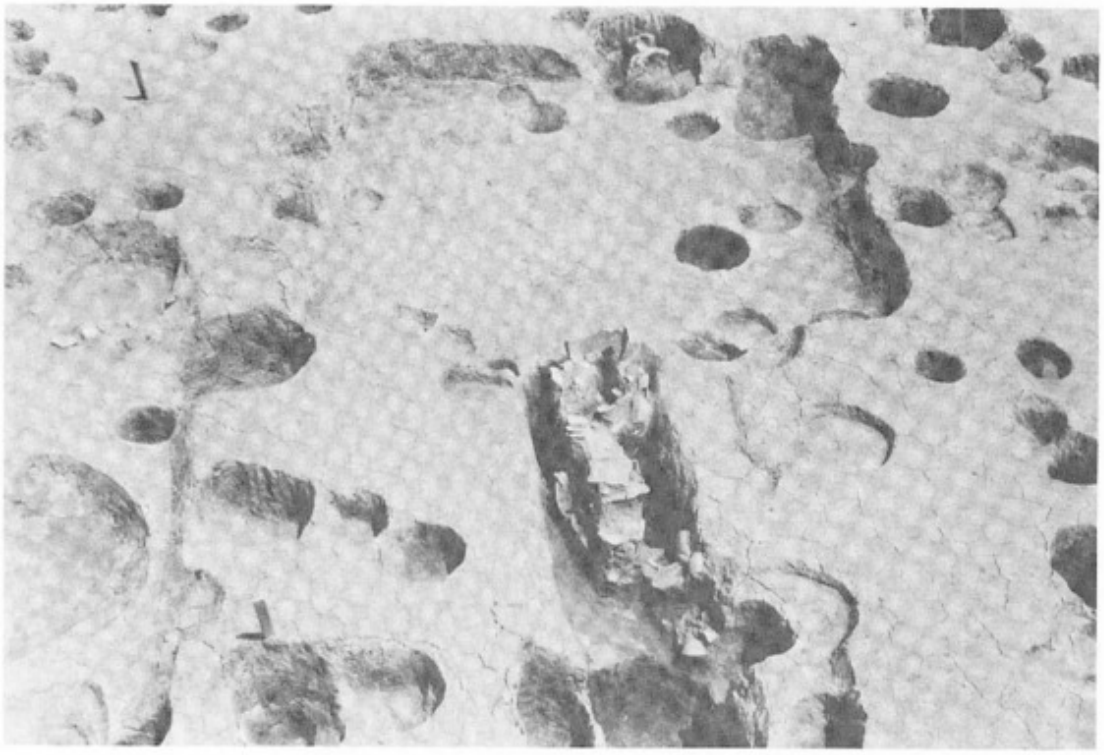
SB2110　（南から）

SB2109　（南から）

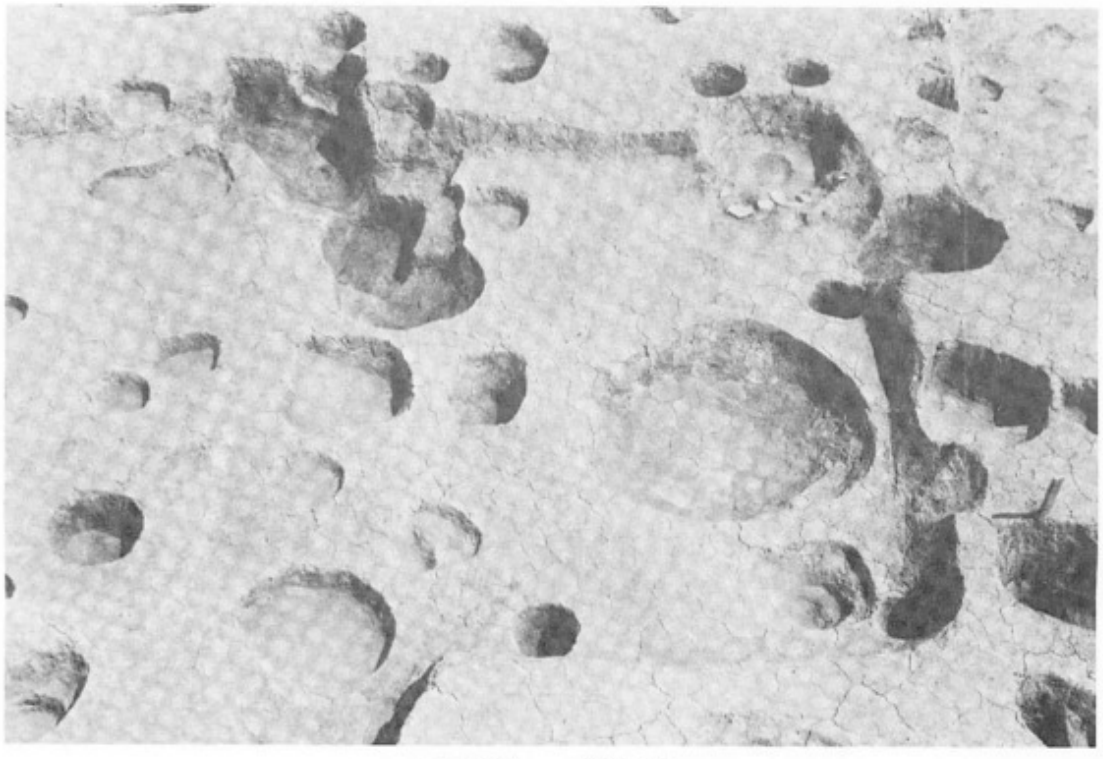
SB2136　SB2137　SD2138　（西から）

全　景　（西から）

ＳＸ2210　（西から）



SB2198　SK2199　（南から）



SB2197　（南から）

SB2170　（西から）

SB2200他　（南から）

全　景　（北東から）

西半部全景　（北東から）

ＳＸ2232　　（南から）

ＳＢ2235　　（南西から）

SB2241　SE2255　（南西から）

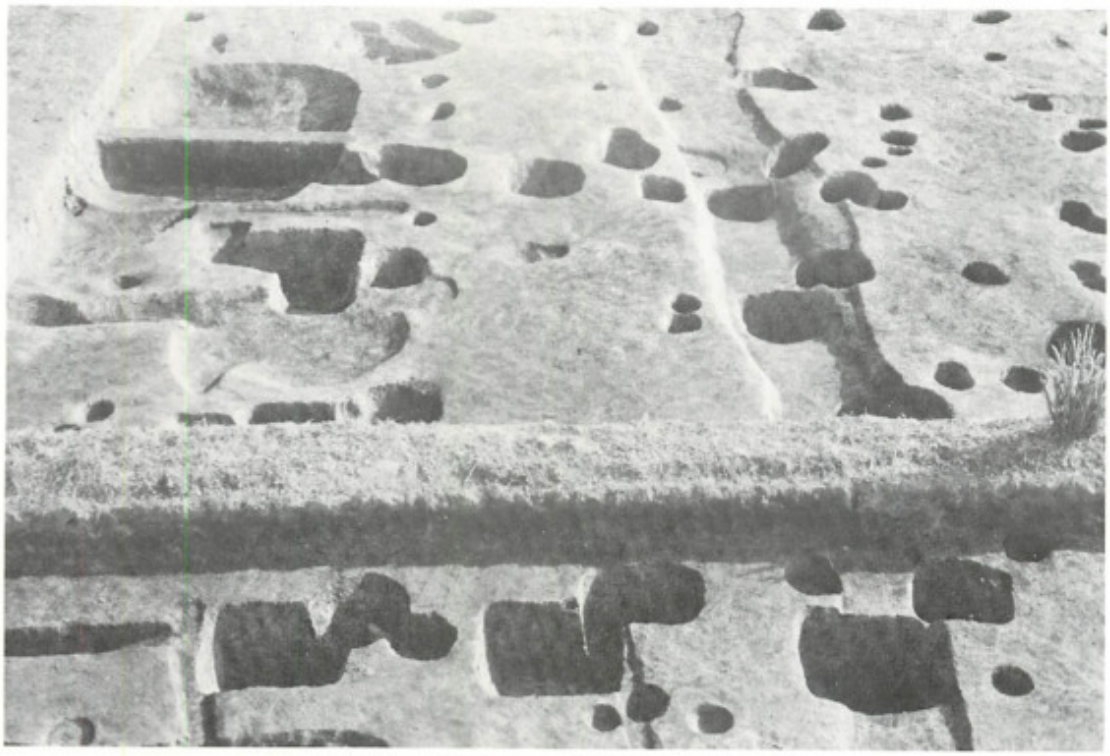
SB2239　（南西から）

SB2240 （北東から）

SB2243 （北東から）

全　景　（西から）

SD1935　SD1936　SD1943　（北から）



SB2280　SB2281　SB2282　（西から）

SB1991　SB1992　SB1993　（東から）

SB1990　SK2302　SK2303　（東から）

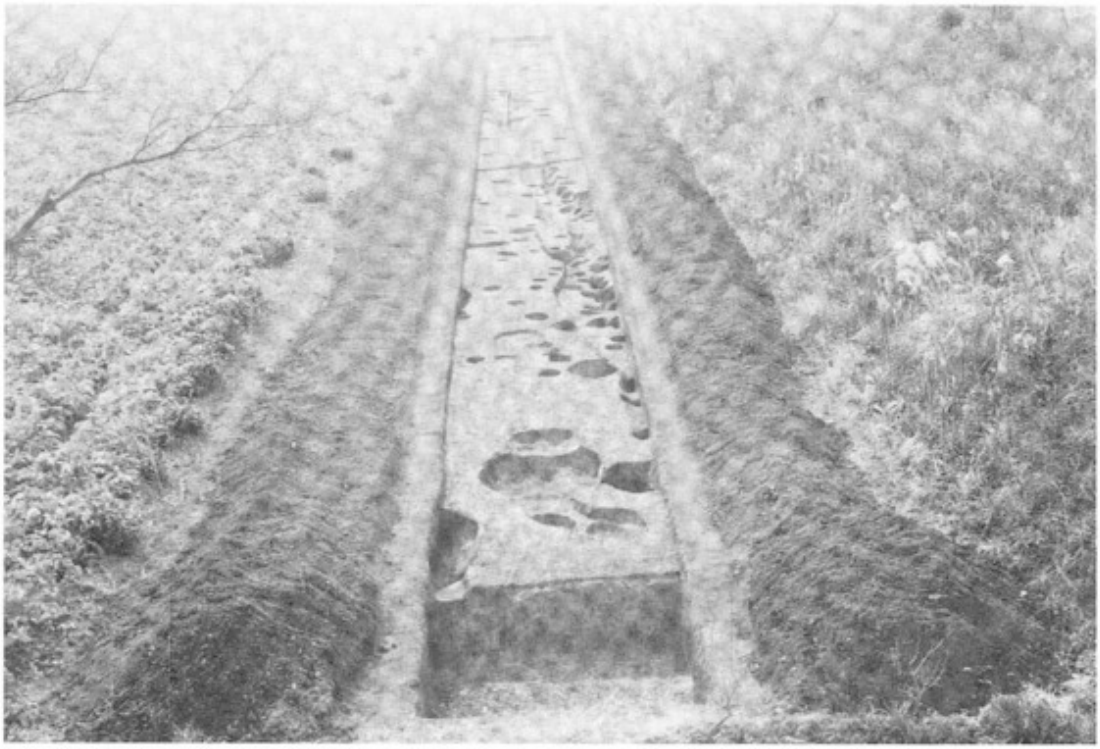
SB2290　SD1986　（東から）

SB2308　SD2307　（北から）

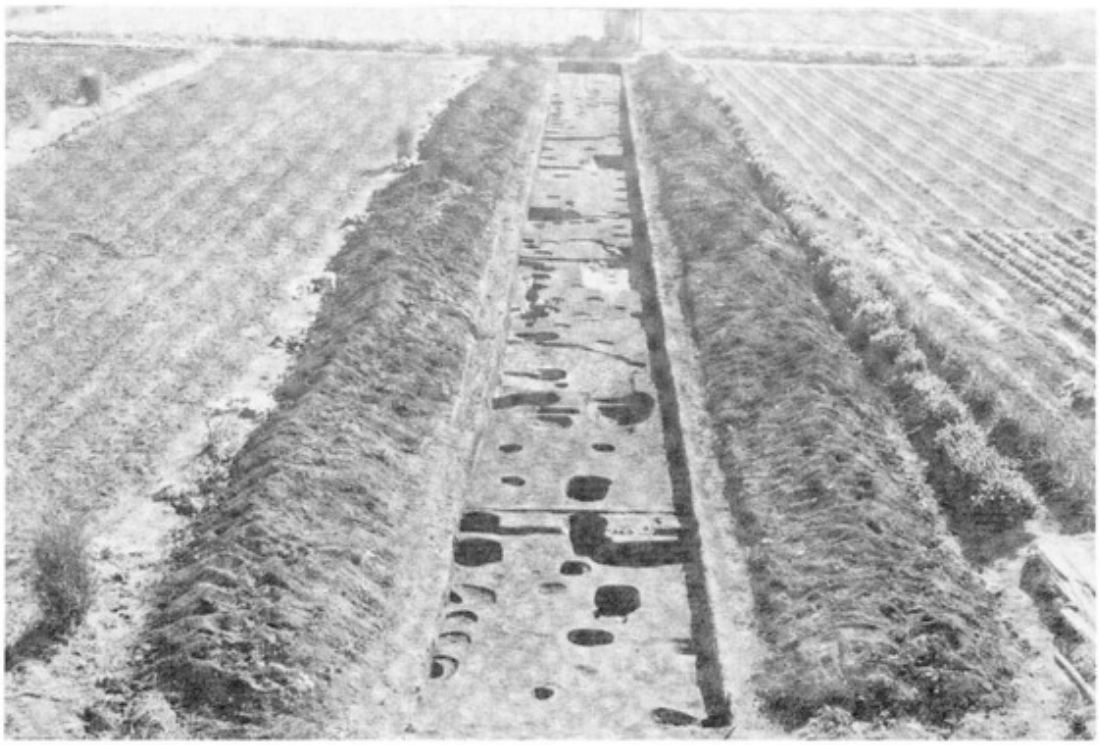
SB2309　SB2310　（東から）

6ACA　6ACC地区　　（北から）

6ACB地区　　（北から）



6ＡＦＧ－Ｆ地区　（北から）

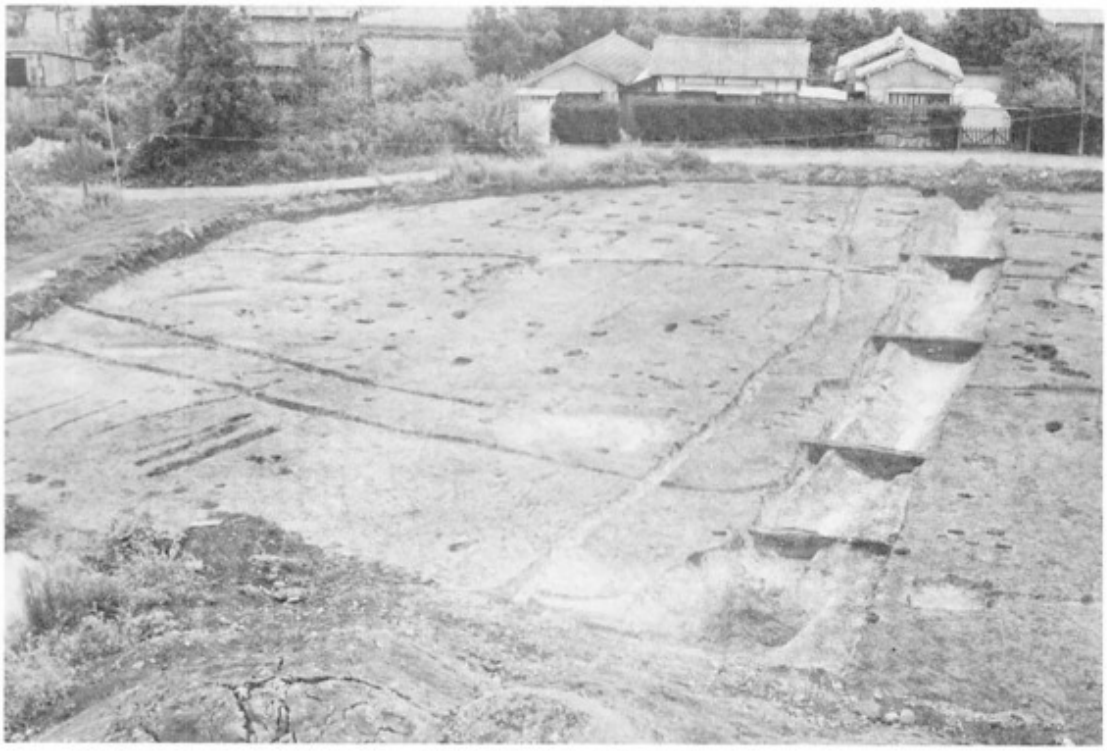


6ＡＦＧ－Ｎ地区　（北から）

6AGJ－J地区　（北から）

6AGN－D地区（南から）

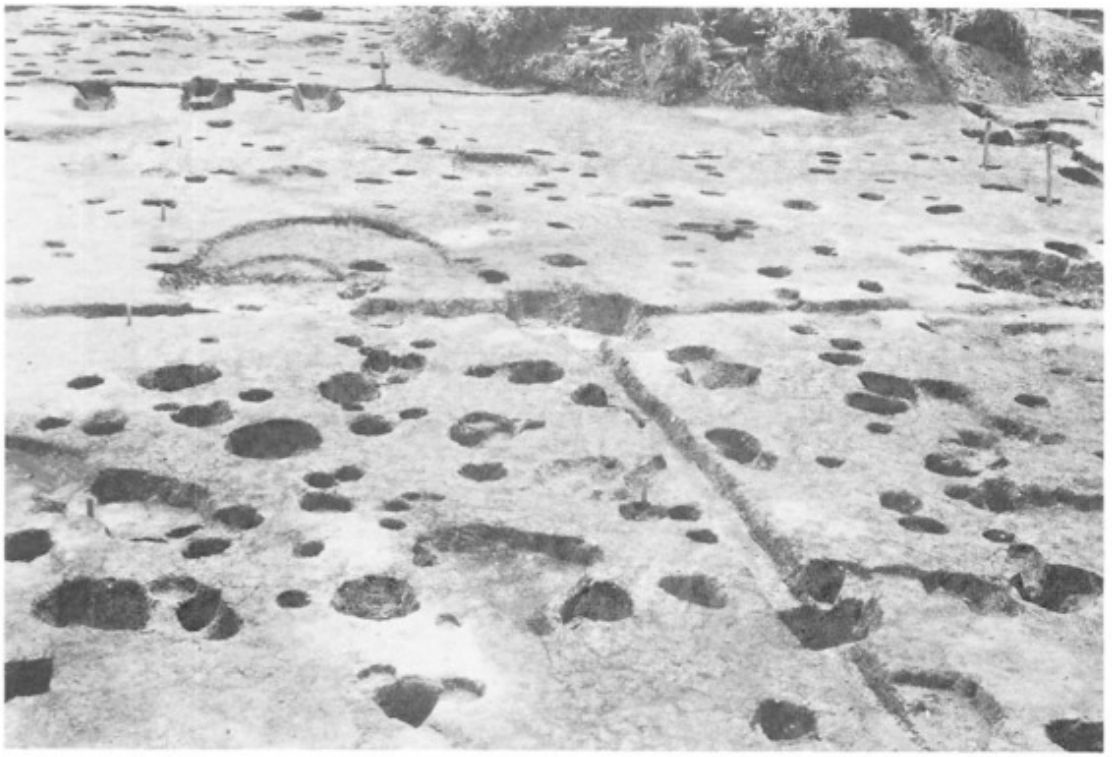
南半部全景　（東から）



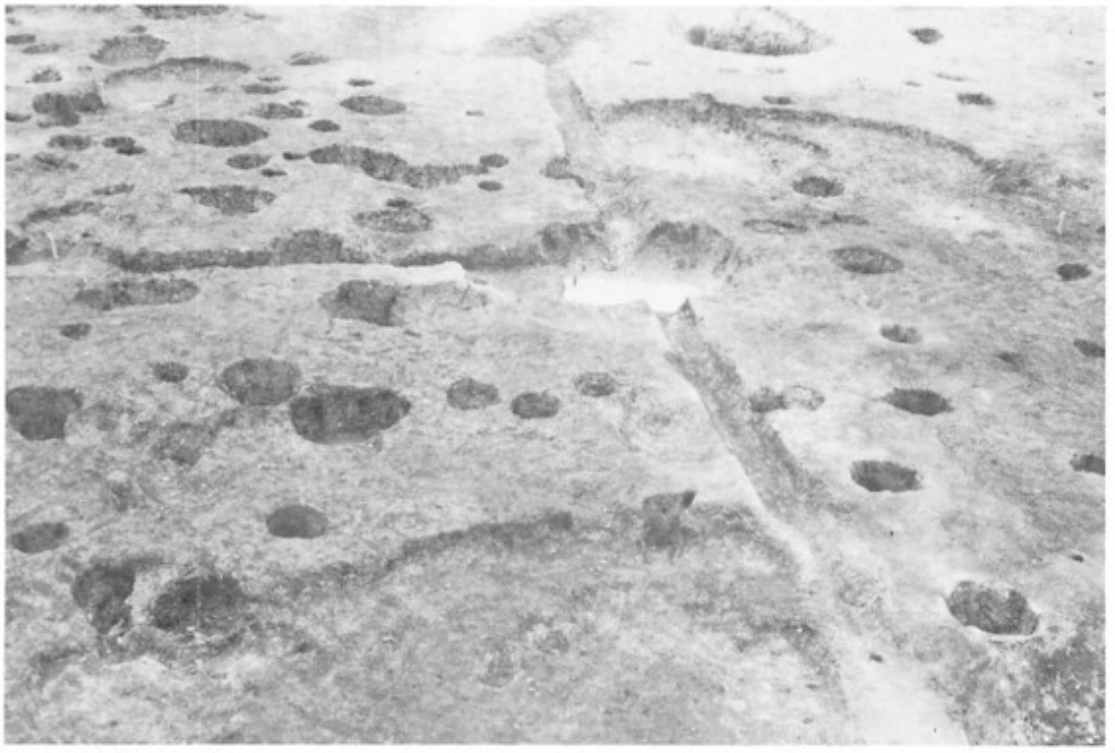
南東部全景　（北から）

南西部全景　（北から）

SB2486　SB2487　SB2488　（北から）



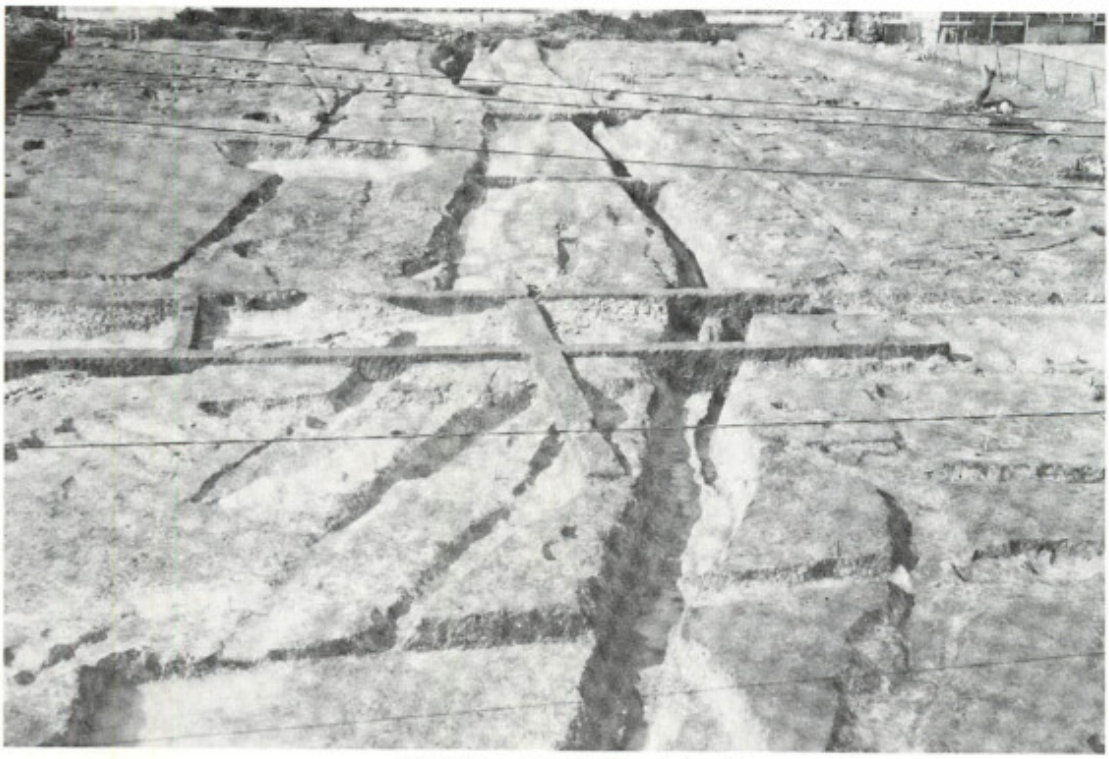
SB2446　SB2447　SB2448　（北から）



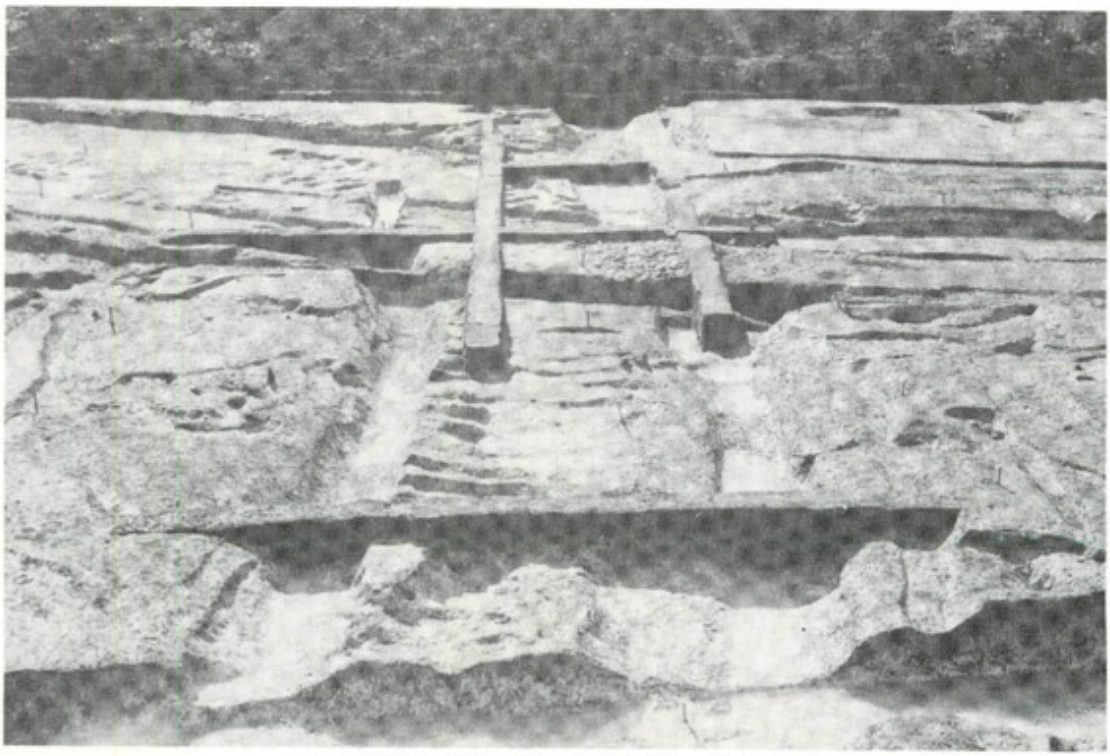
SB2449　SK2450　（西から）

北半部全景　（北から）

ＳＤ５　ＳＤ2415～ＳＤ2418　ＳＦ2419　（西から）



SF2419　SF2427　（東から）



SD2425　SD2426　SF2427　（北から）

第37－２次調査　（南から）

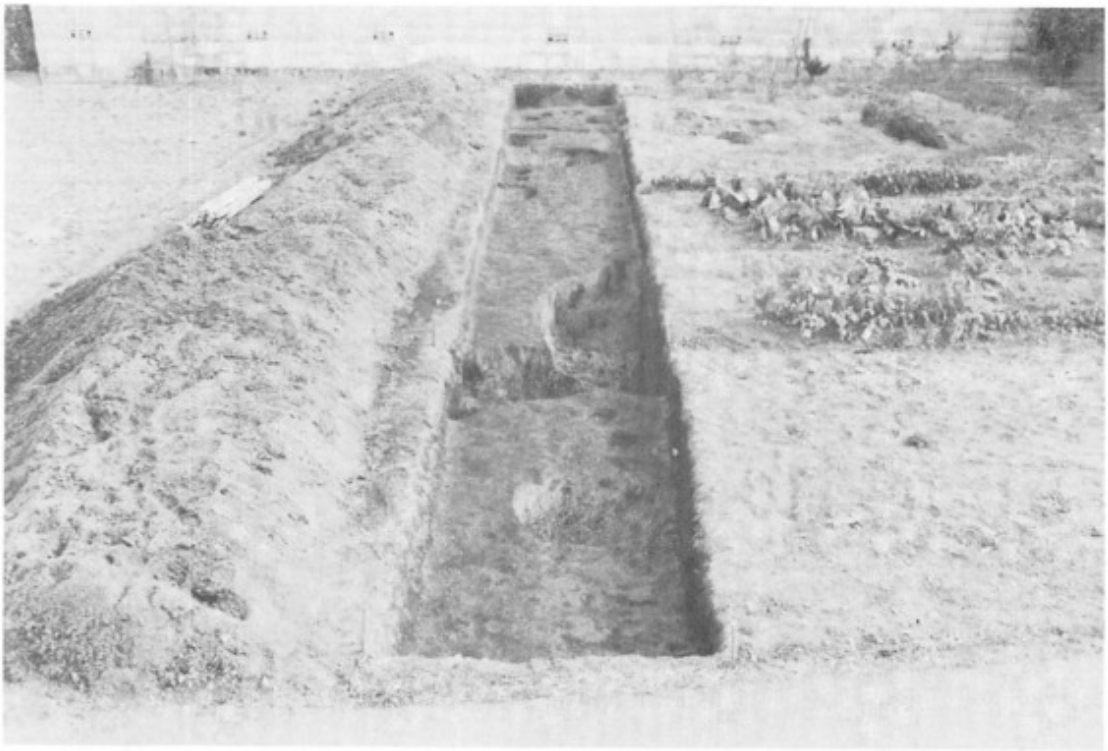
第37－３次調査　（東から）

第37－5次調査　（東から）

第37－6次調査　（南から）

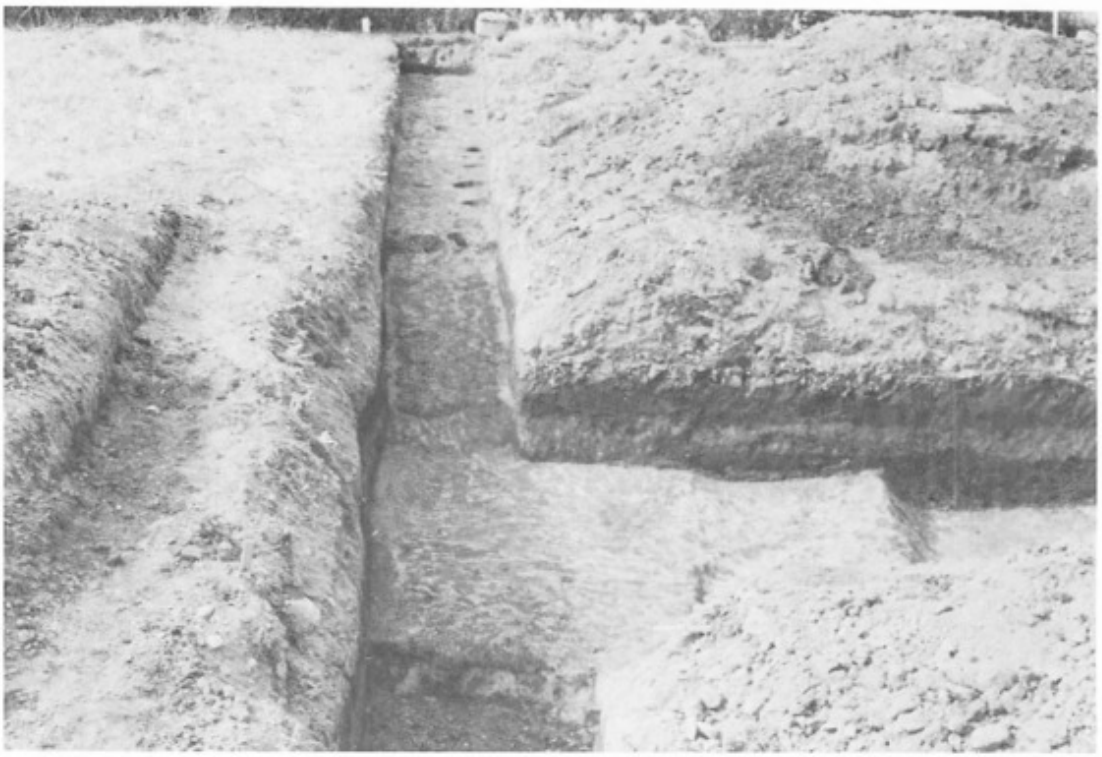
第37－8次調査（北から）

第37－9次調査（東から）



第37－10次調査（西から）

第37－11次調査（西から）



第37－12次調査（東から）

第37－13次調査（南から）

三重県斎宮跡調査事務所年報1981

史跡 斎宮跡

——発掘調査概報——

昭和57年 3 月31日

編集発行　三重県斎宮跡調査事務所
印　刷　光　出　版　印　刷